
転生とチートと復讐そして奴隸

伊村 希人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生とチートと復讐そして奴隸

【NZコード】

N7443V

【作者名】

伊村 希人

【あらすじ】

主人公転生もの、チートあり、奴隸あり、ハーレムあり、グロあり、ちょいエロありの異世界暗躍譚。

一体何故転生したのか……。そしてその理由を知った彼はどう生きていくのか。今、幸せを打ち碎くべく蠢く策略の糸が十重二十重と彼らを絡めとろうとしていた……。

陰謀の災禍に呑まれた者の復讐が今、幕を開ける。

ただいま迷走中ですが、どうか温かい日で見守つてやつて下さい。

プロローグ（前書き）

今作品には残酷な描写や軽い性描写があります。

それらが苦手な方はお戻り下さい。

それでも構わない人は読んで下されば幸いです。

プロローグ

俺は床につき、寝付く前によく思つ。

これが現実なんだろうかと。

その思考の原因は今、自分の存在している世界とは全く違う風景の記憶。

だがハツキリとではなく、やや曖昧なビジョンで、だが。これを毎日繰り返していく悟ったのが、転生という可能性。この世界では自分の名前を自分で決めるのが流儀。自分で決めるまでは親からは好きな様に呼ばれるため、それをそのまま名前にすることも決して珍しい出来事ではない。だから、名を聞かれたときには、その前世の記憶と思しきビジョンで、自分の呼ばれていた名前を名乗つた。

俺の名は、竹中 右侍（ひさじ）だ、と。

それまでは何て呼ばれてたかって？

垂れ助と呼ばれていた。

理由は聞かないで欲しい。

鼻が垂れていて間抜けな顔が可愛いとか言われてたのはきっとなにかの間違いだと信じる。

さて、明日も朝早くから稽古だし、寝るか。

この世でも寝る子は育つといつ慣習はあるみたいだし。

そうして俺は襲いくる眠気に身を委ねた。

いくらか月日が流れたある日。

朝、俺は日の出から程ない時間が経つてから起床。いつもと違い、少し緊張感があるせいか早く目が覚めた。体内時計では午前5時半ぐらい。

そもそもベッドから起きだし、居間へと向かう。

いつものことだが、居間のテーブルにはもう朝餉が並んでいる。

「あら、あーちゃんより早く起きてくるなんて珍しいわね、ゆーちゃん」

俺に声をかけたのは、俺の義理の母の枝梨だった。えり

もう四十ぐらいの年齢だが、見た目はどう頑張つても二十代前半の容姿。

つい最近もナンパされたと嬉しそうに語つていた。

それなのに毎朝必ず俺達より早く起き、朝餉を用意し終わっている。

それだけではないが、良妻賢母とは彼女のことなのだろうと疑いの予知がない。

ところで、今日は俺より早く起きている奴もないし、朝餉の準備はまだ完全ではない。

それだけ緊張もしてゐし、氣負つてもいるんだと思つ。

「母さん、手伝つよ」

「ふふ、気持ちはうれしいけど、今日は大事な日でしょ？ もう出来上がつてゐる」飯から食べはじめなさい

枝梨に促され、大人しく食卓に着き、朝餉に箸をつけた。

いつも通り栄養が考えられているメニューだ。

黙々と食べていると、いつもは俺より早起きな血の繋がらない妹（ただし、同じ年）である亜里沙が、いつものピンクの寝巻を纏つた姿で眠そうな眼を擦つて現れた。

血は繋がっていないとはいえ、自分とは違い、綺麗に伸びた茶色の髪、抜けるような青空を詰め込んだような空色の瞳、高すぎず低すぎない鼻、桜色の小さく柔らかそうな唇。

枝梨に似てものすごい美人になる確信がある。

同じところに住んでいるんだから、俺の顔にも何かいい影響を与えて欲しかったものだ。

ちなみに鼻は俺のコンプレックスなので彼女の鼻を密かに羨んでいる。

顔だけでなく、体つきも十四歳にしては十分な発育を遂げている。バストは……八十三。

うん、眼福だね。

「あれ、なんでもう右侍が起きてんの？ いつもお腹出してだし無い顔して寝てる時間なのに」

性格についてはノーコメント。

家柄か、俺の知っている女らしいには程遠い気がする。でも見た目から性格を差し引いても全然プラスだと思う。

主にバストが点高いと思う。

なんでバストサイズとかが分かるかつて？

実はある集中状態に入ることでその人物の情報が頭に入る。

俺は便宜上これを『分析』と呼んでいる。

これは俺だけに出来るようだ、というのは検証済み。

ちなみに枝梨のバストサイズは九十ジャスト。

ちょっと激しいアクションをすれば揺れる揺れる。

「……ちょっとお、お母さんへの視線が怪しいよ、ヒロゆーじ」
はつ、つい枝梨の胸元に視線が……。

しかし当の本人、枝梨は咎めるビビリが「いやん（はあと）」てな感じで胸を隠しただけだった。

とまあこれが家主が起きて来るまでのいつもの掛け合いだつたりする。

……朝から、それも朝餉前（もしくは最中）にするべき会話ではないと認識はしている。

「んで、H口ゆーじは今口なんかあんの？」

俺の向かい側に座つた亜里沙が、朝餉に箸をつけるなりそう切り出した。

「ああ。白兵戦があるんだ。今度の戦に初陣出来るかはこれの評価次第つて感じかな」

そう、これが俺が早起きしてしまった理由だ。

白兵戦は昼からなので別に早起きする必要はなかったのだが、午前中に身体を動かしてあつためておこうという腹積もりでもある。

「ふーん。ま、趣味で武術やってる私とはやっぱ違うよね」

俺が毎日武術や魔法を稽古する中で、亜里沙も武術だけ稽古に参加しており、もう今の段階で大人が相手でも充分に与できる腕前だそうだ。

流石に現役の兵士には勝てないみたいだが。

ただ、同年代の女子の中では無類の強さらしい。

ここまで全て断定でないのは全て伝聞で、俺は稽古漬けで夜はあまり長く起きていられないためだ。

逆に俺は普段、現役の兵士達と稽古するので同年代の中での強さは分からぬ。

が、今日は同年代でも腕に覚えのある奴が参加するところでの緊張もするし、手合わせをするのが楽しみもある。

「お、みんなおはよう」

そこへ一家の大黒柱の宗玄が居間に現れた。

普段は凜々しいナイスガイなんだが、戦場では戦鬼という二つの名持ちの武官だ。

御歳四十ぴつたしなのに身体は鋼みたいな筋肉で覆われている。

男の俺でも惚れそうな肉体なんだが、俺にそつちのケはなくて良かったと思う。

「枝梨、言つてあつた通り今日は毎から右侍と外府に行つてくるよ」「はいはい。右侍、頑張つてね。選抜されたらお母さんいつぱいなでなでしてあげるからね」

……なんかご褒美が間違つている気がしたが、悪い気はしないので黙つて享受することにした。

ちなみに外府とは役所のことで、この国（魔物の侵入対策用の防壁の中にある一塊の都を国と呼ぶ）の中にある城の一一番外側の城壁（高さが大体三メートルはある）の内側にあり、主に軍事を担当している役所で、演習場という広いグラウンドみたいなところが二つ程あり、今日の白兵戦もそこで行われる。

外府から一つ城壁の内側に入ると内府という役所もあるんだが、そつちは内政担当で文官達の仕事場で、国王のいる宮殿はその城壁のさりに内側に位置している。

「……ふう。じちそつさまでした。親父、先に稽古場で身体動かしてくる」

食器を片付け、枝梨に軽く頭を撫でられてから稽古場へと向かつた。

どうにも緊張でじつとしていることが出来ないみたいだ。

稽古場に着くなり使い古した木刀で素振り、技の型の確認。

そして魔法を交えた自「口流コンボ（親父にも内緒で編み出した）も練習する。

（口）で魔法についてだが、純粹な属性で分けるなら《火》、《水》、《氷》、《土》、《風》、《電》、《光》、《無》、そして《闇》の九種類。

そして一般的には生れつき自分に備わっている属性の素質がある。

しかし、実戦などで活躍できるのはほんの僅かしかいない。

理由は、魔法を鍛える環境が整つてないものもあるが、一番は純粹

な属性でないことだ。

例えば、《火》と《土》の属性の素質を半分ずつ持っていたとする。

その人が《火》の魔法を使おうにも、純粹に《火》の属性の素質を持つ人の半分しかないのだから詠唱に手間もかかるし威力も半端、さらにはまず習得するのにも時間がかかる、と言った具合だ。

なので生れた瞬間に魔法で飯が食えるかがほとんど決まってしまう。

なのに俺は何故か《火》と《雷》が両方とも問題なく使える。

昔に読んだ資料のお陰で自分が中々異常な存在だと知ることが出来たので、家族の前であっても魔法は使わないようになってしまった。もう三年は過ぎただろう。

我流でなんとか魔法を具現化することができるようにになったが、ここでもまた一つ一般的とは言えないことが俺に起こっていることが分かつた。

それは、普通魔法とは、相手に向かって火を飛ばしたい場合、まずは頭上や目の前で火を作り出してからぶつける。

しかし俺はなんと指定した事物に対象を合わせて魔法を発動すると頭上などではなく、その事物に直接魔法を発動させることが出来るのだ。

つまり、火をぶつけたいと思って魔法を使うと、その相手がいきなり火だるまになるということだ。

これも稽古場で検証済み。

以上が自分の実験。

異世界に生まれ変わつて（なんでかは記憶にはないが）恐らく付加されているだろうチートは、ぶっちゃけると、え？ そんだけ？ w つと言つた感じ。

なんだか、せちがらいぜ。

てな訳であつもなく午前は終わり、枝梨の作つた少し早めの昼餉を頂いてから外府へ親父と一緒に向かった。

2 (前書き)

ちょっとまだチートが目立たないので、もどかしいかもしれません。
あと、転生についても後々にまつきりするのでお待ちいただけた
幸いです。

外府にある第一演習場は所謂スタジアム型になつており、審査官は客席に当たる部分から全体を見回すそうだ。

その第一演習場には既に多くの参加者が集まっていた。

「右侍、まさか緊張しているのか？」

登録所に並んでいるとき、親父がそんなことを言つてきやがつた。

「まさか。てか親父こそ審査官席行かなくていいのか？」

「まあ一つ助言してやる。絶対に周りに釣られて突撃するなよ」

俺の返事を待たずに親父は審査官席のある上へと向かつて行つた。そして俺の番になつて登録、番号を割り当てられ、氏名と得物の刃引きされているのかを確認して終了。

登録時に見た名簿から見ると大体俺で千人と少しか。

登録終了後、一人で試験会場となる演習場の端に腰を下ろし、精神統一することにした。

「やあ、君も参加者？」

するといきなり声がかかつた。

ここにいる時点でそんなことを聞くのは明らかに愚問だが、敢えて指摘する気もなかつたので声の主を見る。

俺と同じ年ぐらいの少年。

着ているものを見る限りでは良家の子息と言つた風情。

それで且つ腕に覚えがあるから来たのだろう。

得物と思われる、使い込まれた長めの木刀を引っ提げている。

「ああ。雑兵として初陣はしたくないからな」

言い忘れていたが、これは雑兵ではなく士官を選抜する白兵戦である。

なので、上位で合格と見做されれば、いきなり兵士を百人を配下

に置いて指揮を執るという可能性もある。

「そうだね。僕は、安藤 慎也。君は？」

「俺は竹中 右侍だ。お互い頑張ろっ」

ここまでは年頃の少年同士の自己紹介。

そして気付いたのは、彼の苗字である安藤とは『国』の中の文官達の中でも上位に位置する名家だ。

さりに俺の苗字が竹中と聞いて、安藤の表情が少し変わった。

「……君も、一刀流かい？」

「ああ、そうだな」

一刀流とは、刀一本で戦うというスタイルのこと。

恐らく得物である木刀を見てそう判断したのだろう。

「なら、尚更負けられないなあ」

口調はおどけすら感じさせるものだったが、顔は武芸者そのものだった。

ただのボンボンとこわいとではなくさうだ。

「やはり師は父親かな？」

「そうだな。父以上の師はいないと信じてる」

俺がそう言つと、安藤は苦笑いを我慢しているような顔をした。まあ悪い感情は持たれていないと思つが。

「師は良くても本人の腕次第さ。お、始まるみたいだな」

なんとなく、宣戦布告されたと感じた瞬間に銅鑼の音が鳴った。

その中心にいる、小さな飾りの付いた兜を被つた兵士が大声を張り上げている。

「白兵戦の参加者は全員こゝに注意をむけろー！」

銅鑼の音がした方を見ると、進行役らしい甲冑を着た兵士数名がいた。

その中心にいる、小さな飾りの付いた兜を被つた兵士が大声を張り上げている。

「よーしー いいかあ、まずは確認だが、ちゃんと登録をしてこい

に来ているか？ 飛び入りは認めん。 次に、ちゃんと刃引きされた得物は持ってきているか？ これは登録時に確認済みだが、もう一度確かめろ！

父の話によると、毎年何人かは必ず真剣の武器を持つてくる者がいて、必ずと言つて良いほど死人が出るらしい。

一応自分の木刀を一瞥し、真剣でないことを確認する。

「では次に、白兵戦の説明だ！ いいか、今から兵士が縄を引いていくから、その縄から俺から見て右が白、左を赤組とする！」

そう宣言するなり、俺の程近いところを兵士が縄を引つ張つて行って人の集まりを分断した。

つまり、俺は赤で、縄のすぐ向こうにいる安藤は白組といふことになる。

「それでは、今からそれぞれの組の色をした帽子を配るからそれを被れ！ 既に頭に何か装備している者は帽子に取り替えろ！ 帽子を被らなければ失格と見做す！」

別に異存もないでの大人しく赤い帽子を被る。

大の大人が被ると少しだけ無様だが、すぐに笑いの欲求を抑え、木刀を強く握る。

それぞれの組が演習場の端と端（大体向こう側までは三百メートルぐらいだと思う）に別れ、後は銅鑼による開始の合図を待つだけ。そして、一瞬の静寂の後、運命を決める銅鑼が鳴った。

総大将もいなければ作戦もクソもない突撃。

右も左も雄叫びをあげて突っ込んでいくのを冷ややかに見送り、一步遅れて俺も突撃。

どうやら他にも同じ思考をした人間がいるようだ。 いずれも猛者っぽい雰囲気を感じる。

顔を覚えておこう。

最前線では我先にと突っ込んだ者達同士が文字通りの肉弾戦を繰り広げている。

そこからすり抜けてきた一人の槍遣いと目が合い、自然と対峙する。

初めての実戦だからといって胸を借りるつもりなんかは毛頭なく、俺から躊躇なく槍を切り上げる。

「こいつ」

相手の槍遣いは切り上げられたままの槍で俺が追撃に放った袈裟切りを受け止めるとそのまま押し返す。

「どりやあ」

そしてすぐに体勢を整えた槍遣いの鋭い胸への一突き。

なんとか木刀で軌道を逸らすと、再び敵の懷へと潜り込み、木刀ではなく蹴りで体勢を崩させる。

その狙いは的中し、腹に蹴りを受けた相手は数歩たらを踏んで前を見るが、次の瞬間にはお手本通りの軌道から袈裟切りをその身体に受けた。

槍遣いはその場に大の字で倒れた。

本当なら手を貸してやりたいが、もう次の相手がそこに迫っていた。

さつき最前線で見かけた、デカイ団体に似合つたゴツい木刀一本を振り回していたスキンヘッドの男だ。

「うがああ！」

その咆哮に一瞬身体が竦んでしまうが、土を蹴つて素早く男の懷に入ろうとするが、男の膝蹴りが頬を掠めていった。

「あっぶね……」

無意識に放つた言葉だが、どうやらスキンヘッドはそれに気を良くしたらしく、さつきよりも大きな咆哮を上げて間合いを詰めてくる。

しかしそれが彼の致命的なミスだった。

そして彼は激しく動搖した。

目の前の少年が、自身の繰り出した一本の木刀の斬撃（実際には切れないが）を受ける瞬間に田の前から消えたのだから。

「がつ……は……」

漏れだした苦悶の声の主はスキンヘッド。

彼の腹にはしっかりと少年 右侍の木刀がこれでもかと言つぐらい食い込んでいた。

手応えを充分に感じた俺は木刀を男から離した。

そしてさつきの槍遣いと同様にそのまま倒れた。

今はしつかり技の型通りに出来た、と自分を褒める。

しかし今はそれ以上の満足感に浸る間もなくさらに敵が俺に殺到するのに対応する。

それから何人かを切り伏せたところで、偶然か必然か、すぐそこに安藤の顔があつた。

斬った敵の反り血に塗れている なんてことはなかつたが、それを彷彿とさせる雰囲気が彼を包んでいた。

ここが本物の戦場で、目の前の敵を情け容赦なく屠つてきた歴戦の勇士のような雰囲気……。

俺はすっかり彼の雰囲気に呑まれていて、今斬りかかってこられてもろくに反応出来ずに打ちのめされてしまう。

しかし、安藤も同じように雰囲気に呑まれたような表情をしていた。

それに意外感というべきか、驚きというか、何とも言えない気分

を感じた。

「 真剣勝負だ、来い右侍！」

「 もちろんだとも、慎也！」

木刀を構え直し、二人の間に火花が散つた。

そしてしばらくの対峙の後、お互いが同時に木刀で切り掛けた。

3 (前書き)

まだまだこれからチートがでてきます。
感想なんかも書いて下さるとありがたいです。

乱戦と言つに相応しい状態になつた演習場で、対峙するたつた二人の周りの空間だけ、まるで切り取つてきたかの様に静かだつた。そしてその静寂を破つたのは同時。俺は袈裟切りの構え、安藤は喉元への突きの構えで一気に間合いかが詰まる。

安藤の方が得物にリーチがある分有利で、俺は袈裟切りを中止し、安藤の木刀を払う動きに切り替える。そして激突。

激しい鍔せり合い。

先にアクションを起こしたのは安藤。

一旦後ろに下がつたので、追撃の為に追う。防御の姿勢にあるのを見て、体重を乗せて木刀を振り抜く。しかし、手応えはなく、木刀は空を切つた。その時点で、俺は安藤の罠にかかつたと自覚した。恐らく並の男なら、ここまででもう次の瞬間には地面に這いつくばつているだろう。

俺も、恐らく安藤もそのビジョンを思い描いた。

しかし、何故か木刀はやって来ない。

よく見てみれば、安藤の木刀はゆっくりと俺の肩口ににじり寄つてきている。

所謂、スローモーションといつやつだ。

俺はその木刀の描くだらう軌道から身をすりし、安藤のがら空きの横つ腹に木刀を突き立てた。

そして、安藤の身体はくの字に曲がり、そのまま後ろに倒れ込んだ。

安藤との決着がついたところで、俺は自分の身に起きたことを理解出来ずに立ち尽くした。

確かに、俺は安藤に誘われるままに一撃を空振りさせられ、返しのカウンターをもらって倒れるはずだった……。

しかし、現実には（恐らく有利得ない速さで）安藤に反撃（というより先制攻撃）をしたのだ。

全く経験したことのない、まるで人外な……。

待てよ、これはまさかチートってやつじゃないか？

既に魔法に関しては常識外れのチートを確認済みだが、こう言った身体的なチートは初めてだ。

もしかして、こんな感じで元々チートが俺に備わっているのだが、条件を満たしていないから発現していないだけなのか？
だとすれば理屈は分からぬでもない。

魔法は普段でも使うことがあるので生れつきチートが発現していだが、今のスローモーションは俺が初めてこいつ言つた危機を迎えたから発現したのだろう。

なら、極端なことを言えば常に極限まで危機的な状況で過ごしていればどんどんチートが発現するんじゃないかな？
まあ嫌だけど。

そんなことしたらチートが発現する前に精神が参つてしまいそうだが。

「邪魔だガキイ！」

「へ？」

目の前にこん棒。

そしてスキンヘッドの同類つぽそつな筋肉男。

そしてこじは白兵戦とは言え戦場。

まあ、詰まるところの話、吹っ飛ばされた。

スローモーションになるんじゃないのか？なんて思いながら意識を手放した。

「…………」

ぼやける視界に映る景色にやがて焦点が合い、ここが家だと気が付いた。

そして、枕元のランタンに光が灯っているのを見る限りもうすっかり夜だとも気がつく。
ゆっくりと身を起こすと、頭に激痛が走った。
手を近づけると、包帯が巻いてあったあたり、そこがこの怪我なのだろう。

まだ平衡感覚がぼやけているので壁に手を突きながら居間に戻ると、枝梨と亞里沙がいつも飯を食べるテーブルの席に座っていた。
そして、俺から声をかける前に枝梨が気が付いた。

「ああっ、ゆーちゃんあんっ！」

席を飛び出し、俺に抱き着いた枝梨。

ちょっと氣絶していただけだろうにこの始末。

それと、俺から見ると少し身長差があるので恋人が抱き着いているみたいな構図になつていて。

そしてお腹と胸の間辺りに、柔らかい膨らみがこれでもかと言わんばかりに存在を強調していく。

と、豊満な身体を離したところで枝梨の手が俺の頭へと伸びた。
「母さん、ちょ、頭撫でると……」

いつもの癖で俺の頭を撫でようとした枝梨をなんとか抑える。「あっ、『めん』めん。つこつかり

その後に可愛らしく、てへつ、とは言わなかつたが容易に脳内再生が出来た。

うん、おこしいです。

「ホントに心配したんだよお？　お父さんがグッタリしたゆーちゃんを抱いで帰ってきたんだもん。　お母さんが気絶しそうだつたんだからね」

本当に心配してくれてたのだろう、田が少し赤い。
「つたく、どうせ舞い上つちゃつてボーッとしてたらやられたんでしょう？　情けなつ」

……自分に起きたことが理解出来なくてボーッとしてたのは否定できないが、この言われようには苦笑しか出ない。

しかし、怪我して気絶ましたんだから優しくして欲しい、なんて女々しいことをこの義妹に言つても仕方がないことは十分過ぎるぐらいに分かつていい。

その証拠に、彼女も目が赤い。

「もう起きてて大丈夫なの？」

「ああ、多分ね。　あれ、父さんは？」

俺を運んでくれたという家主がいない。

「……お兄ちゃんを殴つたつていう傭兵崩れに対して、危険行為による失格を主張するとかなんとかつて言つて出てつたわ」

亜里沙はため息でも吐くかの様にそう言つた。

普段、稽古中などは厳しい父だが、こういった親バカ且つ愛妻家な一面があるのを久しく忘れていた。

前にも街で亜里沙が「ロツキにけつこう強引なナンパをされた時、たまたま近くにいた父が公衆の面前で愛刀を抜いて切り掛けたときは本当に大変だったらしい。

一緒にいた父の部下の半数が父を抑え、残りで「ロツキを抑えたとか。

またある時には、枝梨が変態に出くわした時に詰め所に連行されたその変態の首を密かに撥ねようとしたこととか、今回のこととか。まあとにかく家族愛の凄まじい人だ。

戦場では容赦ない鬼みたいな活躍をするのだが。

「とりあえず、腹減つたな……」

と、同時に腹が鳴つた。

「じゃあ何か簡単に作るから待つてねん」

いつもの明るいテンションになつた枝梨が台所に向かつた。必然的に亜里沙と一人つきりに。

「もうご飯て食べたのか？」

「とつくな。母さんはお兄ちゃんの側から離れたくないって言うから、私もお兄ちゃんの部屋で食べたわ。父さんは向こうで食べるっぽいけど」

向こう、と言つのは外府で、という解釈で間違つてないと思つ。どちらにせよ、採点をして合格者を発表するのは明後日なのだから父さんも仕事が詰まつているはずだ。

ちなみに結果に関して言えば、合格は絶望的だと踏んでいる。合格するには、白兵戦ぐらいいフルで戦えるのが基本だと聞いた。そして俺は不注意で氣絶、もしかしたら途中棄権扱いだったのかもしれない。

まあなんにせよ、初陣はお預けになりそうだ。

それと引き換えにと言つべきか、新しいチートと、ライバルを見つけることが出来たのだから結果オーライとすることにしよう。「はーい、お待たせ。お母さん特製の元気スープだよ~」良いくらいのするカップを受け取り、一口。

「うまい」

「良かつた。まだまだあるからいっぱい飲んで元気つけてね」正直なところ、もっと肉とかそういうものを食べたかったが、武将の妻でもある枝梨の判断だ。

きつとこういうものから攝取するのが良いのだろ。なので特に文句もなくスープを頂く。

「ん、お代わり」

「はいはーい」

空になつたカップを枝梨に渡すと、二二二二と笑いながら嬉しそうに返事をして台所へと戻つて行つた。

そして言葉にこぼ出さないが、亜里沙も安堵したように俺の方を見ていた。

そしてその日俺は、スープの温かさを感じた後、家族の暖かさを感じながら床に就いた。

4（前書き）

ギャグセンスが欲しいです、はい。

指摘など、感想を頂けると大変ありがとうございます。

書き留めはしないのでいつ途切れるかは分かりません。

目が覚めた。

俺は頭に軽く痛みを覚えつつ身体を起こした。

窓から外を見ると、太陽はいつも朝見るより高い位置にある。前世時間で行けば大体十時～十一時ぐらいか。

こんな時間まで寝ていたのはいつぶりだろうか。

いつもと違う朝を迎えて不思議な気分を味わいつつ廊下を渡り、

居間に入ると、枝梨が縁側でひなたぼっこをしていた。

「おはよ」

「あら、お寝坊さんね。 おはよ」

枝梨はそう言うと、バターを塗ったパンと昨日のスープをテーブルの俺の席に支度してくれた。

美味しく朝餉を頂いた後、俺は枝梨からお使いを頼まれたので市に繰り出した。

ちなみに亞里沙は既に稽古中。

さて、このデニア王国はハツキリ言ってでかい。

城壁の端から端まで歩くだけで半日弱かかる。

なので四つのブロック（北西、北東、南東、南西）に分けて商店や市が立つ。

そして俺は一番近所の南東の市にやつってきた。

「やつぱスゲー人出だな」

行列があつたりするわけではないが、冷やかしの客だつたり旅人なんかがいるもんだから通行はかなりしにくい。

「あ

「ん？」

見覚えのある顔……しかし友人なんて数える程しかいないので思い出せない方が不思議だが、はて。

まだ本調子じゅないのかもしれんな。

「君、右侍君だよね？ 昨日は負けたけど、戦場では負けないよ」

……ああ、安藤か。

昨日と全く雰囲気が違うので別人みたいだ。

「今暇かい？」

「いや、お使い中なんだ。 すまんな」

「なら手伝うよ」

好意的な申し出を断る謂れもないで同行することにした。
本音を言えば、可愛い女の子が良かつたと思わないでもなかつた
が、こういうライバル関係も悪くないと思い直す。

お使いで頼まれていた物を全て買い終わつたところで、話は昨日の戦いについてに移つていった。

「右侍は、どうやって僕のカウンターを返したんだい？」
やはり、というか当然と言うべきか気になつっていたみたいだ。
なんせ俺も気になつてるし。

多分、チートだらうという結論は出てるが。

「……反射的にだよ。 防衛本能的な」「なるほど」

言葉では納得しているが、まだ完全には納得していない様子。
俺も確証がないから隠していることにはならない……よな？
そうして市から出て一本通りの少ない道に出た瞬間、明らかにゴロツキなゴツい低脳そうな男の群れに囮まれてしまった。

「兄貴、「コイツか？」

「ああ、この凶悪な目つきに高くない鼻……間違いねえ」

……十中八九俺のことだな。

ちなみに安藤はどちらかと言えば美少年。コンプレックスになりそうなバーツがなさそうで羨ましいこいつです。

ていうか鼻は俺もコンプレックスだが、田つきは新しいコンフレックスになりそうだぜちきしじうめが。

「ちょっと、シラ貸してくれよ」

「……嫌だと言つたら？」

その言葉に呼応して、男の輪が少し縮まる。

「有無は言わせねえ。てめえの親父のせいで俺は失格にされちまつたから、その礼だ」

「お前が例え合格だったとして、お前に率いられる兵士が可哀相だ」俺がそう言い放つと、リーダー格（俺を氣絶させた男）の顔に青筋がくつきりと浮き出た。

やっぱ乗せられやすいんだな。

俺も安藤も冷ややかな表情を隠さない。

「と、とにかく、来てもらうぞ……」

ここで騒ぎを起こすのも面倒事になりそうなので、大人しくついて行く。

これ以上挑発すると本気で男がここでブチ切れそうだ。

連れてこられたのは、どこかの屋敷の廃屋だった。

道中は目隠しをされていたので、詳しい所在までは分からぬ。まあ『分析』を使えば分かるんだろうけど

と言ひ訳で、一対十という圧倒的不利……人數的には。

「さて、どうとつちめてやろうか」

リーダー格の男が舌なめずりをした。

すると、部下の一人が面倒そうに欠伸をした。

「兄貴い、俺はこいつらみたいなむせこ野郎なんかさつさと片付けて女と楽しみたいぜえ」

「そうですぜ、久しぶりに拾ったの女なんですからもつと楽しめたってのがみんなの本音なんすよ」

「そもそも女の分も含めて食料買いに行つただけなのに、兄貴が因縁つけに行つちゃうから」

……部下の統率も出来てないのによく白兵戦に出でこれたものだ。そして、女つて……。

「おい、お前達。女つてまさか……」

「ああ！？ 女は奴隸商に買われる前に俺達が拾つてやつたんだよ！」

「いひひ……。

「お前、いら」

「貴様ら絶対に許さんっ！ 安藤家次男、安藤 慎也参るつ！ 俺が言い切る前に安藤がそう言い切ると、素手で男達に挑みかかる。

「こいつも大概だつたか。

「てめえらかかれえ！」

「不本意だげど、いぐべえ！」

「イケメン滅ぶべしつ！」

「そんなことより女抱きてえ！」

しつかりした意思の疎通はとれてないみたいだが、一斉に男の群れが安藤に向かつて行くので俺も参戦する。

「ぐえつ」

「ひぎい」

安藤は先頭から迫つて来る一人を掌底と上段回し蹴りで沈黙させる。

「」の出来事は俺が安藤に追いつくまでの間、約一秒半。

「竹中 右侍、参るつー！」

「ふおつ」

「べからり」

「ペおひ」

……普通の奴はいないのか……。

おひと、それよりも戦闘に集中、集中。それにしても、もう半分片付いたのか。

「てめえら、武器を使え！」

「へいひー！」

「らひしゃー！」

「じ」注文はー？」「

……もう突っ込まない。

突っ込んだら負け。

「氣絶ゴロツキの盛り合わせでー！」

つて安藤あおおー

そんなことしたら……。

「畏まりましたっ！」

「しばらくお待ち下れこひー！」

「つてなんでやねんひー！」

ほり、めんどくさい絡みになる……。

もひいー。

「しつ」

剣を握ったモブの顔面に裏拳、手斧を持ったモブに正拳突き、最後に両手剣のモブにアッパーを喰らわせてこれ以上のめんどくさい絡みを排除。

こら、安藤、心なしか悲しそうな顔をするな。

そんな安藤も二人を始末したので、残りは大将格のあの男だけだ。

「……後はお前だけだ」

「一気に片付ける……」

「くくそー！」

自棄になつたのか、がむしゃらに得物のこん棒を振り回しながら飛び込んできた。

「「せやつ」」

俺と安藤の同時正拳突きで男は廃屋の壁に叩きつけられた。

はい、処理完了。

安藤とハイタツチなんかして奥に進むと、薄い布を纏つた女の子が三人……。

「「ひつ……」」

一人は怯え、もう一人は違つ反応を見せた。

「お兄ちゃん……」

「お兄ちゃん、ですか。

「お兄ちゃんあああん！」

突然過ぎる感動の再会に俺と女の子二人は固まる他なかつた。

「……なるほど、家出した妹を探しに市に出てきてたのか」

役人達に後処理を任せて、俺と安藤と安藤妹、そして女の子一人（由と玲と言うらしい）と外府の詰め所にいた。

「しかしまたなんで家出なんか……」

「それは……」

「癖みたいなもんなんだよ」

安藤妹が言い淀むと、安藤が助け舟を出した。

「癖？」

「ああ、いろいろと事情があつてね……」

それ以上安藤は言葉を続けなかつた。

これ以上の詮索はすべきじやないと判断し、黙ることにした。

「で、この一人はどうすんだ？」

俺は由と玲の方を見た。

二人とも今年で十三歳らしい。

なら、一人で生きていける訳でもなし、奴隸商にさらわれ、売ら

れるのがオチだろう。

実際、二人ともなかなかに美少女だった。

唯は小動物的な可愛いらしさ、玲はクールだが魅力を感じる、てな感じで。

「右侍、預かってやれないかな？ 家はちょっと厳しいから……」

「……おう」

安請け合いな気もしないでもないが、まあ枝梨さえ懐柔できればなんとかなりそうだ。

「よろしくう」

「お願ひします」

……もしかしてあの「ロロシキは」の娘らの口調に感化されたのかもしれんな。

ちなみに、みんな「ロロシキ」の晩酌をさせられてただけで、それ以上のことは何も無かつたみたいだ。

「おう」

美少女一人に返事をし、帰り支度を始めた。
さて、頑張るか。

5（前書き）

お気に入り登録をして下さっている読者様、そして初めて拙作を読まれた読者様も感想や指摘などをして頂けると幸いです。

結果的に、二人の美少女は竹中家で養育することが決まった。勝因は、枝梨を味方に付ければイケるといつ戦略が見事に的中したことだ。

とりあえず詳しいことは後で聞くとして、まずは一人の身嗜みなんかを整えさせることから始めることになった。

「お兄ちゃんて、ものすごく外からトラブル持つてくるんだね」亜里沙の一言が痛烈だった氣がするが、受け流すことにする。父さんは渋い表情だったが、枝梨に説得されて結局反対はしなかつた。

そして最後に、博愛精神の塊みたいな枝梨は始めから大賛成だった。

そして今も……

「唯ちゃんはあ……ゆつちゃんね　で、玲ちゃんはあ……れーちゃん　私のことは、えりりんでもお母さんでもえりりんでも良いからね　よろしくね」

早速愛称を付けて頭をなでなでしまくっていた。

まあ二人とも嫌がってないからいいか。

それにも、なんでえりりんを一回も強調したのだろうか。

「ちょっとお母さん、まずは二人をお風呂に入れてあげてから頭撫でてよ。ほら、おいで」

俺に毒づいてた亜里沙も結局一人の世話を焼くことにしたみたいだ。

そういうことで、四人が風呂場へ行つたので必然的に居間には仕事帰りの父さんと俺しかいない。

どちらも一言も発しないまま、しばらく時間が経つて、俺から口

を開いた。

「……また、来年参加してみるよ」

「何が、とは言わないが、父さんは十分に意を理解してくれたようだ。」

「安藤の次男坊と、知り合つたみたいだな」

「あ、うん」

返事を聞くなり、何やら考え込む父。

何がまずかったのだろつか……。

いかに同じ国の中でも、家同士での裏の抗争なんかもあるといふ

ぐらいだ。

子供同士の付き合いでも大丈夫とは言い切れない。

「明日、これの中身を見ろ」

すると父は一通の便箋を取り出し、俺に手渡した。

「これは？」

「明日の朝見る」

……教える気はなさそうだ。

仕方ない、寝よう。

今頃になつて疲れが出てきたし。

自室に戻つてベッドに身を委ねると、風呂場にいる女性陣の楽しそうな声が聞こえてきた。

「きやーえりりんおつぱいおつきー！」

「不埒……しかもふわふわで柔らかい、だと……！」

「いやん、もうえっちい」

「ちょっと二人共目的を見失つてるわよっ！」

「あらあ、あーちゃんたらまた成長したのねえ……。 右侍は巨乳

ちゃんが好みみたいだし、大丈夫ね」

ちょっと、なんで俺の名前がつ。

「ほんとだー！ お姉ちゃんのおつぱいもおつきにー！」

「くつ……これが持つ者と持たざる者の差か……！」

多分、後者の玲ちゃんは……厨……いや、何でもない。

「 ちょ、三人とも手の動きがやらしいってば！ てかお母さん、一
体何が大丈夫なのよ！ つて、迫つてこないで！ いやあああ……」

…………寝よづ。

うん、強制終了だ。

その後もいろいろまずい言葉が聞こえてきた気がするが、無理矢
理意識を闇の中に押し込んだ。

うん、朝だね。

でも昨日程は寝過ぎしていいない。

よし、まずは昨夜のイベントについては忘れよう。

うん、滅却滅却。

でもその前に、父さんからもう一つ 便箋の中身を確認してみることにした。

どれどれ……。

「 ……竹中 右侍殿、千人頭の任を命ずる故に外府へ出頭すべし、
つてこれ……」

所謂、合格通知つてやつ？

でも合格通知は外府前の掲示板で午後から発表のはず……。

でも父さんがこんな悪戯とかする訳がないし……つまり、本物？

だとしたら、俺千人頭？

白兵戦参加者中、一百～三百人中一人しか選抜されないあのエリ
ート役職の千人頭？

白兵戦参加資格の最年少年齢である十四歳では史上十二人目の千
人頭？

ちなみにその最年少千人頭は全員後には『ニア王国武官の最高位、
征魔聖軍帥^{せいまじょうぐんすい}』にまで上りつめている。

官位の意味は魔物を滅ぼす聖なる軍勢を率いる者、だそうだ。

「 マジで冗談抜きで俺が千人頭……」

こん棒で殴られて気絶してた俺が、か……。

殴った奴は失格になつた上に俺と安藤にふるぼつこにされた挙げ句、役所の厄介になつてゐる訳なんだが。

「行くしかないな」

あくまでも期待はしない方向で。

寝巻から適当な服を着て居間へと向かつた。

そういうえば、服つて前世とあんまり大差ないな。

と言つてもジャージを好む俺にはあまり縁のない話だけど。

前世で読んだ転生ものの小説の主人公よりもよつぱりこの世界に

馴染んでいる気がする。

今の生活のままならチートもそれほど必要ない気がする。

魔法を使う具体的な機会も全然ないし。

ただ、もうすぐ初めての戦いに出るだろうから、新しい発見とかもあるかもな。

さて、外府に行きますか。

朝といつこともあつて大通りは通勤者以外はそんなに人通りも多
くない。

旅人や行商人達で市が賑わう前に外府にたどり着きたいな。
と、家の玄関を出ようとしたところで一組の男女が立つていた。

「安藤と、妹さん?」

「おはよう右侍」

「おはようございます……」

言葉の通り、立つていたのは昨日に引き続gioいオシャレな私
服の安藤と、薄い青色のワンピースを着た安藤妹だった。

こんな朝っぱらからどうしたんだ?と聞く前に安藤が口を開いた。

「まずは、妹が右侍にお礼を言いたいってことだから」

その言葉に反応して安藤妹が一步前に出た。

兄に似て美少女だなあ。

なんか、書道とか茶道とか似合ひそつ。

あれだね、大和撫子つてやつだ。

特に黒髪のロングでストレートつてところがいいよね。

しかし体の発達はまだまだって感じかな。

「あの、兄と共に窮地を救つて頂き、あ、ありがとうございます」

「

……囁んだね。

兄は苦笑いし、妹はせっかくの白い肌が真っ赤に茹で上がりてしまつた。

「……いえ、為すべきことを為したまでです」

どう返礼すべきか悩んだが、スルーして普通に返すこととした。

うん、可愛いから許す。

というよりも萌えたよ。

「も、申し遅れましたが、私は兄と双子の妹の安藤 舞とつ、申しましゅ」

……次は囁むまいと努力したのが、アクセントの位置がおかしくなつてしまつたご様子。

しかも最後に結局囁んでしまつた。

うん、俺は突つ込まないぜ？

ここで突つ込むのは空気が読めてない証拠だよ。

ほら、安藤も無言で頭に手を当てるし。

「おつけ。俺は竹中 右侍だ。右侍でいいよ」

口調を変えたのは、ほら、なんか仲良くなれそうじやん？

「あの、私のことも舞と呼んで下さい」

よつやく囁まずに言えたのは、やはり緊張感から解放されたからだろうか。

初対面の挨拶つて緊張するものだしね。

「よろしくね」

「は、はいっ」

差し出した手に慌てて柔らかいくさい手で握ってくれる。

「さて、妹のお礼と紹介が終わつたところで、いいかな？」

安藤兄が改めてこちらを見つめる。

「おう、なんだ？」

ポケットから小さな見覚えのある大きさの紙を取り出した。
えーっと、確かそれは……。

「今朝一番にこれを右侍の父上殿から受け取つたんだけど、右侍も持つてるよね？」

「これが？」

そう、あの合格通知表だ。

「僕は千人頭に抜擢された。右侍も、抜擢されたんじゃないか？」

「そうっぽいな」

なるほど、安藤も合格してたのか。

「君は……」の任、受けるかい？

「は？」

思わず素つ頓狂な声を上げてしまつたが、安藤の問い合わせを理解していないことも事実だ。

はて、どういう意味なんだろうか。

すると、俺達の間を湿つた風が吹き抜け、太陽は突如湧いた様に現れた黒い雲に覆われた。

6 (前書き)

お気に入り登録して下さる読者様が増えていて、とても励みになります。

評価をしてくださったり感想や指摘、要望などありましたらもっと励みになります。

「どういふ意味だ？」

安藤兄はどこか思い悩んだ表情をしている。

こう言つた表情も様になるのだからイケメンは得だ。

「今まで、最年少で千人頭になつたのは十一人。しかし、白兵戦での時点で実際に合格している人数はその倍以上。それがどういふ意味か分かるか？」

「……ふるい落としがあるつてか？」

安藤兄の言つことが本当ならば、そついつた争いがあるに違いない。

「そうだと思つ。だから……この任を受けるのは僕達のどちらかにじよひ」

安藤兄は決意に満ちた目をしていた。

その瞬間、俺はなんとなく大変なことに首を突っ込んでしまつた気がした。

「どうする？」

薄暗い空間には火の明かりだけが煌々としている。

そこには立派な飾りの付いた冠を被つた男と、それを上回る豪勢な冠、服装をした男二人が向かい合つて座つていた。

傍らには酒の入つた杯があるが、一人とも一口目を口にしてからは目もくれていない。

「……天児は、受けますかな？」

部下と思われる男が切り出した。

「相よ、それをさせるのが主の仕事だろ？」

相と呼ばれた男はただ黙つて頭を下げた。

「王、安藤家の次男坊を接近させたのはやはり上策だつたかと。やはり、競い合つ仲間とやらが天児に良い影響を与えたようです」

「……安藤の童、か」

王は敢えて話を逸らした臣下を叱咤しなかつた。

「長男は文才があり、次男は武の才を持つていると聞いたが……天児とある程度は渡り合えるとはな」

「安藤の次男坊ではなく、天児に問題があると思われます……」

相は直接その目で白兵戦を見た。

否、天児を見た。

だからこそその見解。

「『覚醒』しておらんと？」

だから、王も疑いは持たない。

「はい。 ただ、次男坊との戦いで、最後の剣の一振りには『覚醒』の気配を感じましたが……」

相は少し目を伏せた。

その姿は言い訳をする子供の様にも見える。

「ふむ……。 まずは、主が天児を出迎えてやれ」

言い終わると、王が杯の酒を呑んだ。

「はっ」

そして相は、それに応えるかのように自分の杯を飲み干した。

それは、二人の間での話し合いの終了の合図であった。

俺はその場で答えは出さず、安藤兄妹と外府へと向かつて歩いている。

話題は、あの美少女二人について。

「由ちゃんと玲ちゃんはですね、姉妹じゃないのにとつても息がつてですね、すつごい仲が良いんですよ」

話者は安藤妹こと舞ちゃん。

俺に対しては結局軽い敬語で話すことに決めたみたいだ。

「みたいだな。 昨日も元気にはしゃいでたよ」

まさか、おっぱいおっぱい言つてたなんてことは言えないぜ。 ていうか俺が言つと変な誤解を招きそうだという確信もある。

「ふむ。 押し付けてしまって済まなかつたな」

本当に済まなさそうな顔と声色で安藤兄が謝罪した。

「結果的に家で預かれることになつたし、構わないよ」

俺の言葉で安藤兄は愁眉を開いた。

昨日から思い悩んでいたのかもしけんな。

「さて、外府だ。 つて……誰だ？」

外府前に着くなり、俺達三人の目の前に兵士一人と少しばかり身なりの良い服装をした文官が現れた。

「臣は、内府の院所属文官鹿野にござります。 此度は、安藤 慎也殿と竹中 右侍殿をお連れすべく参りました。 どうぞ付いて来て下さい。」

案内人まで出すとは……やはり安藤兄の言つ通り、何か悪いことがあるのかもしちゃんな。

……丸腰だけど。

「妹も、よろしいでしょつか」

安藤兄の質問に、文官の鹿野は一瞬眉をひそめたが、やがて頷いた。

「では、こちらへ」

そうして俺達三人は大人しく鹿野の後に付いて、内府の中へ入つて行つた。

「ここでお待ち下さい」

大きなテーブルのある部屋へ通され、席に着いて待つ。

向かつて右から、俺、安藤兄、安藤妹の順にだ。

「……なんか無駄にドキドキするなあ」

「そうだな。最低限の警戒はすべきか」

何気なく呟いただけだが、安藤兄は生真面目に答えた。
確かに、普通ではないよな。

たつた十四歳の少年が、人を千人従える地位に立つかもしれない
なんて。

「お待たせしましたな」

向こう側の扉から立派な冠を被った初老の男が現れた。
顔は少しばかりシワが寄っているが、衰えている感じはなく、ヒ
ゲが白と黒が混じり合っているのが印象的だ。

「私は、デミア王国宰相の平岩 レイビアにござります」

平岩は軽く頭を下げて自己紹介をした。

レイビア……移民と原住民のハーフか。

漢字の名を持つ者は所謂、移民であり、カタカナの名は原住民を
表すそうだ。

移民してきたというのもず——と昔の話らしげが。

「ああ、君達のことは知つておる故自己紹介は不要。さて、お二
方」

ここで平岩は言葉を切り、俺と安藤兄に目線を送る。

「引き受けて貰えますな？」

平岩の言外には、俺達の拒否の一文字を封じ込める一コアンスが
感じられた。

つまり、選択ではなく、確認。

いや、決定かもしれない。

有無を言わせない目線が、俺と安藤兄とに交互に注がれる。

「……申し訳ありませんが」

「父上殿は、お元気でござりますかな？」

「つ……」

平岩の言葉は安藤兄を動搖させるに十分だった。

古典的かつ有効な手段。
典型的な脅迫だった。

「……」

「竹中殿も、父上殿はお元氣でいらっしゃるますかな？ 先日は白兵戦を
ご一緒に審査させていただきましたなあ」

安藤兄の口を封じ、俺への奉制を成功させた平岩は、控えていた
文官から何かを受け取った。

「こちらが、必要な書類でござります。 直筆の署名を、こちらの
筆でお願いします」

差し出された書類と筆を受け取り、時が止まる。

今は書類に目を通していい、という理由でこの時間の停滞を説明
できるが、それも過ぎればただの躊躇いだった。

「……どうされましたかな？」

まるで心を読んでいるかのようなタイミングで、平岩はわざと誇
しんだ。

「……」

安藤兄の顔には脂汗が浮いていた。

断るに断れない状況に危機を抱いているのが、俺からも簡単に見
て取れる。

俺はと言えば、言質以外にこの男が俺達を追い詰めたトリックを
ようやつと看破した。

そう、さつきから感じていた違和感の正体にやつと気付いた。

「この書類に署名が

「 隨分とずるいな、宰相さん」

いきなりの俺の発言に、平岩は表情を険しくした。

「何が、ですか？」

口調こそ丁寧だが、声色には刺を感じる。

だが、そこはこの際無視する。

「卑怯だぜ、宰相さん。 まさか、魔法で俺達の意識を追い詰めて
たとはな。 今まで気付かなかつたぜ」

平岩は反論せず、じつと俺を見ている。

「唯一、舞ちゃんだけが魔法の妨害、対抗を試みていた、というより今さつきまでしていた」

ちらりと舞ちゃんを見れば、かなり消耗したのだろう、荒い息をし始めた。

恐らく今までかなり集中していたのだろう、蓄積された疲れがドッと出た様子。

安藤兄が舞ちゃんを支える。

「そして、俺が最後に粉碎した。『無』属性の、精神干渉魔法……俺達に口頭で確認を取ったときに、いきなり高密度の魔力で発動したんだろう？」

俺がそう言ひと、平岩はカラカラと笑つた。

「何がおかしい？」

そう言ひ自分が少し滑稽に思えたのも無視しよう。

「いやはや、流石は千人頭候補だ。しかし、今回は次第点ですかな。いや、十分に優秀ではあられるがな」

「試したってのか？」

平岩はまだ小さく笑つてゐる。

「くくく……。いや失礼した。一応、魔法に関する試験のつもりじゃったんじゃが……安藤殿があまりにも疎いものでな。つい年寄りの戯れが過ぎてしまったの」

安藤兄はかなり微妙な表情をしているが、平岩はそれについては何も言わなかつた。

「さて、この分で行くなら……。竹中殿は単独でも任せられるが、安藤殿をどうするか……」

平岩は少し考え、やがて舞ちゃんに田線を移した。

「よし。では、竹中殿には単独で千人頭を任じ、安藤殿には妹君と二人で千人頭を任じよう。もちろん、名義上は安藤殿が千人頭じゃが、妹君を蔑ろにすることもせん。この条件で、千人頭引き受けて頂きたい。非礼はお詫び申し上げる故、頼む」

初めて平岩が頭を下げた。

そして、安藤の返事は……。

「……わかりました、引き受けさせて頂きます」

その返事に、平岩だけではなく、舞ちゃんも安堵の表情を見せた。

「しかし、私が聞くのも難だが、何故こんなに簡単に承諾をして頂けたのかな？」

安藤兄のあつさりとした答えに安堵しつつも、やはり引っ掛かるところがあるのだろう平岩が問う。

「……自分の未熟さを承知で、榮誉ある職に任命したいとおっしゃつておられるのですから。そんな貴重な機会を逃す『氣は』や『ません』

安藤兄は涼しげな声音でそう告げた。

しかし、それはここへ来る前までの意見とは真っ向から食い違つてゐる。

「平岩様。自分は、こちらの竹中殿と天秤にかけられ、より相応しい方を選ぶのだと疑つておりました……。ですが、実際は抜き打ちで魔力試験を行つて最終決定を行つた。そうですね？」
すると、またしても平岩は笑つた。

「なるほどなるほど、流石は安藤家の子息であられる。『』賢察、恐れ入る。誠、その通りで『』れる」

「つまり、安藤の言つてた『ふる』に落としつて……」
俺は平岩がいるのに安藤、と呼び捨てにしていた事実に気付かなかつた。

「抜き打ち的な魔法審査に『』ざいます。いや、なかなかに興味深い」

そうか、安藤兄はその事実と自分が魔法面においては弱いという事実を受け入れた上での答えが、承諾であつたのだ。

これ以上の試験がないとも言い切れないと呟つた。

「さて、竹中殿はどうされるかな？」

『』の平岩の表情からは何も企みは感じられない。

ならばといふことで、一応信頼してみることにした。

「……本当に一人とも承諾しちゃって良かつたのかな」

内府を出て、外府の演習場を横目に俺は咳いた。

不安と言えば不安だが、安藤兄が大丈夫だと判断したのだろうから気にしないことにしよう。

「大丈夫だろ。 魔法に不足があれば不採用を言い渡されていたと思うし。 舞のおかげだ」

そう言つて、安藤兄はまだ少し消耗している舞ちゃんの頭に手を置いた。

「えへへ」

輝かんばかりの可愛らしい笑顔。
いかん、萌えてしまった。

「さて、これでいよいよ千人頭があ。 部隊編成が決まり次第、軍事演習にも出なくてはな」

そうだった。

この一日間程は全く稽古をしていない。

鈍つてはいないだろうが、これ以上放置は危険だな。

せつかく新しいチートが手に入つたっぽいんだし、どういう条件下で使えるのかとかを検証しなくては。

でも、普段の稽古では使えないような気もする。

こん棒で殴られたときもそうだったし。

「なあ右侍。 一つ提案があるんだが

「ん？」

何だろ？ つか、藪から棒に。

「週一ぐらいでいいから、試合をしないか？ せっかく知り合えたんだし、これもなにかの縁だと思って」

「それは願つてもない提案だな。 いらっしゃいを頼む
ものすごく都合良く、いい実験相手が出来たのでそちらで検証す
るか。

と、ここまで話したところで、安藤兄の足が止まつた。
どうしたんだ、もうすぐ外府の外じゃ、ない……か。
俺も足を止めて苦笑い。

外府前はあらゆる体格の男達で埋め尽くされていた。

時間的には大体午後に入つたばかりと言つたところか、腹も空いてきたところ。

しかし白兵戦の審査結果を見に来た屈強な肉体の男達の壁が出来上がつていて、とても外府内から出れそうにない。

いや、俺と安藤兄は頑張れば行けるかもしねいが、舞ちゃんは無理だ。

ならどうするか。

壁が自然と無くなるのを待つ。

これは、正直なところお腹が保たない。

朝ご飯をもつと食べれば良かつた。

何故か枝梨も亜里沙も、唯ちゃんも玲ちゃんもぐつたり眠つていたので、ご飯は台所に置いてあつたパンを一枚食べただけだ。

「…………どうするか」

「よし、試合をしよう」

は？

隣の美少年が何か口走つたかな？

「『めん、もう一回』

「よし、試合をしよう」

「丁寧に完全リピート。」

ああ……チートがあつても腹は膨らまないし、人の意志は変えら

れないよね……。

「さあ行こう

「舞も見た - い」

あれ?

舞ちゃんの一人称つて舞だけ。

「さー行くぞつ」

喜々として借り物の木刀で素振りをしているのは、言つまでもなく安藤兄。

「コイツには胃袋が無いのか?

そして俺の可愛い(?)胃袋の悲鳴が聞こえないのかつ。

「お兄ちゃんも右侍さんも頑張つてー」

審判役になつた舞ちゃんの応援だけが俺の支え。
それにしても喋るなあ。

緊張とかが無くなつたからなのだろうか。

「さあ、来い!」

それにして元気だな、イケメン。

「そりや

とりあえず間合いを詰める。

前と違い、得物のリーチは一緒なので懷に躊躇なく突っ込む。

「お、来たね」

木刀を満足に振れない間合いに詰められているのに、安藤兄は余裕の態度。

「ほ、ざ、けつ」

三撃を放つが、いずれもいなされてしまう。

くそ、空腹でどうしても斬撃が難になつまつな。

「そこ」

「おつと」

「おつと」

下方からの切り上げ 燕返しつてやつだ。
距離を取つてなんとか回避。
髪の毛掠つたけど。

「……」

「？」

ところが、安藤兄は何か違うと言いたい気な仕草を見せた。
しかしそれも一瞬。

今度は安藤兄からの攻撃。

「ていやあ！！！」

さっきまでの余裕な雰囲気から一転、凄まじい迫力で斬撃。
しかし、単調な一撃だったのに弾き返した。

「しつ」

弾き返した勢いのまま、わざと同様に距離を詰めるのと同時に
本日初めての袈裟切り。

だが、手応えなし。

あの、冷や汗をかいた瞬間が記憶から蘇る。

咄嗟に上段からの攻撃に備えるべく、木刀を構えた。

その瞬間、一撃が木刀に訪れた。

押し込まれないように必死に耐える。

「…………つ！」

「…………なぜだ」

追撃が来ないと思つたら、まだ木刀は俺の木刀の上にあつた。
そして、安藤兄は悔しそうな顔をして俯いた。

「なぜ、あの時のような一撃を出してくれないんだ……？」

「あの時のような一撃……？」

いきなり過ぎきて、そう返すのがやつとだ。
一体安藤兄はどうしたのだろうか。

「…………あの時、僕のカウンターは絶対に決まつていたはずなんだ。
なのに……なのに、防御ではなく、反撃……。あんな体験は初めてだつた……。地面に倒れた僕は腹の痛みよりも、カウンター

を返されたことのショックで立ち上がりなかつた…………
俺は、何も言えなかつた。

「…………すまない、もうやめにしよつ。お昼がまだだしね
悲痛な表情から一転、爽やかな笑顔に。」

結局俺は何も反論、異論はせずに演習場を後にした。

ちなみに、男の壁は舞ちゃんの《無》属性魔法、精神干渉魔法で道を作つて抜け出した。

発案は安藤兄。

野郎、謀つたな。

今にしてみれば、あの宰相の魔法を妨害してたんだから、ちょっと考えれば思いついたことだつた。

「さて、何を食べようか」

「行きつけの飯屋ならあるけど」

俺はいつもの稽古の帰りや合間に食いに行く飯屋を提案。
二人とも反論はなさうなのでそこへ向かうことにして。

「ちゃーっす」「

少しばかり、久しぶりに飯屋の戸を開けた。

飯時から少しズレている為か、店内は客がほぼいない。

「あら、ゆーちゃんじゃないの」

出迎えてくれたのは、どことなく枝梨と容貌や雰囲気が似た女性。
というか枝梨のお姉さんのお姉さんだ。

「どうもです。友達、連れて来ましたよ」

枝梨と同じ様な、ふんわりした笑顔の梨絵さん。

しかし一人には大きな違いがあり、それは……胸の膨らみだ。

枝梨の豊かさに反して梨絵さんは見事に平坦。

「……ねえゆーちゃん。 ビー、見てるのかな？」

「いえ、別に」

「言いたいことはハツキリ言つたひづかしら?」

「……相変わらず、ですね」

と、天地がひっくり返った。

「ほり?」

違う、俺が投げられたんだと。

そう気付いた時には、地面に叩きつけられていた。

「みんな昔からそうなのよつ！ ちっちゃい時はいいわよ？ どつちもペツタンコなんだもん！ でも忘れもしないわ。 私が十六になつてもペツタンコで嫁ぎ先を探しているときに、枝梨はねつ！ 十三だつてのに膨らんでるのつ！ ふつくらと柔らかい山が一つ聳えてたわつ！ やつと苦労して私は嫁ぎ先を見つけのに、あの子は何もしなくとも向こうからポンポンポンポン求婚されてるのつ！！ しかも、しかもよ？ 私が好きだった人には門前払いしてたわつ！ きいいい、こんな胸の膨らみの差でこんなに人生に差が出るなんて理不尽よつ！ 理不尽だわつ！！ 理不尽なのつ！！！ ああもうペツタンコの何が悪いのよ！！」

「あがががががががががががが！」

押さえ込まれ、前世でいうプロレス技をかけられる。

梨絵は姉として枝梨を守るために、体術を習っていたのだ。

悲鳴を上げるだけしか抵抗が出来ず、延々と続く枝梨への恨み言（？）が終わるまで解放されることはなかつた。

今日は一話掲載ですので、明日は投稿しないかもしれません。

追加です。

キャラ名で間違いを発見しましたので、また編集し直します。

×唯由

です。

申し訳ござりません。

俺はあれから臥したまま動けず、梨絵さんは初対面の安藤兄妹にあんな姿を見られたせいで店の隅っこで小さくなっていた。そして安藤兄妹は田を点とさせていた。

ちなみに、この光景は、梨絵の旦那で飯屋の主人である早一さん

が店の奥から出てくるまで続いた。

そんな事故ともいえる出来事から一転。

今は席に着いて注文を終えて一息。

ただし、俺はまだ泡を吹いて動けないので椅子を複数使って寝かされている……らしい。

梨絵さん、容赦ねーっす。

以上、現場リポーターの右侍でした……。

亞里沙

同時刻、竹中家。

私、竹中 亞里沙は珍しく昼過ぎに田を覚ました。

こんな時間まで寝てたのはいつぶりかなあ。

そんなことよりも、お母さん起こさないと飯がない。

女の子だけど、武家に生まれ落ちて武術を磨いていれば、それ以外のこと（主に家事）に田を向ける暇はない。

唯一気にしているのは髪の毛の手入れぐらいい……。

その甲斐もあってか、お母さんに褒められるぐらいには髪の毛には自信がある。

「お母さん、お……は、よ、

えつと、田の前の光景をありのままに説明するわよ？

お母さんはいつも通りベッドで寝てるの。

しかし、あの豊か過ぎる胸の谷間部分に由ちやんが突っ込んで、山を縦断するよつこ玲ちゃんが乗つかって寝てるの。

……やで、これはどうしたものか。

「うあえずお母さん起こすか。

「お母さん、お母さん、お母さん」

「んにゅ～……。姉さん、揉みしだいすや～りめええ……こゆ

……」

揺さぶつてみるが、返ってきたのはこの寝言。

私はつい膝から崩れ落ちるようにつに臥せてしまつた。

どんな夢見てるの……。

しかも姉さんて確かに、あの顔はそつくりなのに体つきの方向性が真逆の人よね？

「もうお母さんたら、早く起きて」

「……ほえ？」

やつと田を覚ましてくれた。

ああお腹が空いた。

「ほら、お腹すいたから昼飯作つて」

「うー……。昼、ごはん……あー、ふわふわのパイだあ……

いただきまーす

え？

ちよつ、お母さん、なんで私の胸を掴んで……て、寝ぼけてるのね！？

ていうか何て力なの！

胸は痛くないけど、私の手で払い除けられないなんて……。

「えりりん……ずむじーーーはむつ」

「私も、食べる……かぶ」

「い、いつの間に一人とも起きて……ないつー、田覚めてつて、いやああああー！」

亞里沙は思った。

私、もうお嫁に行けない……。

と。

その後、亞里沙はしばらく部屋から出てこなかつたとか。

右侍

さて、義妹がいろいろと大変な目に遭つているとも知らずに呑氣に飯を食つてゐる。

「うんつ、やつぱ美味しい！」

枝梨の料理も好きだが、この飯も美味しいな。
メニューは白飯と野菜スープと野菜グラタン。

俺のいつものお気に入りメニュー。

安藤兄妹も同じものを食してゐる。

「ふむ、何というか、心があつたまる」

「舞もこのグラタンすきー」

「そうでしょー？ どんどん食べてね」

料理が好評で梨絵さんも早一さんも嬉しそうだ。
ちなみに早一さんは優男風の人で、見た目に違わずに優しい人だ。
夫婦仲は、こちらが胸やけするぐらいラブラブ。
子供は一人おり、文官として内府に務めているそうだ。

「ふいー、」ちそうさん

腹いっぱいだ。

結局、俺はご飯を五杯も食つてしまつた。

「はい毎度。えつと、銅貨十七枚になります」

俺が出さうとすると、安藤兄が先に銅貨を出した。

「え」

「右侍、むりやり付き合つてもらつた礼だ」

ああ、あの試合のことか。

ならお言葉に甘えておひょうかな。

「『ひそさん』

「『』馳走様でした」

「ありがとー

「はーい。 また来てね♪」

俺、安藤兄、舞ちゃん、梨絵さんの順に喋り、店を出た。
さて、もう夕方か。

今日も稽古は出来なかつたな。

試合はしたけど。

「それじゃ、右侍、一緒に千人頭頑張ろうな」

「おう。 舞ちゃんもな」

「はいっ」

それを別れの言葉にしてそれぞれ家路に就いた。

帰宅、と同時に良い匂いが鼻に。
さつき食べたばかりという事実を忘れさせてくれそうなくらいだ。

「ただいまー」

「おかえりー」

「おかえり」

「お兄ちゃん」

枝梨は声だけだが、由ちゃん玲ちゃんが出迎えてくれる。

「ただいま。 あれ、亜里沙は?」

二人の頭を撫でながら問うと、一人とも困ったよつた顔をした。

「亜里沙お姉ちゃん、お部屋から出て来ないの」

「ご飯も食べてないから心配……」

何だろうか。

まさか引きこもりに目覚めたのか?

「俺も見に行つてみるよ

一人を枝梨の手伝いに行かせ、亜里沙の部屋の前に来た。

「亜里沙、どうしたんだ？」

「つ！」

中で驚いたような気配がした。

「腹でも痛いのか？」

「ち、違うわよっ。馬鹿にしないでよね」

違うのか。

む、まさか……俺の乏しい女性知識をフルで稼動すれば、これは

……。

「……あれだ、父さんや母さんには黙つとくからや。うん、気分良くなつたらしつかり食えよ？」

俺は最大限の気遣いをして部屋から速攻で台所へ。
うん、よくやったよ俺。

父さんが帰宅した後の夕餉の席で、適当に亜里沙の引きこもりについては理由付けしてごまかした。

亜里沙の分は枝梨が持つて行つたみたいだ。

夕餉が終わつてからは順番に風呂に入つていぐ。

俺は一番目。

もう出てきて冷たい水を飲んでいる。

在るはずのない炭酸なんかも欲しいが、水も悪くない。

と、一心地ついたところで、玄関の方で慌ただしい馬の足音が聞こえた。

「竹中様ー！ おられますか！」

「はーい、どうされました？」

玄関には一番風呂を由ちゃんと玲ちゃんと一緒に入つた枝梨が向かつたようだ。

「はー、将軍様と、千人頭殿に内府への緊急出頭命令にござります

！ どうぞお伝えください！」

するとまた馬の足音が聞こえ、遠退いて行つた。

「母さん、俺、父さん呼んでくるよ」

玄関から戻った枝梨にそう告げると、俺は風呂場へ向かつた。

急いで風呂から上がった父さんと一緒に仕服（所謂、着物つてやつだ）を着て内府へと向かつた。

通されたのは、ホールのような場所。

いくつかテーブルなんかを置けばダンスパーティーや立食パーティーなんかが開けそなぐらい広い。

しかし今は、蠟燭で照らしただけで薄暗い。

そこへ入ると、父さんは周りにいた何人かの男と親しげに声を掛け合っていた。

多分、集まっているのは將軍クラスを中心として二十人ぐらい、か。

そうして適当な場所に立つと、中央からあの宰相、平岩が現れた。

「諸君、このよろんな時間に呼び出してしまつて済まない。 だが、これは王国の一大事だ」

一同に緊張が走る。

「先刻、南方の魔物領より軍勢が出立したという報告がもたらされた。 既に緩衝地帯の草原を抜け、最前線の砦が攻撃を受けているかもしけん」

誰からともなくざわつき始めた。

俺はぶつちやけことの重大さが分からぬ。

「そこで、討伐部隊の急先鋒を決め、明日の明朝に出陣してもらい

たい。敢えてこちらからは推薦はしない。誰かおらぬか?「

……誰も挙手しない。

「……」ついこのつて、誰かが手を挙げればみんな挙げる的なパターンじゃないのか?

「……無理もないか。皆も承知の通り、これは危険極まりない戦。
しかも急なことで、明日朝までに用意出来そうな兵力は千
多いか少ないのかは、場の雰囲気で分かる。

でも、俺はチート持ってるし、何とかなるような気がする。

「宰相さん、俺やります」

その時、ホールは驚愕と戸惑いが支配した。

∞（後書き）

「J要望や感想をお願いします。」

あ、あれ？

何この空氣？

周りもそつたが、父さんもどこか戸惑つた表情……。
これ、もしかして地雷だつた？

「あのつ、宰相様！ 私達も参加します！」

すると隅つこの方で声が上がつた。

あの声は、安藤兄か。

やつぱいたんだ。

そして、その行動がこの場にさらなる困惑を呼んだ。

「ふむ……竹中殿の子息殿に、安藤殿の子息殿と姫君か……。 他には？」

この平岩の言葉に困惑、驚愕で飽和していたこの場にさらに驚愕
が訪れた。

「さつ、宰相様つ！ これらのような若造！」と同時にこの大役は務ま
りませぬつ！

誰か分からぬが、反論を嘔えた。

あれ、俺敵作つた？

しかし、逆に味方も現れた。

「なら私も行こつ」

お、お父さん！

ちょっと感動したぜ。

「ほつ……。戦鬼殿が行かれるか」

さつきまで抗議やらの声で煩かつたのが、静かになつた。
「他には？」

平岩の一言に応えた者はいなかつた。

「では、竹中親子と安藤兄妹はここに残り、それ以外はまた召集を

かけるので備えておくよつた。以上一

「では、簡単に作戦について説明しよう」

俺と父さんと安藤兄と舞ちゃんと宰相がこの場に残った。

「魔物の軍勢はおよそ、八百と報告を受けてある。だが、魔物は一匹で人間の兵士十人程と見てあるのが一般的だな。つまり、人間の軍勢で言つなら八千と同じぐらいだな」

なるほど。

俺達が率いるのは千。

つまり、八倍の兵力を相手にしなければならないってことか。

「それで、だ。戦鬼殿は問題ないが、他の者は真剣の得物と、鎧がない。さてどうするか、安い槍ならあるが……」

う、木刀では流石に無理だろうな。

いくらチートがあつても死なないとも限らないしな。

「私の古い装備を貸しましょう

またまたお父さん！

「なら心配は要るまい。では明日の明朝に迎えを寄越す故、準備をしておくよつた」

四人で家に戻るなり、父さんが装備を貸してくれた。

俺は父さんの前に使つていた黒い鎧と、軍功を挙げた際に褒賞として与えられた名刀を。

安藤兄は父さんが、以前に討ち取つた敵の将が身につけていたのを持ち帰つた赤銅の鎧、そして飾りの少ない野太刀を。

そして舞ちゃんには、父さんが初陣したときに記念で贈られた金の飾りのついた鎧、そして軍配団扇型の魔法発動の補助をする法

器を借りた。

サイズなんかを確認し、得物の具合を観て軽く打ち合ひ。
そして、安藤兄妹は家に泊まることになり、俺と安藤兄は同じ部屋で寝ることになった。

枕元に、明日着用する鎧や刀を置き、眠つた。

思つていたよりも、初陣の機会は早く訪れた。

果たして、戦場とはどんなものなのか……。

とにかく、今は眠ろう。

結局父さんには何も問い合わせられたりはしなかつた。

この戦に出たかったのかも分からぬ。

なのに、一緒に来てくれるのだ。

血の繋がつていな子供の為に……。

翌朝、安藤兄とともに起き、風呂に入る。

戦に出る者は、身体を清めて出陣するのが慣わしだそだ。

そして、風呂に入り終わると、居間では枝梨が朝食を作つて待つ

ていた。

「どうか、無事で帰つてこれますよ!」

いつになく神妙な表情と聲音で枝梨が言つと、父さんからい飯に

手をつけたので俺達も食した。

食後、部屋に戻つて鎧を着用。

初めての鎧……元日本人としてはやっぱ心踊るものがあるよね。

「……………うし、完璧」

兜の緒を締めて、刀を腰に差し、気合いを入れる。

安藤兄も着用し終わつて精神を統一している様子だ。

邪魔しないようにしないとな。

「ちょっと居間行つてくる」

部屋を出て、廊下を歩いていると、亞里沙が部屋から出てきた。

あら、女の子の口じゃなかつたのか？

と、亜里沙は俺の姿を認めるなり抱き着いてきた。
ちょつ、なこのイベント。トイのイベント。

初陣前で実はテンパってるのにイベントを被さないで神様！（い
るかどうかは知らない）

「絶対……帰つて来てよ……生きて、絶対……」

と、亜里沙が小刻みに震えていた。

思えば、トイとは長い付き合いだからな（家族として）……仕
方ないよな。

俺は亜里沙の良いくらいのする髪を、頭を撫でた。

亜里沙

甲冑の、音？

そういえば昨日馬の足音とか聞こえたし、お母さんからも南の戦
場に行くつて聞いて、もしかしてとは思つたけど……。
あ、鱗の部屋から出ってきたみたい……。
行く、べきよね。

稽古仲間にも言われたもの。

よーし……！

意を決して廊下に出ると、甲冑を着た右侍が目の前に……。
高鳴る胸と想い……でも、今はそうじやなくて……。
つて何緊張してるのでつ。
いついづのは度胸よね。

えーい、まよつ。

お兄ちゃんの胸の中に飛び込んだ。
そして、伝たいことを伝える。

「絶対……帰つて来てよ……生きて、絶対……」

途中から涙が溢れそうになつた。

お兄ちゃんは、正直強いと思つ。

大人の兵士にも勝つてゐるとも思つ。

でも、相手は魔物……まだ私と同じ十四歳の子供なの……。

あ、堪えてた涙が……すると、お兄ちゃんは私の頭を撫でてくれ

た。

何故お兄ちゃんが行くのかは分からない……それでも、止めることは出来なかつた……。

正直、今の姿をお兄ちゃんに見られるのも嫌だつたけど、いつせずにほいられなかつた。

今は、お兄ちゃんにされるがままにされることにした。少しだけ、お母さんがお父さんを見送る気持ちが分かつた気がした。

右侍

思わぬイベントに胸がドキドキだぜ……。

居間へ行くと、舞ちゃんは枝梨に手伝つてもらつて鎧を着ていた。

美少女の鎧姿か……前世のHロゲっぽいな。

「あ、右侍さん。

おはようございます」

「あら、ゆーちゃんおはよう いよこよねえ」

いつもと変わらぬ笑顔の枝梨。

なんか、気遣つてもらつてる気がするな。

「もう終わるからね」

「あ、はい」

着付けを手伝つてもらつてゐる舞ちゃんは緊張の面持ちで答えた。

と、枝梨がいきなり舞ちゃんに抱き着いた。

「やーん可愛いいいい やつぱり美少女の甲冑姿つて様になるわ

あ」

「え、え？」

舞ちやんがびびしていいのか分からず泣かれるがままになつている。

「ちよ、ゆせん」

「あら、ゆーちゃんもしたい？ しうつがないわねえ、半分だけよん？」

その言葉を聞くや否や、舞ちやんは顔を真っ赤にして声にならない叫びを上げて枝梨を振りほびいた。

「いやん」

「あつ、じめんなさい」

いや、舞ちやんは悪くないよ。

勝手に真操の危機に晒そそうとした枝梨が悪いんだし。

何より、俺も被害者になつてるのは気のせいじゃないはずだ。そして何より、何故枝梨は嬉しそうなんだ。

「……はいっ、出来上がり」

着付けが終わり、準備も完了と言つたところか。

舞ちやんは鎧を触り、感触を確かめてくるようだ。

俺もそうだが、舞ちやんもまだこの時は理解していなかつた。

戦場に出るといつ本当の意味を……。

「じや、行つてくる」

父さんが亞里沙（結局出てきた）と枝梨に出立の挨拶をし、俺達は軽く頭を下げて玄関を出ると、薄い朝霧の中、馬が四頭。

「親武、じ苦勞だった」

と、馬の後ろから小柄な男が現れた。

俺達の程飾りもない甲冑を身につけており、あまり位は高くないのだろうと思わせる。

「へい旦那様。」注文通り、朝一で厩から毛艶のいいのを連れて

参りましたぜ」

「うむ、見事な馬だな。 我が息子やその友人の初陣を飾るに相応しい。後は飾りと馬鎧を付ければ大丈夫だな」

「では、外府へ向かいやしよう」

父さんが黒い馬に跨がったのを見て適当に馬を選んで乗る。

俺は父さんと同じ黒い馬（ただし、一回りほど小さい）を、安藤

兄は鹿毛を、舞ちゃんは青鹿毛の馬だ。

何とか苦労して馬に乗ったところで気付いたけど、前世で少しだけ乗馬したことある気がする。

確かこうして……。

何となく前世の記憶を駆使すると、馬は前に進んだ。

「む、右侍。 どうやつたんだ？」

安藤兄は苦戦しているようで、俺に助けを求めた。

「あっしがお教えしましょう」

親武さんが付きつき切りで安藤兄に教えながら外府まで進んだ。意外にも、舞ちゃんがあまり苦労せずに乗りこなしていた。

9 (後書き)

も、もう投稿するペースが……。
感想や指摘などを『『えてやると喜びますし書きます。

10 (前書き)

書き上げたので投稿です。

外府に着くと、もう兵士の方々は到着して整列済みだつた。いやあ、見てて壯觀だね。

千人の人が縦から見ても横から見ても、斜めから見ても綺麗に並んでるのな。

と、隊列の中心には平岩がいた。

「宰相様。 戦鬼、以下三名到着しました」

「うむ。 では馬の装備を整える間、待つていて貰おうかな」
兵士が何人かがかりで馬を奥へ連れていった。
さて、もうすぐ初陣だな。

なんか緊張もするし、少しだけ照れ臭いなあ。

いや、イメトレとかは結構してたんだぜ？

血肉湧き踊る戦場で、華々しく父さんのような戦功を挙げる
そう、今にも血の臭いがしそうな

「……………え」

俺の頬に、血がついた。

しかも、隣の父さんの首が無くなっていた。

自分の視界が、横になり、反転し、そして、地面に墮ちた。

「そう、斬られたのだ。」

「そう自覚した時にはもう俺は絶命していた。あれ？」

「俺は……チートを駆使して……この世界で、何かを為すために転生……したんじゃ……あ、あ……。」

「ん。

「ここは……。」

「起きたか」

「誰だ？」

「視界が真っ暗で何も見えない……。」

「いや、目が開いているのかも分からぬ……。」

「起きているのか眠っているのかも分からぬ……。」

「今、お前は世界が歪んでしまった為に殺されてしまった」

「そうか、やっぱり死んだのか……。」

「そしてこの”声”に主は誰だろうか。」

「お前は、天児には珍しく前世の記憶が曖昧なまま呴喫された確かに、そうだな。」

「で、天児ってなんだろう。」

「いいか？ 前世でのお前の名は、沖田 右侍。」

親父さんと、お袋さんは死んでいる。 そんな中で高校生という職業をしていてだな、十六歳で事故死。 そしてここへ喚ばれた……。 ただ、事故の衝撃が強すぎたためか、あらゆるもののが曖昧なままこの世界に来てしまった。 それが、歪みの原因だ「分かるような分からないような……」。

「まずは、この記憶の話だ。 そして、本来は生まれながらにして付くわれるはずだった、超人的能力がなかなか発現しなかった。いや、まだ発現していない能力の方が断然多い」

確かに、チートもほとんど実践出来ずに死んだしな……。

くそ……亜里沙や枝梨、由ちゃん玲ちゃん、梨絵さん早一さん……

そして、安藤兄と舞ちゃん……遺して来ちまつた人が多すぎる……。

そもそも何で殺されたんだ……。

「少年、生き返りたいか?」

「え……?」

思いもよらぬ言葉につい聞き直してしまった。

いや、確かに生き返りたいよ。

みんなの安否が気になるし、俺と父さんを殺した相手とかも知りたい。

「生き返りたいか?」

「……本当に出来るのか?」

「ああ」

”声”は、あっさり肯定してみせた。

「……もちろん、あの世界にだよな?」

「もちろんだ。 ただ、高校生だった世界にも還れる」

俺は、迷わなかつた。

「殺した奴に復讐してやる」

「分かつた。だが、その為にはまず、お前に本来付加されているはずの能力を全て開眼させる」

すると、身体にいきなり何かが流れ込んできた。

それも、尋常じゃない量だ……これは、情報……？

「そうだ、全部吸収しきつて貰う。別に何もしなくていい。ただ、気が触れないようにだけ注意しろよ」

その言葉を最後に、さつきとは比べようのない量の気 情報が奔流となつて俺の身体を巡つて頭に流れ込んできた……。

ああ……気が遠くなる……くそ……これさえ耐えれば、復讐をしてやれるんだ……。

そして……みんなの……安否を……。

『おい、リリが【封印の棺】の墓地か？』

男の声……。

『ああ。 つたぐ、なんでこんな僻地にこんな面倒なもん作つたんだか……。 おい、魔力玉寄越せ』

『おう、これだな』

上方で、何かが置かれた。

途端に、なにかに締め付けられたような気がした。

『さて、用事も済んだし、奴隸娘を王国に運ぶか』

『一応要人の娘だからな。 逃げられねーようにしねえと』

足音が、遠退いて行く。

『 よう、田覓めたみたいだな。 いいか？ お前はもう自由だ。 これからは自分の意思で生きていけよ。 お前に付加したチートについて説明してやるからよく聞け。 まず、お前は魔法が全く効かない体質になつた。 それから、全魔法属性が使え、さらに魔法創造も思いのままだ。 中でも、特化属性は『闇』だ。 ただし、街中では無闇に『闇』魔法を使うなよ？ あと、基礎体力なんかも全部格段に上がつてゐる。 でも、昼間はある程度性能が落ちるから気をつけろよ。 そして最後に、武器は一緒に埋められてるから好きに使え。 以上、復讐の人生に幸あれ』

瞬間、俺は創造『闇』魔法、爆 爆 を使つた。
イメージ的には、辺り一面を闇の魔力で爆ぜさせた感じ。
そして、俺は生き返つた。

田の前には腰を抜かした兵士が一人。 とりあえず足元の刀を拾い、一人の許へ歩み寄ると、恐怖で顔が引き攣つていた。

「 な、なあ……」

「 ひいいい……」

ふと彼らの足元を見れば地面が湿つてきている。

失禁か。

「 なあ

「 は、はひいい！」

俺が一声かけると、兵士が悲鳴の様に答えた。

「 お持ちの金と身ぐるみ全部寄越してくれないか？」

穏便に話しかけると、兵士は震えるばかりでアクションがない。 きっとくだらない葛藤をしているのだろう。

彼らは動き、考え、抵抗するから面倒だ。

そんななかつてたゞり着いたことのない思考にたゞり着いた瞬間、殺戮の衝動が俺を襲つた。

そして、堪えきれずに田の前の兵士の首を空いていの左手で凧いだ。

「ああっああああー！」

半狂乱に陥つたのは相棒と思われる兵士。

「……さあ、身ぐるみを全部寄越せ」

自分でも信じられない程低い声。

穩便に話しかけたつもりが、全く逆効果になつてしまつたようだ、

兵士は腰碎けになりながら剣を俺に向かつて振つた。

やはりと言ひべきか、俺はまた左手で男の首を　次は握り潰した。

それを、他人事のように俺は見ていた。

結局回収出来たのは僅かな貨幣の入つた袋二つ。

正氣に戻り、戦利品を見つめながら、自分のしたことに非現実感と吐き気を覚えた。

足下に転がる死体を、改めて見た俺は盛大に嘔吐してしまつた。何も胃には入つていなかつたことが今は幸いだつた。

「はあ……はあ……」

魔法で精製した水で顔と口と左手を洗浄した後、周りの景色を見渡す。

現在は夕方から夜になると書つたところの時間帯、か。

少しきよろきよろすると、小振りな馬車があつた。

さつきの兵士達のものだらうか。

そういえば、奴隸娘がどうのつて言つてたから、この中にいるのかな？

馬車の扉を開こうとした時、自分の身体を見ると、見事に素つ裸

…… ではないが、ほとんど裸だ。

埋められたときに元々下着しか着せられてなかつたみたいだ。
とんだ嫌われ者だな、おい。

と、御者席に雨避け用と思われる黒色の地味な外套があつたので
ゲットして早速装備。

気を取り直して馬車の扉へ戻り、開けようとするが開かない。
ちょっと《分析》してみると、魔法で鍵がかかっているみたいだ。
解錠の魔法とか知らないな。
なら作ろうと言つことで、さくっと《無》属性魔法 解錠 を創
造して唱える。

あれ、魔法を口にしないでも魔法使えるじやん。
小気味いい音と共に鍵が外れた。
そして、中にいたのは 。

誰が中にいたんでしょうねえ。

感想指摘要望、評価などお待ちしております。

お気に入り登録して下さっている読者様、拙作を読んでいただいて本当に嬉しいです。

それから初めて拙作を読んで下さった読者様、楽しんで頂けました
でしょうか？

また読んで頂ければ嬉しいです。

1.1（前書き）

友人に教えられたので、チェックしてみたところ、日間ランキングがベスト5目前まできました！

これも拙作を読んで、お気に入り登録や評価、感想をして下さった読者様みなさんのおかげです。

さて、暗い展開が予想されるのですが、どうかお付き合い願います。

扉を開けると、中には手枷と足枷をされ、少しばかり痩せた亜里沙がいた。

着ているものもボロボロだが、間違いない。

「誰……うん、誰でもいい……」

投げやりにそう言つなり、体育座りのまま俯いてしまった。

まるで、死を目前に控えているかのような痛ましい姿。

そして、もう一つ俺の胸に痛みを与えたのは、もしかして、俺が誰なのか分からぬのか、という疑い。

「亜里沙……」

「な、なんで私の名前を知つてゐるの……？」

少し近付いて名を呼ぶと、怯えながらじけらの顔を凝視した。

疑いは確信へと変わつた。

恐らく、魔法による記憶抹消だらう。

前はあまり上手く出来なかつたが、亜里沙から魔法の痕跡を感じることが出来る。

魔法の痕跡、通称魔痕とは、魔法を発動したり受けた時に身体に残る魔力の残滓のこと。

規模の大きい魔法や影響力の大きい魔法であればあるほど長く濃く残つてゐる。

魔痕は、《闇》属性を示している。

亜里沙が遣える魔法属性はポピュラーな《火》属性だ。

前述した通り、魔法は生まれながらに持つてゐる属性のものしか遣えない。

つまり、亜里沙に《闇》属性の魔痕があると言つことは、他人から魔法を受けたという証拠になる。

「お前の、家族だからだ」

「無駄かもしないとは思いつつ、俺は亞里沙の問いに答えた。

「嘘……。私の家族はお母さんと妹二人よ……つうう！」

途端、亞里沙はこめかみの辺りを手で押さえて苦しみ始めた。

「大丈夫か！ しつかりしるー！」

しかし亞里沙は苦しそうに呻くばかり。

そうだ、俺は今、全魔法属性が遣えるじゃないか……。

『光』属性魔法で治癒魔法を創造して……、と。

「これで、どうだ……？」

俺の手から発せられた光を浴びた亞里沙は深い息をし、やがて目を開いた。

「…………あ、ありがとー」

俺は控えめに礼を言われて、安堵の息を吐いた。

とりあえず助かったみたいだ。

…………て、あれ？

さつきよりも亞里沙の魔痕が濃くなってる……？

『分析』で魔痕を調べると、『光』属性とさつきよりも大分と濃い『闇』属性のものが残っている。

もしかして、亞里沙の体内に魔法が施されているのか……。

そう推理した俺は、亞里沙には無断でだが、薄い魔力を身体に込んだ。

すると、やはりというべきか、頭の辺りで魔力が消えた。

昔に本で見た、魔法の自律というやつか。

もつとも、精度はあまり高くなさそうだが。

「…………今のは…………？」

流石に、頭の中で微弱な魔力の衝突が起きたことには気付いたようだ。

亞里沙が不安そうな、消え入りそうな声を上げた。

「…………君の頭痛は一定周期で起こり、その度に記憶を失う魔法がかっている。治そうと思えば治せると思うんだが、どうする？」

俺の申し出に、亞里沙は少し躊躇うが、本当に小さく頷いた。

俺は荷車の中に入り、亞里沙の隣に腰掛けた。

そして、治療の前に亞里沙を戒める手枷と足枷を外した。

こちらは魔法もなにもなく、ただの鉄製だった。

さて、一番亞里沙に負担のないやり方は、やはり魔法を上書きすることだ。

例えば、今回の魔法で言えば『一定周期』とに記憶を消す』という内容の魔法を、『一定周期』ごとに記憶を復活させる』という魔法に書き換えることだ。

例え、それが出来る出来ないに拘わらず、だ。

無効化などは、人の頭の中で実行すればほぼ百パーセントの確率で頭が消し飛ぶ。

なので必然的に却下した。

「じゃあ、行くよ?」

目を閉じている亞里沙の身体に高密度の『闇』属性の魔力を大量に流し込む。

一瞬顔をしかめている亞里沙の顔が見えたが、俺も目を閉じて魔力を操ることに集中する。

ただでさえ高密度な他人の魔力は人体には良くない。

それも最も危険とされる、『闇』属性の魔力を大量に流し込んでいるのだ。

後遺症が残らないとも限らないしな……。

一瞬たりとも気は抜けない。

(……これが……やはり魔法の構成自体はかなり粗い。 よし、一気に書き換えるつ)

意識領域に感じた、大きな違和感の塊を俺の『闇』属性の魔力の流れで包み込む。

擦り減る精神で魔力を操り、魔法をすり替えて行く……。

ここでミスをすれば、魔法同士が反発し合い、亞里沙の頭が消し飛ぶか精神をやられてしまう。

そんなへマは絶対にしない……。

そう肝に命じつつ、迅速かつ慎重に魔法を書き換えていくが、ついに相手の魔法が反撃　俺の魔力を消そうとする。

しかし、幸運にも魔力の密度の差がそれを阻む。

即ち、敵の反撃はあまり意味を成していない。

それでも、魔法に自爆なんかされたらたまらないので、さらに書き換える速度を加速させる。

(……………完了)

書き換えた魔法は『精神面に対する干渉、その類の魔法を一切受け付けない』。

亞里沙はこれで、精神に干渉されることは無くなつた。

書き換えが終わると、亞里沙はそのまま眠ってしまった。負担が少ないとは言え、精神的には疲れたはずだしな。

頭を撫で、ひざ枕をして亞里沙を寝かせた。

さて、めでたく復活してすぐに亞里沙と再開したが、記憶がないとは……。

俺が死んでから復活するまでに何があつたのか、そもそも俺が死んでからどのぐらい経っているのか、など聞きたいことは沢山あるんだがな……。

それから少し経つて、俺も魔力の消費が激しかつたせいかは分からぬいが眠つた。

とにかく、疲れた……。

僅かな隙間から朝日が差し込む荷車の中で俺は目を覚ました。

もう朝か……って亞里沙がいない。

荷車から出たところで、亞里沙が昨日俺が殺した兵士の死体の側

に立ち去っていた。

「これ、あなたがやつたの……？」

俺が歩み寄ると、立ち尽くしたまま問われた。

「……ああ」

隠しても意味が無いと分かつていたので、素直に肯定する。

「そつか……。じゃあ、何の為に?」

「……」

その問いに、俺は答えを詰まらせた。

得体の知れない殺戮の衝動に駆られた。

そう素直に答えて良いものか……。

俺は恐れていた。

亞里沙に嫌われたり、否定されるのを。

「……答えないならそれでもいいです。でも、結果的にあなたに救つてもらつたので、お礼を言わせて下さい。ありがとうございます」

正直、面食らつてしまつた。

非道いとかと言われて責められるものだと思っていたのだが、まさかお礼を言われるとは。

俺が何も言わず見つめていたせいか、亞里沙は首を傾げた。
「……何かついてますか? って、今は多分すごい汚れてるんで、あまり見ないで下さい」

そう言うなり、顔を両手で隠してしまつた。

「いや、その……嫌われるかなつて、思つてた……」

「なんで嫌うんですか?」

あつけらかんと言い放つた亞里沙を、また見つめてしまつ。

「だから、見ないで下さいってば」

今度こそ怒られてしまつたっぽい。

「ごめん。いや、人を殺したからさ……」

「あなたは冒険者でしょ? なら、殺しへは慣れているはずよ……

人はまた別だけどね。でも、この兵士達は最低よ……。人の

貞操を遊び感覚で弄ぼうとしたのよ……」

「……

亞里沙は、憎悪の籠った視線を足許の死体に向けた。

俺は、無言で亞里沙の身体を抱き寄せた。

「胸、貸すから……」

そう言うと、亞里沙は俺の胸に顔を寄せて泣きはじめた。始めは小さな嗚咽だったのが、頭を撫で始めると、大泣きに変わつていった。

俺は、胸の中の亞里沙が泣き止むまで頭を撫で続けていた。

1-1（後書き）

文の書き方を良い方向に変えていけたらと懇つのですが、ちょっと
難航しています……。

出されるだけ、お気付きの点や要望がありましたら、どれだけ小さい
ことでもよろしくので、感想としてお願いします。
読者様の力をどうか貸して下さー。

お昼になつた頃、俺と亞里沙は馬車で墓地を離れた。
亞里沙によると、ここは王国から少し離れた山間の土地で、隣国との緩衝地帯らしい。

何故こんな所に亞里沙がいるのかは分からぬが、いつ軍が来て接触するかも分からぬので、馬車を走らせて王国側へと向かう。俺が御者兼用心棒として馬を操つており、荷車の中に亞里沙が座つている。

正午からしばらく経つてから、検問所が見えてきた。

恐らく国境だろ？

「亞里沙、国境だ。 どうする？」

馬を停めて後ろに問いかけると、すぐに答えは返ってきた。

「降りるわ。 茂みに荷車を隠して、馬は国境と反対側に放しましよ？」

相変わらず敬語か……。

とりあえず今は気にせず、茂みに入り、馬を緩衝地帯側に向けて放つた。

そして、検問所裏の茂みから慎重に進む。

でも、こりこりのは大概何かしらの罠があるはずだ。

『分析』を駆使して罠を探すと、やはり落とし穴がいくつかと、鈴のついた糸が張られていた。

ふむ、ここは魔法創造だな。

例えば……『無』属性魔法の 固定 なんかどうだ？

鈴を固定することで、糸に触れても振動が伝わらずに音が鳴らないという寸法だ。

早速実行してみると、

「…………」

「……うし、固定完了」

あとは頑張るだけだ。

亜里沙に、後ろから付いてくるように言い聞かせてあるので、その辺の心配はいらないはずだ。

「行くぞ……」

とは言つても、いや罠を田の前にすると、流石に緊張するな……。と、言つても解決はしないな。

俺は一瞬の逡巡をしてしまつたが、意を決して糸をまたぐ。少しだけ糸に触れてしまい、冷や汗が出た。

しかし、音は鳴らなかつた。

「よし、亜里沙。 イケるぞ」

小声で亜里沙に合図を出すと、躊躇いがちに足を糸の上に通らせた。

緊張の余りに、足が糸に思いつ切り引っ掛けたり、大きく糸が揺れた。

「つ――！」

それでも、鈴は鳴らなかつた。

安堵の息を吐いて、罠の棘めく道なき道に足を進ませた。

国境の検問所を超えて、俺達は腹が空いたことに気付いた。

そういうえば、殺した兵士は食料を携帯していたかも知れないな……。

精神が安定していないことを理由に、すべきことをしていない自分の迂闊さに全力で舌打ちをした。

しかも今は亜里沙が一緒で、記憶を失つている状態。

余計な負担や心理的なストレスを感じさせないようになければならないのが今の俺の義務だ。

言葉にこそ出さないが、亜里沙も辛いハズだ。

「腹、減つたな」

「え、あう……はい……」

亜里沙が恥ずかしそうに顔を俯いてしまった辺り、俺のデリカシーが足りなかつた証だらうか。

と冷静に自己分析してみたり。

「何が食べたい？」

「えーと、甘い木の実が食べたい、かな……あの、無理には、いいです」

「いや、大丈夫」

『分析』を駆使して木の実を調べていく。

あの黄色い実か。

「はい、どうぞ」

魔力を木の実まで伸ばし、まるで人の手の様に操り、木の実を四つ程手元にまで運んだ。

よつて、半分の二つを亜里沙に手渡した。

亜里沙は驚いた顔をしているが、特に気にせずに俺が食べ出したのを見て、同じ様に食べはじめた。

「おいしい……」

「ここら辺にはたくさん成つてゐみたいだから、もつ少しもらつていくか」

魔力を再び伸ばし、果物をまた四つ程手元に運んだ。

水は、俺が生成した『水』属性の魔法で作つて飲んだ。

「」ちそうさまでした。こんな美味しい食事はいつぶりだろ？…

…

まだ食べていない木の実を手元で弄びながら遠い目をしている亜里沙はとても不憫だつた。

昨日の夜に、久しぶりに見た亜里沙は、記憶の中の彼女よりもかなり瘦せていると思つた。

それは、明らかな栄養不足からなのだろうとも思つ。

「あの、お名前を聞いてなかつたので、教えてもらえますか……？」

そういえば、亞里沙に言われて気付いた。
まだ名前を教えてなかつたな。

「俺は、右侍だ。 呼び捨てで構わない」

「分かりました、右侍」

うむ、義妹ながら物分かりが良くて助かるものだ。

「さて、王国までどんぐらいかかるかなあ」

「えつと……一週間は堅いかと……」

……ちょっと、鬱になりそうになつた。

亞里沙

検問所裏を抜けて、街道を歩いている。

私は空腹を我慢することに、ひたすら氣を入れていた。 隣を歩

く人にお腹の音を聞かれたくない一心で、だ。

何故かこの人は、私の頭痛を治しただけでなく、世話を焼いてくれる。

そして、流れで一緒に王国に戻ろうとしている。

ご飯もくれるし、お水も冷たくてキレイなのを欲しいだけくれる。
凄くいい人だ。

さらに、泣いてしまつた私に優しく頭を撫でてひざ枕までしてくれた。

それでしかも、襲われた訳でもないし。

……どうせ王国に戻つても奴隸になるだけなんだし、この人に貢
われたいかも……。

魔力をものすごい上手く使つてゐし、もしかしたら凄く高名な傭
兵か魔法士なのかも。

そういうば、名前を聞いてなかつたから、聞かないとな。

「あの、お名前を聞いてなかつたので、教えてもらえますか……？」

「俺は、右侍だ。呼び捨てで構わない」

「分かりました、右侍」

「右侍……？」

噂で聞いたことのある古前じやないけど、聞き覚えがある、懐かしい響きだ。

でも、思い出せない……。

「さて、王国までどんどんぐらいかかるかなあ
右侍の咳きに、私もふと考えた。
そして、ちよつと鬱になつた。

「えつと……一週間は堅いかと……」

右侍は頭を抱えそうな勢いで苦い顔をした。
私も、きつと苦い顔をしていたと思つ。
ため息だけはしつかり吐いた。

右侍

一週間以上か。

これは思つたより辛いな。

馬がなんかが居ればなあ……。

そうだ、作ればいいのか。

チートって便利。

ということで、《闇》属性の創造魔法で馬を創ろう。

「悪い、亞里沙。ちよつと離れてくれ」

亞里沙を下がらせ、馬を想像して創り上げた。

「わあ……」

思わず声を上げた亞里沙。

俺も思わず声を上げそつこなるぐらいの出来だ。

大型の真っ黒い馬（全属性魔法遮断の馬鎧装備）が前脚で頻りに

地面を鳴らす。

ちょっと、気性が荒いのかもな。

でもこうこうのって、俺とかだけが意志を通わせたり出来るつて設定がいいよね。

でもどうすればいいんだろ？

「あの、この馬に乗つて王国まで行くんですね？」

「ん、ああ。 その方が早いし楽だし」

その時、亞里沙の瞳には決意が宿っていた。

何を言い出すのかと思えば、とんでもないことを言つ出した。

「私を、右侍の奴隸にして下さい」

落ち着け俺。

まずは深呼吸だ。

「……すまない、もう一度頼む」

「私を右侍の奴隸にして下さい」

記憶喪失の義妹を奴隸に？

「何故、だ？」

俺には、亞里沙を奴隸にする必要性があまり感じられないのだが。尤も、亞里沙には何か考えがあつてのことだろうが。

「……これを見て貰えますか？」

彼女は薄汚れたワンピース状の服を捲り上げた。

白の下着に一瞬目を遣つてしまつたが、その上の臍の横に奇妙な紋様があつた。

「これは……？」

服を元に戻した亞里沙は、悲しそうに唇をきつく噛んだ。すぐにでも唇が破けて血が出そな程だ。

「公認の……奴隸の証です……」

声色は、ひたすら悔しそうだった。

ここまで負の感情の強い亜里沙を、俺は見たことがなかった……。

12 (後書き)

感想等をよろしくお願いします。

13 (前書き)

やばいです。
ものすごく難産で、短いです。
申し訳ないです。

「私は……」この証が有る限り、誰かに奴隸にされてしまうんです……

……

「それは、どういう意味？」

通常の奴隸は金銭などで売買される。

そこに奴隸の意志が反映されないのは確かだが、それは奴隸を支配する存在がいて、金銭と引き換えの商品という意味で買い取り手の奴隸となる。

しかし、今の状況下ではその支配する存在と買う存在がない。例え、買いたいと言われても俺がこいつの主人だと言えばそこまでの話。

つまりところ、演技をするぐらいでいいのではないか？

まさか、白昼から堂々と公衆の面前で自分の下の世話をさせなければ、自分のものだと主張することが出来ないなどと言ひ馬鹿げたことがあるとでも言うのだろうか。

これは極論ではあるが、俺の結論としては亞里沙を奴隸としては極力扱いたくないと言うこと。

「……絡まれたりした時だけじゃダメなのか？」

俺の提案は、すぐに首を横に振つて否定された。

「公認の奴隸は魔法契約なんです……。主人になる人の魔力を、この証を通して奴隸を戒める枷となるのです。だから、逆らつたり、逃げようとなれば主人の魔力が奴隸に苦痛という罰を与えるのです……」

「そんな酷いこと……。何で亞里沙がそんな目に……」「それは、私が犯罪者だからなのだと思います……。尤も、どんな犯罪を犯したのかすら覚えていませんが」

亞里沙が犯罪者？

そんな馬鹿な……。

いや、これは俺を殺した出来事から連鎖して起つてしまつたことに違ひない。

つまり、[冤罪と言つたところか。

ならばもしかして、枝梨や由ちゃん玲ちゃんも同じ様なことに？
「お母さんと、妹が一人が居たつて言つたよね？ 今はどうしてる
か分かる？」

「……ごめんなさい。 家に殺氣立つた兵士が来て、夢中で逃げた
のは覚えてるんですけど……」「……」

手がかりは、無しか。

もし公認奴隸にされてて、誰かの所持品になつていたら……。
いや、考えないようにしよう。

「とにかく……私と仮でいいから魔法契約をして下さ……」「
そうだな……。

それが、今の亞里沙にとって一番精神的に良いことになり、
するべきなのか……。

仮、と言つぐらいだし、お試しみたいなものなのかも。
「じゃあ、どうしたらいい？」

「さつき、木の実を取つたみたいに私の証に魔力を伸ばして下さ……」
言われた通りに魔力の筋を証に流し込むと、勝手に魔力が吸収され
ていった。

証が淡く光ると、消えた。

「……終わりです」

「仮魔法契約と、本魔法契約の違いって何だ？」

「えと、仕組みとかは分からないんですけど……仮魔法契約をした
奴隸は主人の見た目の一 部をもらいます」

すると、亞里沙の茶色がかつたストレートの髪が黒に染まつてい
く。

「いの」「」

わあ、黒髪美人だ。

元々爽やかだった瞳の蒼が、より一層引き立つている。

「……行くか」

亜里沙は、頷いた。

馬を創るというアイディアが出るのが遅かったのもあって、結局一日で王国に辿り着くことは出来なかつた。

そういう訳で野宿をすることに。

そして、衣服を創ることも今更ながら思い付いた。

「……できた。これ、着れるか？」

とりあえず、前に舞ちゃんが着ていたような蒼いワンピースを作成してプレゼント。

「あ、ありがとうございます……」

亜里沙は恥ずかしそうに受け取り、前面を見たり後ろを見て、やがて脱ぎはじめた。

「つて、いきなり何してるんだ！」

「せつかくなので着替えをしようかと思ったのですが……。ダメですか……？」

いやいや。

いくら記憶が無くなつても、羞恥心ぐらいあるでしょとシラコバコを入れるべきか悩んだ。

でも……眼福……あれ、意識が、遠……く……。

田覚めてみればすっかり朝。

「……起きましたか？」

田の前に現れた亜里沙の顔。

やっぱ黒髪が似合つたな。

「俺、どうなったんだっけ……？」

「えと……鼻血を噴き出して氣絶されてしましました……」

「そつか……」

通りで田眩がする訳だ。

「……何してるんだ？」

今気付いたけど、ひざ枕されてるね。

そして頭を撫でられた。

「あ、えと……ごめんなさい……」

亞里沙は怒られたと思ったのか、頭を撫で始めた手を引っ込めた。

「いや、いいんだ。 続けてくれ」

……いつの間にか奴隸と主人の関係が出来上がってる。

なんか、こう、不可抗力的なものを感じるんだ。

それにも、俺自身の特性（？）を少しだけ発見できた。

恐らく、性的興奮することで貧血になるぐらい血を噴いて氣絶するみたいだ。

……男の楽しみを返せ。

「ありがとう。 朝」はんにしよう」

そうは言つても、ただの木の実だが。

顔を洗つて一息入れて、馬に乗つて王国への残りの道を急いだ。

王国の城壁が見えた。

さて、昼過ぎから王国に入るのは危険だな。
夜にひつそりと入国させて貰おう。

「と、ゆ一訳で、昼寝でもするか

これからは夜と昼の生活が逆転しそうだし、体内時計を変えているか。

亞里沙は……見張りに立っていた。

まあ、好きにさせておこう。

う、また主人面してしまったぞ。

これが癖になってしまつ前に、仮魔法契約を解除したいものだ。

あ、眠気が……。

……。

夜だ。

月も出てやがるな。

ちょっと寝過ごしたっぽい。

周りを見れば、亜里沙は横たわって寝ている。

馬は金色の目が光つて怖い。

「さて、亜里沙。 王国に潜入だ」

亜里沙を起こして馬の魔力を解散させた。

これで、いつでもどこでも馬が出せる検証終了。

眠そうな亜里沙を引き連れて城壁前まで来た。

確か、城壁の上の警備はあまり厚くない。

よし、魔法創造《闇》属性、透過。

「さ、久しぶりの王国だぜ」

城壁を、すり抜けた。

城壁内は真っ暗で、気持ちの悪い感触がしたが問題なく突破した。

帰つて来たぜ、王国。

14 (前書き)

そろそろ学校が始まってしまつので、更新スピードが一気に落ちる
と思うのですが、見捨てないでやつて下さい。

俺が死んでからどれだけ経つたのかは分からぬが、王国に帰つて来た。

当初はサクッと復讐してしまおうと思つたが、もつと綿密に作戦を立てて行う方針に変えた。

だから、真犯人を見つけて最後にいたぶるとするか。やはりあの時、あの場にいた奴が犯人なのだろうか。だとすれば、平岩の陰謀 王国の陰謀か、兵士の反乱かの一択じやあないかな。

あと、大穴で安藤兄妹。

もしくは全員グルだつたが、の以上かな？

刺客つて言う可能性は低いんじやないかと思う。確信はないけどね。

「あの、家に戻つてみたいんですけど……」

不安そうな様子の亜里沙。

否定などすることもなく、懐かしの我が家に行つてみることにした。

「…………なんだこりや」

俺の第一声がこれである。

いや、家は在るんだけどね。

中からは賑やかな笑い声が聞こえてくる。

子供の無邪気な笑い声、父母のそれらを包み込むような優しい笑い声。

そんな日常を、俺達は、全部失つちまつたんだな……。

いや、どこの誰かに奪われたんだ。

「え、と……どうしましょ?」

さて、進退が窮った。

てつまつ空き家になつてゐると思つてたんだが……。
ん、そういうえばまだ隠し財産が残つてるかも?

死んだ日の前日に、部屋の床下に隠しておいた金貨があるはず。

「ちょっと待つてくれ。行つてくる」

「え?」

亞里沙が何か言う前に俺は《闇》属性の創造魔法 影移し で元自分の部屋に現れた。

誰もいないな。

……あつた。

一緒に入れといた木刀までも無事。

これで用事終了。

服とかは……多分ないな。

よし、戻るか。

「……つと。ただいま」

結構着地が不安定だな、これ。

まだ改良の余地はあるな。

「あの、これからどうしますか……?」

「宿屋に行くしかないな。いや、その前に行くべきところがあつた
キヨトン顔の亞里沙を抱き寄せ、すぐさま 影移し を実行。

闇が晴れると、梨絵さんのいる食堂にいた。
「さて、どんな顔されるんだろうなー」

軽い足取りで食堂の戸を開けた。

「いらっしゃいませー、つて…………」

絶句してついでにそのままフリーズしている。

ここまでキレイにフリーズしてる人を始めて見た。うん、やっぱこの人は面白いね。

「え……」

「どうも、久しぶりです」

「…………あ、え……」

「俺達が誰か分かります?」

面白半分で聞いてみると、梨絵さんは「ぐぐぐぐぐ」と首を激しく縦に振った。

「あの、本当に右侍くんと亜里沙ちゃん……？」

半信半疑って感じだな。

無理もないけど。

死んだはずの人間なのに、生きて自分の田の前に現れたら驚くだろ?つ。

「証拠ありますよ。ほら

斬られた時の首の傷痕を見せた。

すると、即座に梨絵の顔が引き攣った。

ちょっとグロ過ぎたかな。

「で、こつちは髪の毛は黒くなつたんですけど、亜里沙です。ただ……記憶が無いんですよ」

「…………奥に入つて」

よかつた、味方になつてくれるみたいだ。

「なんか、全然現実感のない話ね」

一応真実を告げたはずなんだが、やはり疑わしい視線を送つてきた。

もちろん《闇》の魔法が得意とかは言わなかつた。

《闇》はよつほど邪悪な罪人の子供とかにしか発現しない、呪われた属性なのだと書物で読んだことがある。

「そつは言つても、事実は事実なんで……」

「…………ねえ、あなた。 もしかして、天児なんじやないの？」

「天児？」

初めて聞いたワード。

いかにも特別そつだな、天児つて。

「これは……私も詳しく述べる訳じやないんだけど。 この世界が必要とした時に、天から授かる子供……つていうことぐらいいかな。

何とも、俺っぽい条件が揃つてやがるな。

両親がいないこと、絶対に人並み以上の能力を持つていてこと、そして王国の周りは敵だらけ。

「…………そつかもしれない」

すると、梨絵は視線を下げた。

表情を窺い知ることは出来ないが、どこか泣き出しそうな雰囲気があつた。

「あの、俺が死んでからどのぐらい経ちました?」

とりあえず、ずっと気になつていたことを聞いてみる。「かれこれ……一年になるわ。あの時、安藤兄妹が逃げて来て置つてたのよ。 それから、この食堂で暮らしてた……その時、聞いた話を全部聞かせてあげるわ」

一年前 安藤兄

王国の中央の朝は、怒号や悲鳴で包まれた。

僕、安藤 慎也は竹中家で一晩を過ごし、右侍と共に初陣の戦に

臨もうとしていた。

右侍は正直言つて不思議だ。

あの必殺のカウンターが返されたことは、未だに引きずっている。僕との試合でその力を見極めたいが、同じ戦場にいれば必ずと答える出るだろ。

……その前に馬をもつと上手く扱えるようにしないと。

「お兄ちゃん、苦戦してるね」

すっかり慣れたのであらう舞が隣に並ぶ。

ふむ……僕はやはり努力の人ようだ。

純粹な武術では勝つているが、それ以外では概ね劣つているだろ

う。

才色兼備な彼女だが……世の表舞台には立てない理由を僕は知っている……。

今回はそれを使わないで済めばいいんだが……。

苦労しながら、外府に到着した。

既に兵士は全員揃っていた。

しかし、あの勇将として名高い戦鬼殿と同じ戦に出れるとは、今更ながら光榮だな。

そう思つて少々浮かれていたのが、後になつて悔やまれた。

馬を降りて、準備をしている間に事件は起きた。

「…………！」

聞こえるはずのない、人を斬る音が響いたと思つたら、戦鬼殿の首が宙を舞つていた。

それに気を取られている右侍の後ろにも剣を振りかぶった兵士が

……。

「つりあー！」

叫ぼうとしたところで、背後から殺氣と怒号。

「くそつー」

間一髪で抜いていない刀で防ぐ。

そして、右侍の方を確認するが.....。

「.....くそおおおお！」

敵を弾き返し、田の前の兵士の首を撥ね飛ばす。続いて妹に斬り掛かるとしていた兵士も同じ様に首を撥ねる。すると田前の兵士は槍を突き立てて突っ込んでくる。僕は咄嗟の判断で、妹の手を引いて逃げた。家には戻れない。

戻るまでに捕まる。

出来れば、知っている場所で近い場所.....僕は思い浮かんだあの場所に向かった。

「いじだつ！」

裏口の障害物で身を隠し、追跡していく兵士をやつす!」した。怖がる妹を宥め、落ち着いたといひうで、正面に周り込んでドアを叩いた。

「.....はい、仕入れは昨日しましたけど.....って、安藤くんと、妹ちゃん? 一体どうしたの!?. 血が付いてるじゃないの!」

中に招き入れるや否や、僕らを席に座らせると梨絵さんは奥に消えていった。

「さ、これで拭いて。それで、ビーッしたの? 右侍は?」

僕はゆっくり首を横に振った。

それで梨絵さんは察してくれたようだった。

14 (後書き)

感想など多くお願いします。

あと、自分の暇つぶし用の小説を始めました。
良かったらこちらもどうぞ。

15 (前書き)

学校が始まってしまって、~~はな~~です。

感想などよろしくお願いします。

追つ手を振り切つて、少し経つてから僕一人で再び外府に様子を見に行くと、遠巻きに野次馬の一般市民がいたが、そこはまさしく戦場だつた。

朱塗りの壁はより色濃い朱で染まり、地面の石畳も死体や血で本来の姿が見えなくなつていた。

奥の方にある内府からはちらほらと火の手が見え、この外府でも、激しい戦闘が展開している。

しかも、驚いたことに魔獣の姿も見受けられる。

一方の兵士と共に闘しているようだ。

一体誰が危険な魔獣なんかを召喚したのだろうか。よほど魔法の適性が高く、かつ努力をした者にだけ使える高等魔法だ。

国内でも一人二人しかいないという領域なのだが。

「くつ……」

目の前の魔獣から吐き出された漆黒の球体を避けると、後ろで爆ぜた球体が僕の身体を襲う。

「ふん、俺のペットの力はどうだ?」

黒いロープを纏つた男が現れる。

コイツが、魔獣の召喚主のようだ。

「お前は何者だ」

「俺様は、『墮天の召喚者』だ」

僕は、身体が竦み上がるのを感じた。

二つ名持ちの魔法使いには、良くも悪くもいろいろと噂がある。目の前のロープの男は、大量虐殺等の理由で表舞台から姿を消したかつての若き大魔法使い。

一つ名も『青天の召喚者』からこの『墮天の召喚者』と呼ばれるようになった。

一端の傭兵として各地を巡り歩き、乱に乗じて大量虐殺をするという噂を聞いたことがある。

それが竦み上がる原因であると冷静に分析してはみるも、身体は自由には動かせず、緊張状態に陥っている。

「……向かつて来ないのか？なら、ちぎつちまえ」

一つ吠えると、三尾を持つ狼型の魔獣が僕の喉を食い破らんとして走り始めた。

か、身体が言つことを聞かない……。

目線はずつと魔獣の殺氣の籠つた黄色い目と合つている。

「つ！」

もう目の前に魔獣が迫っているのだが、まだ腰が抜けている。

「うわああああああ……！」

剥き出しの殺意を目の前に、僕は奔流となつて襲い来る恐怖を叫んでごまかすことしか出来なかつた。

死を、覚悟した。

すまない、舞……。

「 大丈夫かな？」

無意識に閉じていた目を開けると、一瞬誰か分からなかつた。何故なら、意外過ぎる人だつたから。

「 梨絵さん！」

梨絵さんは僕に微笑むと、割烹着に二角巾といつ出で立ちに銀の槍を携え、魔獣に真つ直ぐ突っ込んで行く。

「 さて、久しぶりの戦場だわ！」

鋭い一撃が一閃。

魔獣は片目を潰され、耳障りな悲鳴を上げた。

その間に梨絵さんはさらに一撃を加える。

「貴様の銀の槍…………」

黒ローブの男の声色に明らかな動搖の響きがあった。

「そ、”銀槍の魔獸殺し”よ」

魔獸に突きの連撃を叩き込みながら梨絵さんは言った。

ま、まさか身近にこんな凄い人がいたなんて……。

「ちつ、またピンポイントで嫌な奴が出て来ちまつたぜ……。

送還！」

男は魔獸を闇に還すと、ローブを翻し、内府へと逃げ始めた。すると、掃討をしていた敵兵も同じように内府へ退却を始める。

「もう、私の許可なく出て行かないの」

ため息を吐き、呆れた様子でこちらを見下ろしている梨絵さんだが、この人も割烹着姿で魔獸を退治してしまつ辺り、相当な豪傑であることを物語つている気がする。

伊達に枝梨さんのお姉さんをしている訳じやないんだろうな。

「さ、内府はもう手が付けられないわ。魔獸に精銳兵士がいつべんに相手じや流石の私も無理よ」

「一体何が起きているのか、知ってるんですか…………？」

やけに梨絵さんの冷静さが気になつて訪ねてみると、意外過ぎる答えが返ってきた。

「今、王国の反乱分子が結束して内乱を起こしていく、もうすぐ終わるわ」

「終わるって……」

どつちの意味ですか？とは繋がらなかつた。

先程の魔獸操る男と言い、王国隨一の將軍の死、そして将来も競い合うことが楽しみだった友人の死。

それ以上は言うまでもなく、結果は予想出来た。

「……食堂に戻つてて。私は内府へ行くわ」

「梨絵さんが戻らないなら、僕も戻りません」

男としての意地、と言つたよつなわがまま。

「ダメよ。ここからは、いくら私でも面倒見切れないわ」「自分の面倒は自分で見ます……今度こそ」

つい先程助けられてしまった手前、大きく出られないのはいた仕方ないか。

それでも、僕はこの反乱はただの反乱ではないと思ったから、その真相を見極めたいのだ。

そして、梨絵さんにも何か秘め事があるような、そんな気もする。

梨絵さんは、それ以上は何も言わず、無言で走り出したので僕もそれに続く。

向かってくことに気付いた、反乱兵三人が槍を構えて突進してくる。

梨絵さんは一人の槍を払い、それぞれ銀槍で腹を貫いた。残りの一人は僕に標的を定めたようで、訓練された鋭い突きを繰り出して来た。

僕は抜刀し、槍の柄を切り落とす。

一瞬怯んだ兵士の懷に素早く潜り込み、右侍の仇と言わんばかりに袈裟切りを放つた。

ほとんど力任せだったが、刀が業物なのだろう、兵士の身体を刃は滑るように通過していた。

血を払い、自分の初めて討つた兵士の亡殻に一瞥くれ、また梨絵さんの後に続いた。

恐怖やその類の感情は感じなかつた。

逆に、高揚感が僕を支配していた。

これが戦場、これが合法で無法な殺し合い、なのだと。ある意味、僕は人を斬る才能があるのかもしねえ。良くも悪くも、だ。

それから、そろそろ一桁は切り伏せてきた頃だらうか、ようやく王国側の兵士の防衛線の辺りまで来た。

もう王宮も目前の、内府の奥だ。

この防衛線が崩れれば、すぐ王宮内に反乱兵がなだれ込むことだろつ。

「総大将は誰だ！」

大声で梨絵さんが叫ぶと、応戦している兵士が応えた。

「王宮内から指揮を執つて『デーリル様です！』

「分かつた！ 君も来るんでしょう？」

デーリルと聞いた瞬間、梨絵さんの顔が強張つた気がしたけど、氣のせいか？

とりあえずその疑問は捨て置き、梨絵さんの言葉に僕は頷いた。そうするや否や、梨絵さんは器用に槍をしならせてその反動で城壁の向こうへと跳んだ。

僕は、全力で跳躍し、城壁上部の出っ張りを掴み、登つた。僕がもたもたしている内に、梨絵さんは王宮内に走つて行く。見失わぬように追いかけると、地下へと入つて行くようだ。隠し戸のような所から、地下へ階段が続いている。

梨絵さんは躊躇なく駆け降りていくのを見て、僕も明かりも疎らな階段を駆け降りる。

やっぱり、梨絵さんはただ者じゃなさそうだ。

「……この先には一体何が……」

そう呟くと、目の前には終着と思われる戸が現れた。

それも躊躇なく開け放つと、初めて梨絵さんの動きが止まつた。

僕も梨絵さんの後ろから中の様子を窺うと、そこは如何にも密会が行われていそうな部屋だつた。

左右の壁際にある松明が一本と、唯一の家具である机の上にある一本の蠅燭だけが部屋の明かりで、その中で人が数人。

立っているのは六人、倒れているのは八人。
その倒れている中の一人に見覚えがあった。

「平井……さん」

「これは、一体？」

「……おや、銀槍さんか。少し遅かつたですね」

兵士にしては少し厚めの鎧を着た背の高い眼帯男がこちらに話しかけてきた。

恐らく、この男はこの中でも高い地位なのだから、他の兵士もこちらに注目している。

「やっぱり、アンタだつたのね」

「はて、何のことやら」

大袈裟に肩を竦めた男に梨絵さんは怒りを顕にした。

「王族殺しに王国の重臣を殺した罪は、拷問して殺しても足りないぐらいいよ？ 何を考えてこんな馬鹿なマネを？」

男は霸氣のない目で天を仰いだ。

「……神のお告げ、つてやつだ」

「ふざけないで!! アンタを始めとする反乱に加担した主な者を全員王国裁判送りにしてやる！」

口調も乱暴になると共に槍を男に突き付けた。

「なあ梨絵。お前も思うところはないのか？ 一世を風靡した女戦士が今や街で食堂の女将だ」

「それが何？ 私は早一さんが好きだから今まで幸せなんだけど」

「……王の逆鱗に触れて、王宮を追い出されて絶望していたお前の気持ちに付け入っただけの男に惚れたか。いやはや、他国でも有名であつただけに余計に哀れだな」

「アンタよりも幸せだし、早一さんはそんな人じゃないから。 優

しぐれ魅力的なんだから「

『ごちそうさま、などと茶化して口喧嘩（？）の様子を見守つてい
ると、男の方が先に殺氣を発した。

同時に大斧が梨絵さんを襲う。

しかし、梨絵さんはあっさりとその奇襲を避けると、逆に男の首
を撥ねようと横屈ぎを放つた。

「……ふん、落ちぶれてしまってはもう手の施しようがないか
「野心でガチガチに固めたその醜い顔に言われたくないわ」
口喧嘩をしながらの死闘。

その様子を僕や周りの兵士は固唾を呑んで見守ることになった。
一瞬の油断も許されないこの戦いの行方と結末を。

そろそろカバータイトルを考えよ!と思こます。

重厚な大斧が振り下ろされ、空を切れば、纖細な槍の連撃は鎧に阻まれる。

今、僕のすぐ目の前で一進一退の攻防が為されている。

「……ちい、貴様ら！ このガキを始末しろ！」

周りの兵士の動きは早かつた。

僕が不意打ちを警戒しながら刀を抜いたときには包囲されていた。相手は五人、か。

一対一なら問題はない、が。

包囲されているのだから、容易には動けない。

「せいっ」

「せやつ」

先ず、後ろの二人が切り掛かってくる。

「ちつ」

振り返り様に右手の兵士の剣をいなし、左手の兵士の腹に蹴りを見舞う。

そのまま一人を討とうとするが、さっきまで正面で向かい合っていた兵士の殺氣を感じて転身。

またしても振り返り様に三人と打ち合う。

「どりや！」

少し体勢が崩れたが、真ん中の一人の右腕を切り落とした。

「くそ、こんなガキに……！」

肘から下を切り落とされた兵士は憤怒に顔を歪める。

そして発せられる剥き出しの殺意。

正直、気を抜けば腰が砕けてしまいそうだ。

ただし、ここへ来るまでに人を切つていなかつたらの話だが。

「ふつ」

敢えてこちらから強襲する。

一瞬兵士がたじろいだとこころに、容赦なく脳天から肩まで鋭く切り付けた。

兵士は絶叫して、絶命。

数で優位に立っているはずの兵士達に動搖が走った。

僕はそれに乗じて、近くの兵士一人の命を瞬く間に奪つた。

残りは一人。

しかし、その目には闘志も殺意も映つてはいなかつた。

「……降伏しろ。これ以上は無益だ」

構えを解いて勧告を投げかける。

兵士はお互いの顔色を窺い、手に持つ剣を置こうとした。

「てめえら！俺の命令が聞こえなかつたのか？殺せ！」そこに

転がつてゐる仲間の仇の首を取れ！」

兵士一人は、男の叱責に慌てて剣を構え直した。

しかし、そこに戦うという意志は見えない。

僕は仕方なく一人を峰打ちで氣絶させた。

金属と金属がぶつかり合つ。

梨絵さんは少し苦戦しているようだ、その証拠に汗を相手よりも多く流している。

時折敵の鎧まで槍の穂先が届く。

だが、鎧にその先を阻まれる。

敵もそれを見越してなのか、よっぽどの危険な攻撃以外は無理に防御はせずに鎧に身を預けている。

その分、反撃が早くなり、梨絵さんがそれを紙一重で防ぐ。

その繰り返しであり、梨絵さんは確實に消耗していく。

「ふはは。随分とぬるいな」

遂に反撃に徹していた敵が攻勢に転じた。

「く……。流石にそれは否定出来ないわね」

「無駄口を吐く余裕はある、か。そもそも何故ここに来た? まさか王の愛人か?」

敵の一撃が、槍で防いだ梨絵さんを弾き飛ばした。

「……アンタと違つて、信頼されてるだけよ。 クエラ」

「ふん。 気安く俺の名を口にするな、移植民の分際で」

僕は愕然とした。

未だに、そんなことを……そんな差別用語を恥じることなく言える目の前の男に、怒りすら覚えた。

「この俺とお前を同列にした王には、はなから失望していた。 移植民を重く用いるということは、この王国……このバレスタ大陸を乗つ取つてくれと言つているも同然」

「アンタはまだそんなことを言つてるの? 私達和族が入植したのはもう遙か数百年前の出来事で、今じゃハーフの数も少くないでしょ?」

クエラは、笑つた。

だが、それは黒く曲がった笑いだった。

「黙れ、汚らわしい東猿め^{とうえん}」

東猿とは、入植した和族を指した差別用語。

それは、口にするだけで訴えられてもおかしくない程の禁句。それをクエラは軽々しく言い放つた。

「……そう。 そこまで言つなら」

梨絵さんが突進を始める。
目にも留まらぬ速さで。

「 覚悟なさいっつ」

突き出された槍はクエラの首のすぐ横を通過した。
遅れてクエラの首の皮膚の一部を爆ぜた。

「のわつ!?

そのまま槍の連撃、それもさつきよりもずっと早い。

「つち!」

クエラは舌打ちをするや否や、部屋の奥へ後退すると、隠し扉で壁に向こうと逃げた。

ぶちギレている梨絵さんは同時にその壁に向かつて連撃。

「おおあああ！ 裏秘技、”貫壁”（かんぺき）……！」

一撃一撃が壁を貫いて向こう側へ穂先が向かう。

に、人間業じやないな……。

「…………逃がしたわ。でも、少しは手応えはあったわ」

玉のような汗と、荒い息を繰り返す梨絵さんからはもう闘志は発せられていなかつた。

「さて、安藤クン。ここで状況を話しておくわ。まず、見ての通り王と宰相が殺されてしまつた。恐らく首謀者はクエラね」出来れば認めたくなかったが、足元に転がっている多数の死体の内、庶民のものとは比べられないぐらい装飾を施した服を纏つているのは元・王の遺体。

そして、その横には見覚えのある遺体、それは宰相の平岩さんだつた。

「…………平岩さん、私、王様の約束守るからね……」

祈るような梨絵さんの言葉を聞いて、心の中で僕は黙祷を捧げた。

「…………なら、そうしてもらおうかのお

「え」

僕と梨絵さんは、なにも反応出来なかつた。

死体が喋つた？

いや、僕の聞き間違いだらう。

でも、隣の梨絵さんも声を漏らしてしまつたことを認識してしまつたので、その可能性は絶望的。

まさか、本当に死体が喋ったのか？

「…………二人共、私を勝手に殺しておらぬか？」

今度こそ、喋った。

「し、し……」

「し？」

隣を見れば、顔がに真っ青なった梨絵さんが恐怖に身体を震わせている。

「あの、梨絵さん？」

「しつ、鎮まり給へ―――！」

「はい？」

次は僕と平岩さんの戸惑いの声がハモリという形で現れた。

ナニヲライイダシタンデスカ、コノヒト？

「いやああ！　た、食べないでえ！　安らかに天で眠つてええええ！」

終いには手に持つ槍を振り回し始める始末。

何とか羽交い締めをするが、彼女を支配する恐怖からの抵抗でなかなか取り押さえられない。

槍で壁を壊す人だ、下手をすれば僕が貫かれないと限らない。

「お、落ち着いて下さいつ。　生きてますから。　多分きっと恐ら

く

「いや、この通り生きてあるがな……」

そこから梨絵さんの暴走はしばらく続いた。
僕が何度も死にそうな目に遭つたが……。

「…………もう大丈夫よ」

漸くして大人しくなり、落ち着きを取り戻した梨絵さんの姿が見

れて何よりだった。

実は顔や腕なんかに切り傷が出来てるのは、僕の力不足という

「とにかくおーい！」

話を戻すと、平若さんは生きていた。

死んだふりをしてやり過剅やつとしたりしきのだが、そこへ僕と梨絵さんがやって来たと言ひ。

「あの、その……王様は……」

「残念ながら、亡くなられた」

淡々と伝える平若さんが、どこか悲しみを感じさせる表情。聞けば、平若さんは王様が若い頃から共に王国で政を行ってきたと言ひ。

そこへ、当時武林が達者であると云つ理由で梨絵さんやクエラが登用された。

梨絵さんに関しては正直、今でも考えられないぐらいの大抜擢だつたとか。

そしてしばらくなは、王国の力として仕えていたが、梨絵さんは婚姻を結んだので外府から辞去した。

その際に、王様と平若さんはクエラの選民思想に危惧を抱いたので、梨絵さんに有事の際には出撃するよう密約を結んだのだ。

「梨絵さんて実は凄い経歴を持っているんですね」

素直に感嘆の言葉を掛けたのだが、本人は至つて謙虚だった。

「いやあ、妹を守る為に頑張つてた結果よ。……胸は大きくならなかつたのはそのせいかしり……？」

何やら場違いな発言は置いておき、平若さんとこねからのことについて話すことにしてた。

「とりあえず、王宮は出ますか？」

「そうじやな。私の傷も浅くはあるが、出血は止まつてしまひぬ

し

先ほどから脇腹を押されてくる手からは血が垂れてくる。

早く手当をしないと。

「……梨絵よ。もう王宮は落ちる。これ以上の無駄な殺生はせずに私を連れ出してくれ」

「はつ」「

畏まつて一礼するなり、来た道を引き返す。
ただし、怪我をした平岩さんを連れてるので、行きの半分も速
さは出でていない。

「平岩さん、頑張つて下さい」

僕が平岩さんに肩を貸し、梨絵さんが先導する形で進んでいるが、
恐らく地上での戦闘は避けられないだろう。

そうなつては、僕は平岩さんを最優先に守りながらの戦い。

梨絵さんがどれだけ負担を背負つてくれるかに、期待するばかり
な自分に嫌気が差した。

と、遂に地上に戻つてきた。

さあ、踏ん張り所だ。

感想や要望、指摘等ござりこましたらお願ひします。

17（前書き）

今回はかなり時間を掛けた割に短いです。
理由としては自分の文章力のなさに嫌気が差しているからです。
でも、作品のゴールは何とか迎えたいと思います。

地上では案の定と言ひべきか、激しい戦闘が展開していた。

これでは、一度も戦闘をせずに離脱というのは不可能だろ？

「安藤クンは平吉さんをお願い。私が道を拓くわ」

ここには梨絵さんの言葉に従うことにしてた。

なるべく早く、かつ平吉さんの負担のかからない移動に神経を集中させる。

苦戦している王国兵の援護をしたかったのは山々だったが、自分が行つた所で死ぬのは分かつていい。

自分の力不足を呪つてやりたかったが、今は自分のすべきことをするのだと思い直す。

「ていうか、外府出たら何処へ向かうんですか？」

「……城壁外に、私の隠れ家がある。そこへ向かつてもらえんか？」

答えたのは苦しい息をする平吉さんだつた。

「それは、どの方角ですか？」

尋ねたのは無理もない。

北と南、東と西が逆だったならば、今の状況ならば戻るのに一日はかかるだろう。

「北東の峠の裾だ……」

「なら、王宮の北門から抜けて行きましょう」

「ダメよ」

否定したのは梨絵さん。

険しい表情をしており、恐らく何か理由となる根拠がありそうだ。「この王宮の外れから北門に行くには、絶対に王宮の中を通らなければならぬ。きっとクエラの防衛線に引っ掛かるし、下手し

たらもう一度クエラと戦うことになるわ

それは、是非とも避けたい事態だ。

「なり、来た道を辿って南門から出ますか？」

「しょうがないけど、そつしましょ」

そう言つと同時に、僕達は南へと撤退を開始した。

「はあっ！」

少し先で梨絵さんが複数の兵士相手に奮闘している。

安全を確保しながらとなると、やはり足は鈍ってしまうが、こちらは怪我をした国の要人がいるので仕方ない。

王宮前の兵士達は反乱軍に鎮圧されて

「キリがないわねえ。 そろそろ疲れが出て来たわ」

割烹着で槍を振るう梨絵さんはまるで接客中のよつや雰囲気で咳

く。

「もうちょっとですよ。 ほら、外府の門です」

「でも、ただでは帰してくれないみたいね」

まだ田の前には一桁近い兵士が立ちはだかっている。

しかし、それは梨絵さんの前では壁の役割すら果たせずに吹き飛ばされる運命にあった。

「さて、やつと脱出ね。 一度食堂に寄つて行つてもいいかしら」

「あ、はい。あの、宰相様は」

「構わぬ」

僕が言い切る前に返事をした。

そう言つわけで、僕達は食堂へと向かつた。

「あら、枝梨じゃない」
食堂に帰還すると、そこには枝梨さんと、あの時の少女一人がいた。

「姉ちゃん……。 じつじょひつひつ……亜里沙が……」

昨日や今朝の様な明るい表情は無く、動搖と絶望が見え隠れしている。

由ちやんと玲ちやんの表情も一様に暗い。

「どうしたの？ 一体何があつたの？」

「皆が行つた後に、いきなり王宮の兵士が家に押し入つて来て……私達を殺そうとしたの……。 それでね、何とか家から脱出してここに向かつて逃げてたんだけど……」

枝梨さんは、涙を零し始めた。

梨絵さんは頭を撫でて、続きを促した。

「……途中で追いつかれちゃって……亜里沙が囮になつて逃げたの……。 私は止めたんだけど、もうそつつけ兵士の注意が向いちゃつて……」

その結末は、今の状況。

つまり、亜里沙は捕まつたか、最悪殺されたということだ。
「そつかあ……。 とにかく、今はあなたたちだけでも無事が確認出来て良かったわ」

ついに、枝梨さんは梨絵さんの胸に顔を埋めて泣いた。

「あのー、お茶をいたのでどうだ？」

厨房から、盆にお茶の入つた容器を持つて遠慮がちに舞が現れた。姿が見えないと思つたら、そこにいたのか。

「ありがと。 カウンターにでも置いてくれる？」

梨絵さんの指示に従つて舞は盆から容器を降ろしていく。

「梨絵、慎也くんおかえり。 それに、平岩さんじゃないですか？」

「おお早一よ、久しいな」

「あの、一人ともお知り合いでですか？」

「そうだよ？」

「そうじゅが」

僕の問いに、二人は同時に答えた。

何故一国の宰相と食堂の主人が知り合いなのだろう。

「この男、じう見えて王国の若き料理長……になるはずだったんじやよ」

「では何故今は王國務めじゃないんですか？」

「この食堂は家業で、僕は一人息子だったからや。そして、王国の厨房から去る時に、梨絵にプロポーズしたんだ。それから僕達は……つて、何故一人とも微妙な顔をしてるんだい？」

この状況で人の惚氣話を聞いていられる程僕には余裕がない。どうやら平右さんも同じ考え方のようだ。

「じほんつ。それより、怪我の手当をしてくれぬか？」

「あ、はいっ。今すぐ止血薬と包帯持つて来ますっ」

そう言つと早一さんは厨房の奥に消えて行つた。

そして背後にちらりと田線を遣れば、恥ずかしさで顔を紅潮させ、

同時に怒気を発する梨絵さんと田が合つた。

僕は苦笑いをしてまた前を向いた。

「とりあえず、準備をしながらこので過ごしましちゃう？」

発案者は梨絵さん。

ここに留まる理由は、反乱軍は白昼堂々と民家に戦闘を仕掛けるようなことはしないという読み。

それと、この騒動によって国民は大きく動搖しており、これを鎮

める為の情報操作に力を注がなければならぬからだ。

「ただ、猶予はあまりないと言つのも事実だ。

「出来れば城壁は夜に越えたいけど、この先数日は警戒は厳しいはず。だから、反乱軍が仕掛けて来ると、警戒が緩むタイミングを計つていく必要があるわ」

「なら、火事なんかに見せかけて……といったことに注意すればいいんですね？」

「そうね。一番手っ取り早いのは、結界を張ることだけど、その場合は一週間はずつと維持してもらいたいわね。でも、そんな芸当が出来る人なんて居ないわよね……。私は武闘だけだし、平岩さんも遣う魔法の系統が違うし……」

次善策は、昼夜交代で見張ることだが、それでは限界がある。

「あの、私達なら出来るかも、です……」

「おずおずと発言したのは、由ちゃんだった。

「……舞は、賛成します」

それを支持したのは、舞。

場には困惑に似た空気が流れた。

「どういうことかしら？」

厳しさを孕んだ声色で質問を投げ掛けたのは梨絵さん。

「前、私たちが賊に捕らえられた時、この子達一人が張つていた結界は完全に気配を消していたわ」

「じゃあ何で捕まつたんだ？」

「そ、それは……」

僕の問いに舞は一人の方を見た。

そして、僕に向き直る。

「コケたからです……」

場はまた静まり返った。

どんだけドジなんだと。

「と、とにかく。一人の結界は凄いんです」

一通り主張し終えた舞に対し、梨絵さんを始めとする面々は思案

顔。

舞の話が嘘とは思わないが、それが本当に有効なのかという疑問。

「……由ちゃんに、玲ちゃん？ 本当に高等な結界が張れて、かつ

それが維持出来る？」

「は、はい！」

「むしろ当然……」

梨絵さんの疑問に一人は是と答えた。
皆も、それで腹を決めた様だった。

18 次期国王（前書き）

またまた遅くなりました。

今回からサブタイトルを頑張つてつけようと思します。
前の話にもサブタイトルをつけていこうと思します。

感想や要望などありましたらお願いします。

さて、話の内容ですが、幕間という感が強いのでちょっと違和感があるかもしれません。

王国内、王宮。

国王の住まいであり、政を行つ上での最高の意思決定機関である。その中でも取り分け大きなスペースを持つのが、神聖な儀式や他の使者と謁見を行う謁見の間である。

そして、そこで一つの儀式が行われていた。

「これを以つて、バルギア様を王国の主として神々を始めとする臣下、臣民に宣言する」

新宰相であるイルスター・ルノアが、持つてゐる書状に記されている言葉を淡々と読み上げる。

周りの臣下達もそれを黙つて聞いている。

「では王よ、自らを王として宣言するのです」

玉座に対面するように立ち、長々とした自分の台詞を喋り終えたルノアが目でバルギアを促す。

新たに設えられた冠を軽く被り直し、ゆっくり立ち上がり、息を吸い込んだ。

「私は、新たな国王になつたデミノルーア・バルギア。この場にて問う、我に従わぬ者がいるなら、出てこい！」

これも、決まり切つた口上。

「バルギア、覚悟あおお！」

左右に並ぶ臣下の列の中から、軽装の兵士が三人飛び出して來た。

それも、慣習通りで、バルギアは何も慌てない。

ただ、側に立て掛け置いた剣を取り、静かに抜いた。

兵士達は臣下の列の間の道を走り抜け、ルノアの横も通り過ぎると、各々がバルギアに切り掛けた。

「死ね！」

一人目の斬撃を、受ける前にバルギアの剣が兵士の胸を突いた。

一人目が倒れるのを見送る迄もなく、左に現れた二人目の兵士を睨む。

敵が一瞬怯んだ隙を逃さず、これも一撃で仕留める。

しかしその背後から三人目が既に斬撃を放っていた。

これで、バルギアの首が落ちるはず、だつた。

だが、兵士は既に斬られた兵士一人を巻き込み、身体をくの字に折つて吹き飛んだ。

「……おみごとです、バルギア様。 最後の 眇 は特に素晴らしい一撃でござります」

ルノアが贅辞を送ると、バルギアは血を払つて剣を鞘に戻した。

まだ、儀式は続いているのだが、ルノアはそれを無視した。

しかし、咎めなかつた。

バルギアのように、魔法でこの慣習を終わらせた国王はいなかつたからだ。

それも、《闇》の魔法で、だ。

反乱から一日、まるで予定されていたかのように王位の継承儀式は遂行された。

それに疑問を抱いた人間は、この内府と外府を含めた王宮にはいなかつた。

反乱時に、全て始末してしまつたからだ。

「……ルノア。 クエラは？」

王の居室、そこには王となつたバルギアと新宰相のルノアの二人しかいなかつた。

扉の向こうには護衛の兵士が待機しているが。

「もうすぐ、かと。 今はそれよりも、情報操作を」

「それはもう方針は決まつてはいるはずだ。変な噂が広まる前に手を打て」

バルギアは組んでいた手を解くと、手でルノアの退出を促した。

ルノアも頭を下げる、部屋を出て行つた。

残されたバルギアは、人の気配が遠くなつていくのを感じ、天を仰いだ。

「……ここからが、本番だ」

その呴きを聞いていた人間は誰も居なかつた。

それから一日後。

混乱などもないまま、ルノアの情報操作によつて街はいつも通りの賑わいを見せていた。

結局、バルギアとルノアが共謀して前国王、バルギアの父と平岩を殺した事実を、共犯者であるクエラが反乱の主として行つたといふことで形式上の投獄をしている。

そして、反乱はバルギアとルノアが鎮めしたことになつている。

「……バルギア王。これをどうお思いですか？」

ルノアからもたらされた一報に、バルギアは大いに顔をしかめた。

「それもだが……天児の埋葬についてだ。場所は、西の緩衝地帯。副葬品はあの刀だ」

「はあ……。しかし、本当に天児は蘇るのでしきうか」

半信半疑のルノアは、あまり乗り気でないようだ。

確かに、古文書の記述しか根拠がないのだから、疑うのは仕方のない話だ。

だが、今はこれしか方法がないともバルギアには分かつていた。

「蘇るさ。そうでなくては……この反乱の意味がない」

「……では、そろそろお休み下さい。今日はもう私の方にお任せ下さい」

バルギアは、隣の寝室へと入つて行つた。

「明日は、天児の埋葬を行う。そつちはどうなんだ?」

宙に話かけると、淡い光が発した。

『明日……まだ動かないです。それにしても予定外のことが起っこり過ぎなのは……?』

光からは少女の声が紡ぎ出され、バルギアの質問に答えた。隣の部屋からルノアが居なくなつたことを確認してからの、いつもの出来事だ。

『光』属性の話で毎日行つているが、これが盗み聞きされることはない。

されてはなれないのだ。

「お前は俺の指示に従えればいい。……前の指示も覚えているな?」

『はい……。あの、』

「言いたいことは分かつていて。何も心配は要らない」

光は暫くの沈黙の後、納得したのか、別の話題に移つた。

『お体は、大事ないでしようか?』

「それはお前の心配すべきことじやない。それよりも、お前自身が身の危険を察知して、対処することに集中しろ」

『……はい。それでは、また明日』

光が消え、話を切ると、バルギアは大きくむせ返つた。

手の平には収まらない程の赤黒い液体が溢れていた。

まだ、口から漏れているのが分かる。

思つていたよりも消耗しているのが、バルギア自身にも分かつていた。

しかし、今は休むことは出来ない。

全ては、大望の為に。

そつと血溜まりを処理すると、いつもの様に過去を思い出しながら床に就いた。

19 用下の襲撃（前書き）

今回もサブタイトルを付けてみました。

感想や指摘、要望等ありましたらお願いします。
誤字修正もぼちぼち行つていきます。

受験生なので更新や修正が遅れる可能性は大きいので、ご理解の方
をお願いします。

右侍

「 ということなんだ」

「 つて安藤？ いつの間に……」

すっかり聞き入っていたのだが、話者が安藤兄であると気付いた。一年ぶりなのだが、相も変わらずのイケメンぶりを存分に見せ付けていた。（本人にそのつもりは無いだろうが。）

「 本当に、右侍なんだよな」

「 ん？ ああ、もちろん」

疑わしい、とまではいかないが、少々懷疑的な目線を受けた。それは仕方の無いことだ。

死んだ人間が、いきなり生き返って自分の目の前に現れたら誰でも不審に思うだろう。

今の状況が良いと思えるぐらいだ。

「 それにしても……梨絵さんと言い、安藤と言い、簡単に俺が生き返ったことを納得して受け入れたもんだな」

「 そうなるつて、平岩さんが言つていたからね。 全てを聞いて、疑問も解けたよ」

恐らく、天児と言つた単語が絡んでいることは見当がついた。

そしてそれが、とんでもなく特別な存在であるということも。

「 右侍も、だけど……亜里沙ちゃんも良く帰つて来たわ。 訳ありっぽいけど」

梨絵さんの指摘通りであり、少々厄介なことになつているのは事実だ。

隠す必要も無かつたので、一人に仔細を話すことにしてしまった。

何となく嫌だつたので、奴隸契約をしたことだけは伏せたが。

「……成る程ね。ま、記憶を復元するのは簡単じゃないことぐら

い分かつてゐるわよね？」

「壊れただけなら直せばいいが、カケラも残つていないなら直しよ
うがないからな……」

実は道中に、何回か精神干渉を試みたが、記憶は文字通り消し飛
んでいたのだ。

言葉通り、復元は不可能なかもしれない。

「その言葉通りなら、亞里沙ちゃんは今、右侍の奴隸ね？」

「何故こいつもピタリと言ひ当てるのだろうか、この人は。

「あら、不思議そうね。髪の色が変わるのは、奴隸契約をした時
だけよ？」

「そうだったのか。

元の世界の様に、お洒落で染色をしたりはしないのだろうか。

そういう技術があるのかも知らないが。

梨絵さんの口ぶりから行けば、無いのだろうとも思つたが。

「……その通りです。亞里沙は俺の奴隸です。けど、何もして

ませんし、するつもりもありません」

「あら、随分とカッコイイこと言ひじやないの。もし手なんか出
してたら、私の槍で突き刺して串焼きにしてあげたところなんだ
けどね」

サラッと怖いことを言われた気がしたが、華麗にスルーすること
にした。

「ところで、他の皆は？」

「今、みんなで平畠さんのお隠れ家にいるよ。僕達は今日、君を迎
えに来たんだ」

この安藤の答えに疑問を感じずにはいれなかつた。

「なんで俺が来るつて分かつたんだ？」

「舞が星を読んで、今日ここに来るつて教えてくれたんだ」

「凄いな……。そんなことが出来るのか」

「ああ。あれから占術を会得したみたいでね、毎日星を読んでその結果を教えてくれるんだ」

やり方を教えて貰えれば、俺にも出来たりするのかも?

もし魔法でしていると言つのなら、可能性は全然有りそうだな。

「じゃ、行こうか」

時間が差し迫っているのか、安藤兄はやや慌てながら食堂の勝手口へと向かった。

梨絵さんにも促され、亜里沙と共にそれに続いた。

そういえば、亜里沙は一言も喋っていないが、疲れているのかもしれないな。

月は淡い光を放ち、真っ暗にならない程度に街を照らしている。それでも、俺達は街中を巡回する兵士に気付かれることなく城壁を目指している。

本当なら《闇》属性の影移しを使いたかったが、人数制限があれば面倒な上、自分が《闇》属性魔法を遣うことを見られたくないかつたので使っていない。

従つて、走つての移動になる。

亜里沙は俺の背中に背負つている。

始め、自分も走ると言つ意志を示していたが、速さを考慮して俺におんぶされる形での移動となつた経緯がある。

だから、背中の柔らかい感触は不可抗力であるとも言えるはずだ。

「ご主人様、すいません……。私が役立たずで……」

記憶が無くなる前を知つてているだけに、この様な言葉を口にするのに違和感を感じずにはいられなかつた。

「いや。そんなこと気にする必要はないよ

「優しいですね……知り合つて間もない奴隸の私にはもつたいない
ぐらいです」

真実を伝えたい。

しかし、梨絵さんの言葉を思い出してそれを思い止まる。

今の俺にはどうするべきか分からぬ。

創造魔法を使えば何でも出来るかもしれないと考えたが、無いもの創ることとは不可能に近い。

記憶という形の無いものは如何に纖細に創り上げたところで、物でしかない。

それを頭に押し込んで、どうにもならないのが、下手をすれば頭を破裂させかねない。

「あの……やっぱり怒りますよね……。『めんなさい……』

押し黙っていたのを、怒つていると勘違いしてしまったようであが背中から伝わる。

「いや、考え方をしていただけなんだ。あと、敬語じゃなくていいからや」

しかし亜里沙は小さく首を横に振った。

「私はご主人様の奴隸ですので……。それに、もう既に背中に背負つて頂いているので、それだけでも十分過ぎるぐらいに優しくしてもらつてますから……」

ここまで頑なに拒否されると、ちょっとだけだが悲しい。

こいつを命令として敬語を止めさせる手段も浮かんだが、今の亜里沙にはこのままで居たせる方が良いのかもしれないと思い直した。

今が彼女にとつても一番楽だと呟つのなら、暫くはこのままで居よつと言つのが結論。

「……ああ。でも、甘えることも務めだ。我慢は必要ないぞ」

「…………はい、ありがとつ！」

ほんの少しだけだが、亜里沙が笑つた気がした。

「……良い感じのところ悪いけど、敵襲よ」

梨絵さんに言われた矢先、矢が一本飛来した。

俺は事もなげにそれを避け、敵の位置を探る。

今は亜里沙が背中に居るので刀を抜くことが出来ない。

そして街中であるために魔法が使えない。

必然的に梨絵さんと安藤兄に任せることになる。

「右手の建物の屋上に三人、正面に五人！」

「おつけー、正面は任せなさい！」

「僕は上に行きます！」

敵の位置を教えるとほぼ同時に散開する一人のコンビネーションに感嘆を覚えつつ、他の敵の気配を探る。

……居た。

しかし、既に一人は別の敵と切り合つていて対応は出来ない。

「後方五人は俺が対応します！」

仕方なく亜里沙を降ろし、刀を抜いた。

先ずは一人を同時に切り捨てる、敵は散開、ぐるりとこちらを囲む陣形になつた。

三方からの攻撃に対応しなければならない。

正直、亜里沙を守りながらは厳しい。

『闇』属性なら、音も立てずに敵を葬ることが出来るが……。

横目に梨絵さん達を見れば、戦闘中であり、こちらを見ていらない。

「……『闇』属性創造魔法、縛！」

「のあつ！？」

突如地面から飛び出した黒い帯のよつなものに首を絞められ、三人の曲者は呻き声を漏らした。

だがそれも束の間、それはすぐに断末魔に変わった。

「があつ……！」

彼らは、目の前の少年の遣つた未知なる魔法によつて情け容赦なく喉笛を潰され、血を吐いて絶命した。

そして、止めと言わんばかりに首を撥ねられた。

「ふう……。 いつちょ上がりね

返り血を浴びて赤黒い色になつた割烹着を身につけた梨絵さんは、銀槍の血を払いながらそう呟いた。

「右侍、亜里沙ちゃん、大丈夫だつたか？ 亜里沙ちゃんを守りながら五人を相手にしなければならなかつただろ？」

「はい、守つて頂いたので……」

「ん？ ああ、余裕だつたぜ」

内心、あの魔法を見られていなかつたかという不安でいっぱいだが。

やはりと言つべきか、《闇》属性魔法は惨たらしい殺し方しか出来ないのかもしね。

益々、人前で魔法が使えなくなつてしまつた。

亜里沙は黙つてくれるだらうと言つ前提で、亜里沙の目の前では違うべき時に遭おうとは思つが。

今も、余計な事はなにも言わなかつたしな。

「さて、急いで行きましょ。 増援とか来られても困るしね」

また、俺達は月夜の街を疾走し始めた。

それを、陰から見ていた男の存在に気付かずにな。

20 別離と覚醒（前書き）

今日は最後です。

それから、襲撃や妨害などを受けることなく城壁まで進むことが出来た。

「後は、城壁を抜けるだけね。待ち伏せもなさそうだし、一気に行きましょ」

とは言つても、俺のしたように壁をすり抜けすることは出来ないのでは、必然的に壁を越えるか門から出るかの一択。

壁の高さは大体の目測で五メートルぐらいで、登るとなると少々無理がある。

なので、門を見張る兵士がこちらに通じているのだと勝手に推測したのだが、梨絵さんはそれを根底から覆す答えを持つていた。

「さ、壊すわよ」

と、あっけらかんと、とも当然のように言つた。

「あの、確認ですが。何を壊すんですか？」

「壁よ」

「……」

疑いの余地は無かつた。

しかしここには街から離れ、空地や廃墟の目立つ地区。

なら、手っ取り早いという点では評価出来ないこともない策ではある。

出来れば実行には移しては欲しくないが。

「あんまり穴が大きいとすぐ気付かれるでしょうから、小さめにするわ」

梨絵さんは月の光を反射する銀槍を構え、息を整えた。

「せいやあああああつ！」

目にも留まらぬ突きの嵐の後、壁にはぽつかりと穴が開いていた。

それも、人が四つん這いになれば抜けて行けそうな大きさのもの

が。

流石は馬鹿力。

「さ、安藤くんからわざと抜けて行ってちょうどいい」

「あ、はい」

促さるまま、安藤兄は穴の向こうへと消えて行った。

次は予想通りと言うべきか、俺で、その後は亜里沙、梨絵さんの順に城壁を突破した。

「後は、適当に壁の破片で穴を埋めれば……完璧ね」

無理矢理詰め込んだだけだが、穴が開いたままよりは多分マシだ

うづ。

「じゃ、隠れ家まで案内するわね」

「そうはさせんぞ」

る。

典型的な魔獸だ。

「安藤くん、右侍と亞里沙をお願い。コイツは私がやる」

「……右侍は、大丈夫だと思います」

「なら亞里沙ちゃんを専守してくれるかしら」

安藤兄は壁のように亞里沙の前に立ち、俺は刀を抜いて梨絵さんの助太刀に行けるように油断なく構える。

そして、梨絵さんは魔獸と飼い主の男と正面から向かい合つた。

「……容赦はしないわ」

「ほぞけ。ウベル！」

愛狗の名を叫び、戦闘の火蓋は切られた。

「はっ！」

距離を詰め、牙で噛み砕くつとする狗に鋭い突きを一閃。

それを後退してかわした狗は、右の首から濃密な魔力を帯びた炎を吐いた。

梨絵さんは横つ跳びでそれを避け、左の首に迫つた。

「ううううらあっ！」

「つー？」

槍を突き出す瞬間、梨絵さんの死角から飼い主の男がダガーを突き立てて強襲した。

予期せぬ奇襲に梨絵さんは魔獸への攻撃を中断し、転がることで飼い主の一撃を辛うじて回避。

「……ちつ。思ったよりやるみたいだな」

「ふん。一回返り討ちにされてるのに、よく上からモノが言えるわね」

二人は一見、軽口を言いつゝようだが、実際はお互いに隙を探しているのがよく分かつた。

余裕が無くなっているのは梨絵さんの方だと悟つのも。

「……何故私達を付け狙つの？」

「あ？ そんなもん決まってんだろ。 前にお前にぼっこぼこにされ

たから、そのお返しだ

「あら、随分ご執着ね。 また返り討ちにされたいの？」

「馬鹿め。 ウベルに噛み殺されかかったクセによ」

「あれは運が悪かったのよ」

「まあいい……ここで仕留めるー！」

再び狗が突進する。

だが、梨絵さんは動けない。

先程一度だけの戦闘でバテたのだろうか。

いや、それはない。

梨絵さんは世界的にも名を馳せた戦士だ。

なら、外傷以外で考えられるこの異常なまでの弱体化の原因は……。

「はっ！ ウベルの毒がまだ活きてやがるぜー！」

「うつ……く……！」

腹の辺りを押さえ、梨絵さんは片膝を付いて動けない。

しかし狗は迫る一方。

このままでは、梨絵さんが喰われる。

だが、俺はここで魔法を使うべきなのか？。

助けたところで、俺を前と同じ様に接してくれるだろうか。

そんな疑念よりも先に、心の奥底から沸き立つ憎悪のよつな感情が俺を駆り立てた。

「《闇》……縛！」

刹那、狗の足元から黒い帯が伸び、狗を地面に縛り付けた。

狗は激しく抵抗するが、より強い力で締め付けると大人しくなつた。

「な……！」

飼い主は呆気に取られていた。

「……これは！」

梨絵さんは、目を見開き、ゆっくりと口ひげを向いた。

「……右侍、あなた……」

ああ、これで嫌われ者だ。

これからは、一人で迫害に恐れ震えながら諸国をそれとなく流れる生活でもするのだろうか。

それとも、捕まつて異端として惨たらしく殺されるのだろうか。

何にせよ今の俺がすべきことは、この狗と飼い主の処理だ。

それには、『闇』魔法を創造しないとな。

すると、普段の自分からは想像もつかないぐらい、惨い殺し方をいくつも思いつく。

例えば……爆発とか。

梨絵さんを殺そうとし、毒を入れて弱らせた罰だ。

このぐらい惨たらしいぐらいが丁度いいか。

「『闇』、爆！」

目標は、狗の心臓。

放つた魔力を目標へと集約、発散。

理屈は簡単だ。

だが、そこまで纖細に魔力を操ることの出来る人間など、この世の中には皆無だらう。

昔に読んだ魔術書には、そのようなことが記されていたのを思い出した。

「やめろおおー！」

飼い主の絶叫。

だが、俺はそれに耳を貸さずに、狗の心臓に集約した魔力を……

弾かせた。

「…………！」

飛び散る魔獸の体、そして体液。

辺り一面が黒い液体で覆われ、静寂が訪れた。

「ひ、ひい！」

まず、動いたのは俺。

刀を右手に携え、ゆっくりと飼い主へと一步踏み出した。

飼い主はすっかり怯え、腰を抜かしてその場にへたりこんでしま

つた。

だが、容赦なんてしない。

「《闇》、爆」

対象は飼い主の心臓。

魔力を瞬時に送り、即座に発散させた。

断末魔すら上げられない早業。

梨絵さんや安藤兄は声も出せずに呆然としている。

「梨絵さん」

「え、あ……何、かしら?」

「失敗したらすいません」

まだ目の前で起きた出来事についていけないのか、少し返事が上の空に感じた。

「……《闇》、癒」

俺の手から吹き出る禍々しい霧が梨絵さんを包み、少しの時間が経つと、霧は霧散した。

梨絵さんの見た目に変化はない。

「……なにこれ」

梨絵さんが自分の胸に手を当て、幾度か深い呼吸をすると、俺の方に視線を向けた。

「成功、みたいですね」

「あの魔獸の猛毒を、魔法一つで治しちゃうなんて……」

またしても呆然となる一人。

亞里沙だけが表情も変えずに成り行きを見ている。

俺は、いつの間にか激しい目眩と吐き気に襲われていた。

何故、自分が魔獸や飼い主へあそこまでの凶行に走ったのか、全く分からぬ。

何か自分ではない者が、乗り移っていたような感覚……。

「右侍、大丈夫か?」

亞里沙を伴つて、安藤兄が俺の所まで来た。すると、手が差し出された。

「……何だ？」

「掴まれ。それとも休むかい？」

「……ああ」

手を引っ込めるとい、安藤兄は梨絵さんの方に身体を向けた。

「……大丈夫、ですか？」

残つた亞里沙が、そつと背中を撫でてくれた。

幾分か気分が楽になつたが、まだまだ移動は出来そうにない。
「すまない……。くそ、魔法で消耗したのか……」

「分かりません……。ただ、お一方には警戒されるやもしれませんね……」

それは、今となつてはどうしようもないことだった。

信じたい気持ちはあるが、昔の逸話なんかには、『闇』魔法を使う者はどれだけ善良であつても殺されたり、追放されたりとろくなことにはならないという記述があった。

例え、天児というやつでも、それは変わらないだろう。
ならどうするか？

寝首を搔かれるのは避けたい。

なら、一番は今すぐ逃げることだ。

しかしそれを採用する気にはならなかつた。

何故だろう。

「右侍……」

「……はい。何でしょう」

「私達がおんぶしてあげるから、隠れ家まで行きましょう?」
すつかり元気になつたのであらう梨絵さんは、笑顔でそう提案し

た。

俺に、異論はなかつた。

「まだなのか？」

「まだ」

安藤兄は短く答えると、再び走りに集中した。
かれこれ一刻近くは安藤兄の背中に密着している気がする。
いや、正確には一度休憩はあつたのだが。

「そろそろのハズよ？」

亞里沙をおんぶしている梨絵さんが修正。
森の中は景色が殆ど変わらない為、飽きてしまったのが正直な感
想である。

「ほら、あの木の根っこ」

よくよく目を凝らしてみると、木の根本に穴がある。

それも自然な大きさの。

「ここが入口。やーっと帰つてこれたわ。枝梨も喜ぶわよ」

枝梨。

凄く懐かしい響きだ。

あの日の朝以来の再会になる。

不安と期待を胸に、根っここの穴に入ろうとしたとき、嫌な気配が
俺の頭にちらついた。

「……危ないっ！」

突如、火の雨が降り注いだ。

たちまち辺り一面は、森を喰らう燃え盛る火の海と化した。
言うまでもなく、魔法での奇襲。

「右侍！ 大丈夫か！？」

炎の壁の向こうから安藤兄の言葉が聞こえた。

「大丈夫だ！ そつちは大丈夫か！」

問い合わせ返すと同時に、兵士に包囲された。

しかし、その姿は今までとは大きく異なっていた。

燃え盛る火炎の中を通つて來ても、何一つ変わらない外装。

それだけで、耐熱か魔法を無効化することができるのだと容易に

分かった。

これらから、重装歩兵と表現するのが一番正しいのかもしない。

「……貴様は、竹中 右侍だな？ 平岩様並びに、銀槍様の命により、抹殺する」

八人程の重装歩兵が一斉に剣を抜いた。

待て……。

今、何て言った？

平岩と……梨絵さん？

何故俺を殺すんだ？

いや、いくらなんでも手際が良すぎないか？

なら「イツらは出鱈目を吐かしていやがるのか？

でも……平岩が手配をして、梨絵さんが俺をここまで連れて来て

まさか、あの魔獣遣いも仕込みだつたのではないか？

俺が『闇』魔法を使うのがどうかを試したのではないか？

そして、『闇』魔法を使つたからこの人気のない森の奥に連れて来て抹殺……。

安藤兄も、協力者……？

「死ね！」

「くつ……」

まだ言つことを聞かない身体を投げ出し、なんとか剣による一撃を避けたが、次の一撃は厳しいだろう。

「はっ！ 天児ともあろう者がはいつくばってやがるぜ」

重装歩兵達は俺の命を弄び始めた。

剣などの殺傷力の高いもので、ではなく蹴りによつて、だ。

「く……そ、やめ……うごつ……！」

鋭い蹴りが、俺の腹を襲つた。

炎が囁んでいて熱いはずなのに、冷や汗が吹き出た。

「まだ喋れるのか。生意氣なガキは嫌いだぜ」

「そこまでだ」

ゆらりと、炎が揺らめき、その間から梨絵さんが現れた。いつもより、ずっと険しい表情で、だ。

「銀槍様！」

「お前達は下がってな。私がコイツを殺る」

意識が朦朧としてくる中、梨絵さんを睨みつける。

「おお恐い恐い。流石は、闇の天児、ね。でも、睨むだけでは人は殺せないわよ？」

嘲る梨絵を、尚も睨む。

片目は閉じてしまつたが、もう片方の目に全ての魔力を込めた。

創造……《闇》……………痛…………。

「つー？ つづぎやあああああーー！」

突如梨絵は片目を押さえ、悶え苦しみ出した。

21 謝罪と絆、誓い

「な、何だ！ 貴様、一体何をした！？ むぐあああああー！？」
掴み掛かつてきた兵士の目を睨むと、またしても目を押さえて絶叫を発した。

それを自分達では処理出来ないと判断したのか、苦しむ梨絵と兵士を連れて去つて行つた。

俺を火炎の最中に残して。
ああ……目が霞む……。

「…………！」

誰かが駆け寄つて来る気配を感じる。
止めを刺しに来たのだろうか……。

「…………」

浮遊感を感じた後、俺の意識が途切れた。

目が覚めたと直覺すると同時に、それは訪れた。

「痛つ！？」

左目に凄まじい痛みが、断続的に襲い来る。

それに堪えかねて、つい大声を出してしまった。

「起きられました……？」

それに当然ながら気付き、俺を覗き込むかのように顔を出したのは、亞里沙だった。

「…………？」

「同じ森の中ですが、先程の位置からは相当遠い場所です。木々の間から月明かりが差し込んでおり、まだ夜なのだと分かった。

「そうか……。ところで、森にこんな寝心地の良い場所があるのか

すると亞里沙は顔を赤らめ、黙ってしまった。

まさか……。

「……膝枕？」

正解だったようで、小さく、ゆっくりと頷いた。

何だか、急に嬉しいような恥ずかしいような、そんな思いに口元がつい緩まってしまうのを必死に抑えた。

しばらく無言の時が続き、落ち着いた頃合いには、既に亞里沙は眠っていた。

頭上でこつこつこつくりと揺れていた。

そういうえば、どうやってあの火炎の中を脱出したのかは分からな
いが、明日聞いてみるか。

そう思いながら、今度は逆に亞里沙に膝枕をしてあげた。

そして、亞里沙の頭を撫でながら、自分の一番の疑問について考
察する。

何故、あの時俺は《闇》属性魔法を使ったのか。

俺は、《闇》以外にも《水》は少なくとも使えたのにも拘わらず、
だ。

強い固定観念がそうさせたのか。

では、それは一体誰がどのように俺にそう思い込ませたのか。

梨絵か？

いや、魔法は使えないはず……。

同じ理由で安藤兄も却下だ。

では……亞里沙？

思えば、何故あんなにもタイミング良く亞里沙があそこにいたん

だ？

まるで、俺が生き返ることとそのタイミングを知っていたかのよ
う。

俺と父さんを殺したのは……亜里沙？

では何故、今こんなに無防備な寝顔を晒しているのか。

俺が殺せないと踏んでの演技？

なら、それは正解だ。

俺には殺せない。

もしかすると、奴隸契約も偽りで、別の何か特別な契約だったのか？

とにかく、疑問は尽きない。

明日、真偽を確かめる為に問い合わせてみるか。

次に田を覚ました時には既に口は昇つており、正午近い時間帯だった。

「うつ……」

目眩と、左田の痛みが激しい。

我慢出来ない程ではないが、厳しい状況に違はない。

「おはようございます、ご主人様」

木の実を両手に抱えた亜里沙が田の前に現れた。

「ああ、おはよう」

「あの……昨日の……」

昨日？

あの襲撃のことか？

「膝枕……ありがとうございます」

なんだ、そのことが。

考えてみれば、それもそうか。

「いや、気にしなくていいよ」

「でも、私は奴隸なのに……」

「本当に奴隸なのか?」「

「へ?」

亞里沙は間の抜けた顔をした。
惚けているのなら、大した演技だ。

「昨日の襲撃、裏で糸を引いていたのは、君なんじゃないのか?」

「な、何をおっしゃっているんですか……?」

少し、怯えた表情に変わった。

「僕に『闇』属性魔法を使わせて、予め伏兵を用意していた平岩達に僕を売った……」

「では何故、私はご主人様を助けたのでしょうか?」

「本来、あそこで梨絵が僕に止めを刺して終わるハズだったのに、不測の事態が起きてしまった。 そう、梨絵が戦闘不能に陥つてしまつという誤算。だから君は、彼らとのコネクションを保つ為に僕と一緒にいる……」

亞里沙は、今にも泣き出しそうな顔をし、口元をきつく結んでいる。

「……殺したいなら、かかるてこごよ。 僕に、お前、亞里沙は殺せないけどな」

俺は両手を広げた。

多分、凶器の一つや二つは持っているだろう。

しかし亞里沙は動かず、両手で顔を覆い隠し、その場に泣き崩れてしまつた。

それから、亞里沙が泣き止むまで俺はその場に立ち尽くす」とこした。

まだまだ昼の日差しは弱まらず、外套姿では少々暑い。

顔を流れる汗を拭い、ため息をつくと、再び目眩が俺を襲つた。

それも、一瞬で意識を刈り取るような強いもの……。

俺はまたしても、簡単に意識を手放してしまった。

「……ん」

短期間に何度も寝ては起きてを繰り返していく為、最早デジヤヴュに感じる光景。

森の中、仰向けの体勢だ。

「……亞里沙はない、よな」

あんなことを言つた後だ。

きつと怒つているに違いない。

俺は、亞里沙のことを疑つていた。

だが、それは間違いだったのかもしれない。

今頃になつて、自分の勝手な妄想から作られた憶測で亞里沙を苦しめてしまつた。

まだ俺は混乱している。

そしてストレスも無意識下に溜まつていたのを、吐き出してしまつた。

「……起きられましたか？　あの、じぱらくは横になつたままがよろしいかと……」

恐れながらも、必死に尽くそうとする亞里沙に申し訳なさと、喪れみに似た感情が沸き上がつた。

「亞里沙。　ごめん……俺、どうかしてたよ……」

「いえ、そんな……」

気まずい雰囲気になるが、亞里沙はそれを感じさせないかのよう

に振る舞つた。

「あの、朝とは違う実を持つてきただのでどうや……」

怖ず怖ずと木の実を俺に手渡し、偶然にもその手に触れた。

「あ、す、すいません……！」

パッと手を離そうとするが、俺はその手を掴んだ。

そして、ジックと亞里沙の手を見詰める。

「俺は、お前のことを信じるよ」

「は、はい！」

まだ、謝り足りないが、今はそれだけでも伝えたかった。

亞里沙は、また変わらぬ態度で俺にかいがいしく世話を焼いてくれた。

「さ、て。体調も回復したし、何処へ行こうか？」

あれから数日、すっかり体調も回復したので、街へ行つて生活しようといふ事になった。

当面の目標は、俺の出生についての謎の解明と、魔法を使う時の変容の理由を探ることに決まった。

そういう訳で、かなり遠いが、マルシア公国の街がまだ近場にあるグコとこう街の集まり（国ではない）に向かつことに決めた。

「グコに行くとなると、方角的に一度デミア王国に寄つて行く必要がありますが……」

「今はデミアには戻りたくないしな……。マルシアに行こう決まるや否や闇から馬を呼び出し、俺が先に乗り、次に亞里沙を乗せて疾走させる。

「それじゃ、いざ新天地へ

まだ枝梨達の無事が確認出来ていないが、今の俺にはびしきょうもない。

力の使い方も分からぬ上に、梨絵に裏切られたのだ。

今しばらく、時間が必要だった。

俺は、必ず枝梨達を見つけて必要なれば救い出し、この一連の出来事の黒幕に復讐してやる。

改めて俺は心に誓つた。

それは、まだ暑い日の午後の出来事だった。

2-1 謝罪と辯、誓い（後書き）

とつあえず、第一部・完と言つたところです。
次からは、いろいろありますので疲れた右侍くんにはヘビヘビ（へび）
やつてもうおひと思います。

感想を下さい　泣

ではでは。

22 新天地と二人（前書き）

第一部開始です。

路線的には第一部とは違うティーストでお送りしたいと思います！
感想、要望などもお願いしますね。
ではじめやー！

豊かな水源と、豊穣の大地を持つこの国は北方の大山脈を除いた、三方のあらゆる勢力から付け狙われてきた歴史を持つ。

しかし、その相次ぐ侵攻を食い止めて来たのが、マルシア公国の精銳・マルシアージュ騎馬軍。

元々の現地語でマルシアは栄光を意味し、マルシアージュは栄光あると言つた意味があることに由来しているらしい。

今尚、この軍団に入ることは国民にとってこの上ない栄誉なんだそうだ。

以上がこの国の概要。

入国時に見つけた、国の歴史を記したレリーフを読んで簡略化するところな感じ。

今俺達は夕方の街を歩いている。

国でも有数の大通りの一つで買い物することが目的だ。

あれから数ヶ月過ぎ、このマルシアへやつて来たのは季節も変わつて少し涼しい日本の夏過ぎで、簡単に入国が出来た。

入国してすぐに安くて安全性のなるべく高い宿を借りて、今に至る。

既に日用品はあらかた揃つたので、次に服を見に行くことにした。流石に、亞里沙も服は一枚しか持っていないのは可哀相過ぎるしな。

「……どれが服屋なんだ？」

人出が多くて、店が分からぬ。

日用品なら、適当に流れ着いてもあるものだが、前世程服に需要がない（やや高価なものだから）と言うのが原因だ。

なので地方の街では服屋が無くても、それは「」普通のことじゃない。

「あの、向こうにある店はどうですか？」

隣を歩く亜里沙が指差したのは、露店ではなく、建物の店。看板のような者には布が掛かっている。

「よし行ってみよう」

人の波を搔き分けるように店へとたどり着くと、果たしてそこは、洋服屋だった。

早速店内に入ると、店員は一人で、客は五、六人。

客は全員いい身なりをしていると言つよりは、武装をしていた。そこから傭兵か冒険者であることが容易に予想出来る。

多分、この店は生活の服といつよりは冒険中なんかでも使える強い服を売っているのだろう。

並べられた生地はどれも強靱そうだ。

「いらっしゃいませ。どのような服をお望みですか？」

店員の内の一人、見た目的に二十代前半の若い女性が声をかけてきた。

「えと、この子の普段着になるものを一、三着と外套を。あと、

俺の普段着になるものも一着欲しい」

「かしこまりました。では先に採寸だけさせて頂きますのでこちらへ」

案内されたのは、店の奥。

身体測定なんかで見たような器具が並んでいる。

促されるまま、俺と亜里沙は採寸を終えた。

ちなみに、亜里沙のバストはハ十六……ゲフングエフン。

「ではデザインですが……どのように致しますか？」

「えー……と。流行りのもので」

正直この世界の衣服に関する知識はあまりないので、ひとつしか答えられない。

種類ならいざ知らず、「デザインについてはお手上げ状態だ。

亞里沙はと黙つと、しつかりいろいろ細かいところまでオーダーしている。

流石は年頃の女の子だ。

「では、こちらの水晶をお客様がお預かり下さい。この水晶には特殊な仕掛けがございまして、こちらが赤色に染まりましたらお越し下さい。代金はその時でよろしいので」

なるほど、魔法とは便利なものだ。

「これ、持ち逃げされたらどうするんですか?」

「実は、魔力を帯びた水晶は高値では売れませんので、そのようなことをしても仕方ないかと……。それと、窃盗等の罪は厳しく罰せられるので」

「そうなんですか。しかし水晶を連絡代わりに使つなんて、これが普通なんですかね」

感心していた俺は、次の一句で凍りつくことになる。

「いえ、当店は王族も御用達の知る人ぞ知る名店ですので」

王族、御用達?

それってつまり……。

「お会計なのですが……全部で四十九万一千ルーピアになります。

それでは、またのお越しをお待ちしております」

宿屋に戻ってきた俺は愕然としていた。

遙々デニアから持つてきた財産をすべてこの国の通貨であるルーピアに換金した。

既に宿屋に一月分は払い込んであるので、それを差し引いての残金は……一万三千ルーピア。

物価が日本とあまり変わらないので、そのまま円に換算してもら

つてもいい。

そして洋服代が約四十九万……。

「のままでは破産である。

多分、あのタイミングでやつぱ止めると言つことも出来たのかもしれないが、あまりの額の大きさに衝撃を受けていたので宿屋に戻るまで大した思案が出来ていなかつたのが悔やまる。

さて、どうやってこの危機を乗り越えるか……。

「あ、あの……私がそこにしようつて言つてしまつたの……すいません、すいません」

田に見えて落ち込む俺に物凄い罪悪感を感じているのだろう、土下座を繰り返している。

「いや、亞里沙は悪くないよ」

「いえ、すべては私の責任です……。かくなる上は、陰館で荒稼ぎして参ります！」

陰館とは、所謂風俗である。

「だめ」

「何故ですか……？」

「亞里沙にそんな危ない真似はさせたくないから。まあ任しといってくれ。元から、傭兵なんかにはなるつもりだったし」

俺は亞里沙の頭を優しく撫で、土下座をやめさせ、また街へと繰り出した。

もちろん、亞里沙も付いて來た。

その顔が赤かつたのはスルーしておく。

「の数ヶ月で変わつたことがある。

まず、亞里沙はもう前の亞里沙には戻らないと分かつたこと。

あの日以前の記憶も改竄されていて、それには手が付けられなかつた。

さらに、その記憶すら食われていたのが判明した。

一体誰が何の目的でこんなことをしたのかは一切分からぬまどこるか、余計に分からなくなつた。

今、亜里沙は枝梨達のことも覚えておらず、ただ物心付いた時には俺といたという記憶になつてゐる。

そして……俺と亜里沙は主人と奴隸でありながら、恋人でもある。告白したのは亜里沙からだつた。

多分、主人に告白する奴隸なんて彼女ぐらいのものだと俺は思つてゐる。

実際に主人と奴隸がどういうものなのかを目の当たりにしたことがあるからだ。

それはさておき、彼女とはまだ恋人らしいことはあまりしてない。

まだ数回ハグをしたぐらいだ。
手も握つたことはない。

相手は奴隸なのだから嫌がつても拒絕は出来ない。
だが、そうはしたくない。

俺も、彼女に恋してしまつてゐるのを自覚しているから抱いた想い。

いや、それが普通なのかもしれないが、彼女には特別な想いを抱いていいるのは確かだ。

「……どうかされましたか？」

気付けば、彼女の顔を見詰めていた。

それに気付いた亜里沙は少し嬉しそうな、でも恥ずかしいと言つた表情を浮かべた。

「いや、腹が減つただけだ」

正直、彼女を意識し過ぎて空腹なのかも分からぬくらい胸が高鳴つてゐる。

「そうですか」

それを知つてか知らずか、亞里沙は柔らかく微笑む。
その表情に、またしても胸が高鳴つてしまつ俺だった。

青春を満喫していると、目的の場所に到着。

「これは……ギルド連合ですね」

ギルド連合とは、簡単に言えば登録制で仕事をこなしてお金を得るという場所だ。

ここで傭兵と冒険者の違いについてだが、あらゆる国に渡つて旅をしながら依頼を受ける者を冒険者と言い、土着して依頼を受ける者を傭兵と呼ぶ。

また、傭兵はある程度の実力があれば、国の依頼なんかも受けることが出来る。

対して冒険者も、国を渡つて依頼をこなして有名になると、いろいろな国の依頼を受けることが出来る。

どちらが良いと言つることもなく、個人のやり方それぞれである。

また、どこかで連合に登録しておけば、他の街や国でも連合の依頼があれば受けられる。

その都度の登録は必要ないということだ。

「……思ったより綺麗なこだな」

中はてつきり酒場になつていて、喧嘩なんかが所々で発する騒がしいところだと思っていたが。

「ここは複合型の連合ですから、酒場は上の階なんかにあるのでは？」

「複合型？」

「はい。 戦闘が伴う危険のある依頼だけを纏めた戦闘型と、物資なんかを調達する依頼が集まつた商会型。 あとは少しマイナーで

すが、交渉などを代理する交渉型や家を建てたりする依頼が集まる建築型など……様々です」

通りで窓口がたくさん有るわけだ。

となると、あの剣の描かれた旗が飾られているのが戦闘型かな？

「あの、戦闘型の登録をしたいんですけど……」

「はい、ではこちらに必要事項を記して下さい」

受付の女性は一枚の紙を取り出した。

「あの、彼女は……」

戦闘には連れて行かないので要りません、と言つ前に亜里沙はさらさりと紙に名前や性別なんかを記入していく。

「はい、私は書けました」

「おい亜里沙！」

ビクッと体を一瞬縮こませたが、すぐに拗ねたような顔をした。

「なら、依頼中に私がナンパされて他の殿方とイチャイチャしてもよろしいのですか？」

そんなことはしないだろうし、逆にナンパした方が無傷ではないと分かつてはいるが、彼女の言いたいことは分かつてしまつたので反論はしないことにした。

「……分かつたよ」

すぐに俺も紙を書き上げ、受付に渡した。

「……確かに受理致しました。登録の証を作成するので、少々お待ち下さい」

そう言つと、受付の女性は窓口の奥に姿を消した。

「……わがままになつたな」

「申し訳ありません」

一見、責め立てている言葉だが、俺にそんなつもりはなく、彼女もそれを分かつてくれている。

謝ったのも形式だけだ。

この奴隸と主人という身分が面倒で仕方ないと言つのが正直なところ。

奴隸は主人に口答えや命令の拒否が出来ない。

だから、彼女の本当の気持ちを知ることが出来ない。

それが煩わしい。

「お待たせ致しました、」こちらが登録証です。依頼を受ける時だけではなく、連合系列の店で割引等に使える場合もありますし、身分証明にもなりますので、肌身離さずお持ち下さい」

渡されたのは、先ほどの白筆のサインと性別が彫られた金属製のカードだ。

出来立ての為か、仄かに温かい。

「では、」武運を祈つております」

無事に登録も済んだので、宿屋で夕飯を食べて風呂に入つて寝るだけだ。

「この世界にお風呂があつて良かつたと心の底から思つた。」「数ヶ月、まともに風呂に入つた記憶はほとんどない。なので思う存分堪能しようと思つ。

「…………私のことも存分に堪能して下さいね？」

「つー？ な、何をいきなり言い出すんだ！」

「多分、」主人様はお風呂を楽しみにしていらっしゃると思ったので……」

そんなに分かりやすかつたのだろうか。

と言つより何より、鼻血が溢れ出すといひだつた。

妄想でアウトってどんな生殺しだ。

「ば、ばかやう！ からかうな！」

「申し訳ありません」

ペニッと舌を出しながら謝罪をされても、許せるわけ……しかな

い。

周りに人が居て恥ずかしかつたが、亞里沙の頭を無言で撫でて彼女にも羞恥心を与えて反撃し、帰途についた。

23 初任務と思惑（前書き）

なんか甘々の要素が……。

戦闘が書き難いので苦戦しました。
ぐだぐだですが、それでも良いと言ひ方ばんどひ方。
感想や評価もお願いします。

宿に戻り、夕飯を頂いた後の遅めのお風呂タイム。

一つ決まり事があり、入る為には一度宿屋の主人に了解を取らなければならぬ。

よつて、タオルと石鹼を持つて主人のいる一階へ降りたのだが：

…。

「はい、お一人さんね。今は誰も入ってないから、楽しんでくれよ」

「は？」

親指を突き出す主人とは対照的に、俺がつい間の抜けた声を出してしまったのには訳がある。

多分、一緒に風呂に入ろうとするであろう亞里沙が寝静まるのを待つて、出し抜いて来たのだ。

来たハズなのだ。

「分かりました。ご主人様、お背中を流させて頂きますね？」

なのに、隣には頬を染めて笑顔を浮かべた亞里沙。

しつかりお風呂セットも持つていやがる。

嫌なんじやない。

恥ずかし過ぎてどうしたらいいか分からぬのだ。

なのに何故、こうも彼女は積極的に来れるのか。

「お背中を流すのは、奴隸のお仕事ですから」

心の内までバレテーラー。

しようがない、腹括るか。

かぽーん。

ぶしゅつー（鼻血の噴射する音）

俺は、その日は眠ることは出来なかつた。

隣のベットでは亞里沙が一日の疲れを吹き飛ばす勢いで寝息を立てていた。

翌朝、いつの間にか眠つていた俺は目を覚ました。

「ご主人様、朝ですよ」

起こしてくれた亞里沙は、清々しい笑顔だつた。

俺はその笑顔を直視出来ず、布団を被つた。

「もーご主人様つたら、働くんじゃないですか？ 私が陰館に行きますよ？」

「さ、依頼を見に行くぞ」

俺は反射的に布団を跳ね飛ばして起き上がつた。

すると田の前にいる亞里沙は、悪戯っぽい笑顔だつた。

は、嵌

めやがつたなコイツ。

「朝ご飯ですよ、ご主人様」

主導権を握られている以上、大人しく従う他なかつたのは不可抗力だ。

決して『テレ』『テレ』してたとかではない。

主人にいろいろと滋養のつくものばかり食わされたのは、誤解なので本当に止めて欲しかった。

「さて……どの依頼を受けるかな」

依頼の掲示板には、大量の依頼。

その中で、気になったのは依頼書の作りだった。

簡単そうな依頼はただの紙だが、難しそうな依頼は作りが少し豪華だ。

もしかしてランク分けの為だろうか？

「ご主人様、あの依頼はどうでしょうか？」

亜里沙が見つけた依頼、その内容は魔物討伐。

「期間は一週間、報酬は十万ルディアか……」

多分一般の人よりは早く討伐出来るだろうから、一日で帰つてこられるなら……。

「よし、これにしよう」「うう

あまり作りが立派でない依頼書だし、多分受けられるだろう。これでダメなら、あとは格安の依頼しかないしな……。

「これ、お願ひします」

「えー、と。洞窟の主の退治ですね。登録証をお願いします

「はい、どうぞ」

俺と亜里沙の分を出すと、すぐに返された。
え、まさかの即却下？

「どうぞお気を付けて。討伐の成功か失敗かは同行する調査員が

判断するので、気にしないで下さい」

なんだ、てっきり討伐の証とか持つて来いとでも言われるのかと思つた。

て、亜里沙の機嫌が見る見る内に悪くなつてゐるぞ……？

まさか、二人つきりの腹積もりだつたのに邪魔者が現れたからか？

「ご主人様」

「ん？」

「提案があるんです」

「何だ？」

「この依頼止めましょうか」

……やっぱり、そうなんだな。

いや、今は短期間で稼がないといけないんだ。でないと亜里沙の服の金が払えない」

「服なら今度でいいです。難なら、私が今からキャンセルしますが」

どんだけ一人で居たいんだ。

いや、俺も二人つきりがいいけどね？

今は手段を選んでいられないのであつて……。

着飾る亜里沙も見てみたいんだが

「……もう」

やれやれ、やつと折ってくれたか。

本当に奴隸と主人の関係が成り立つてゐるのか？

いや、そんなことにはこだわらないでおこうと決めたハズだ。

では、調査員を紹介します。ルイル、お仕事よ

「……よろしく」

出てきたのは、受付の後ろに控えていたきつめの田つきをしたオレンジ髪色をしたストレートロングの美少女だった。

ボディースーツのようなデザイントップの黒い服装をしており、まるで工作員のようだ。

「俺は竹中 右侍。 よろしく」

握手を求めたが、敢え無くスルーされた。

「私は亞里沙」

亞里沙など、 始めからつんけんした態度だ。
絵に描いたような不和だが、これで大丈夫か？

田標の主のいる洞窟はマルシアの東南にあり、そこへは歩けば一

日ほどかかるらしい。

ルイルは連合の用意した馬に乗っている。

俺達の乗っている黒い馬よりは小柄だが、良い毛並みをしている。

「じゃ、出発しようか」

言つや否や、ルイルは馬を駆つてさつと出発してしまった。
めつちや嫌われてますね、分かります。

「 待てよ。 仲良く行こうぜ？」

馬を横に並べると、さらに速度を上げられてしまった。

と言つても、俺の馬はもつと速さは出るんだけどな。

「ご主人様、ほっときましょ？ それより、私にも構ってくれないと嫌ですよ？」

と、背中に柔らかい双丘が押し付けられ、一瞬手綱を放しそうになってしまった。

「 ……あんまり悪戯するなよ？」

思えばこの数ヶ月で本当に亞里沙と距離が縮まったと思う。
恋人的な意味で、だが。

「分かつてあります」

さらに強く押し付けて来よった。

全然分かつてないな。

「スピードあげるだ

「きやあー」

「あれがそつか？」

窪地にぽっかりと開いた穴。

洞窟と言つならあれぐらいしか見当たらない。

「ええ。じゃ、さっさと終わらせてよね」

「何か偉そうだな……」

とは言つても、モタモタするつもりはない。

亞里沙を引き連れ、早速洞窟内へと侵入した。

内側はもちろん真っ暗なので、ランタンに火を入れた。

『光』属性で照らすことも出来るのだが、同行者のルイルに知られたくない。

「そういえば、俺達は何を倒せばいいんだ？」

「……そんなことも知らずに依頼を受けたの？」

小ばかにするような態度のルイルだが、俺のミスなので言ひ返せない。

が、コイツは違つた。

「ご主人様はどんなものが相手でも負けはしません。 いちいち弱点を調べて戦うのは弱者のすることです」

いや、俺は立派な戦術だと思つ。

むしろ一番正しいとも思つ。

「……思い上がりもいいところね。 登録証見たけど、初任務なのに一体何が出来ると言つの？」

確かに、初任務から主の討伐なんて引き受け奴もまま珍しいのだろう。

命知らずとも思われているのかもしれない。

「何にせよ、前に進まないとな」

感情剥き出しで対立する二人を何とか宥め、奥へと進んだ。

途中は下級の魔物を相手にしながらの探索。

主に宝箱的な存在を探している。

ただ、この世界における宝箱的な存在は、魔物が大事なものを埋めたり隠したりしたもの指す。

なので、白骨化した骨なんかが出てきても、何も珍しいことではない。

「ふー……。ルイルも手伝ってくれよ」

今俺達が探し当てる宝は地面に埋まっており、貸出で貸してもらったスコップで掘り返しているところ。

亜里沙と二人で作業を進めているのだが、どうも地面が硬くて掘り返しにくい。

「私は調査員よ？ 宝探しの作業員じゃないの」

「この一点張りで手伝ってはくれない。

「なら何でここまで付いてくるんだよ……」

既に洞窟内は踏破しており、主の居そうな場所も特定済み。

調査ならもう済んでおり、後は俺達が倒す予定の主の討伐を確認するだけのハズで、ここにいる理由は無いのだが。

「初めての任務に、チュートリアルは付き物でしょ？」

「いや、もう一通り終わってるんじゃないかと……」

「馬鹿ね。忘れちやつたら大変じゃないの」

「ご主人様はそんな低脳なんかじゃありません！」

ほら、また亜里沙が囁み付く。

「ふん。どうせここに主にやられて私が助けに行かなきゃならなくなるのに、そんな口を利いていいのかしら？」

「ご主人様が守ってくれますから結構です」

「險悪だね。

これはもう早く終わらせるしかないな。

と、思いつつスコップで地面を掘り返していくと、よつやくお皿当たのものが出てきた。

「……玉?」

「それは、水晶ね。 そのぐらいのものなら、三三三三千ルテイアぐらいでしか売れないわ」

見た目も少し濁って見えるし、相場はそんなものなのかもしだい。

「結局手に入れたのは、この水晶と薬草だけか」

薬草が大量に埋まっているのを見た時はちょっと引いた。

「もういいかしら? そろそろ主とじ」対面しましょ?」

「なんで貴女が仕切るのよ」

「決まってるじゃない。 初心者のサポートをする教官の役目を背負っているからよ」

それは初耳だが、いろいろと教えてもらつた手前文句はない。

元々俺に文句はないのだが。

「……先行くぞ」

またしても口論に発展したので、置いて行くことにした。

依頼内容は、洞窟の主である土竜のような魔物を討伐することだったんだが……。

「なんだ、コイツ……」

目の前には血のような体液を撒き散らして横たわる巨大土竜。そしてそれを啄む翼竜。

その身体は、全身が水晶の様なもので覆われていた。

ランタンの光りが無くとも、自ら光を発し、青白く光り輝いている。

見るからにヤバいやつだ。

その証拠に、ルイルは口を開けて絶句している。
体長も……優に俺の五倍はありそうだ。

「亞里沙、下がつてろ」「

刀を抜き、翼龍に気付かれないように距離を詰める。

しかし、足場はあまり良くない。

柔らかい砂を踏む音でこちらの存在に気付かれてしまった。
こちらを睨むその青白い瞳に、殺気が宿った。

「 つ！？」

瞬間、辺り一面にまばゆい光がほとばしり、全ての感覚を麻痺させられてしまった。

「 ……う」

田を見開くと、目の前に翼竜が迫っていた。
まだ身体の感覚が戻りきっていないが、必死に身体を横に投げ出す。

その一瞬後に、翼竜が俺の立っていた場所を通過した。

「くっそ！」

すぐに起き上がり、翼竜の後を追う。

今気付いたが、この空間はまるで闘技場のような円形を為している。

なら、真ん中で闘うのが一番だ。

「 じつちだ！」

翼竜は、光り輝く息吹 ブレス を吐き出した。

それを真横に跳んで避け、翼竜との距離を詰めることに成功。
間髪入れずに初撃を入れる。

跳躍しながらの袈裟切り。

だが、それは翼竜の身体を傷付けることは出来ずに刀は折れてしまった。

「ご主人様っ！」

その一部始終を静観していた亞里沙が、ついに動き出した。
しかし、彼女がいかに一般的の傭兵よりも強くても、コイツはどうにもならない。

なら、アレを使うしかない。

魔物相手にはまだ使つたことはないが、今の俺にはもう魔法しか残つていらない。

「亞里沙！ ルイルを連れて撤退しろっ！」

俺の意図を察してか、一瞬否定の色を浮かべるが、すぐに命令通りにルイルを連れてこの空間を後にした。

亞里沙に心の中で謝罪しつつ、左目の眼帯を解いた。

「行くぜ、バケモン」

まずは、『闇』属性の創造魔法の 爆 。

心臓と思しき箇所に圧縮した魔力を送り込み、発散。

身体の内部が破裂し、水晶状の鱗が体液と共に飛び散った。

これなら、仕留めきれていなくとも、致命傷にはなったハズだ。
しかし、翼竜は信じられない行動を起こした。

「これは……脱皮？」

内部から破壊したハズの身体が、水晶状の身体の中から傷一つない身体で帰つて来やがったのだ。

まさか、再生したのか？

なら、このまま 爆 を使い続けてもラチは明かない……。

右目を閉じ、左目に全魔力を集めた。

今俺の最強必殺、 痛 を行使した。

「 つつう！？」

左目が鈍痛を訴え出した。

だがしかしこれが、発動した証であり、破滅の始まり。

青白い瞳と目線が合い、固定。

刹那、翼竜は悲鳴を上げて激しく暴れ出した。だが、視線は俺の左目からは外れない。

いや、外せないのだ。

俺にとつて脅威だつたこの翼竜は、この左目に魅入られてしまつた以上はただの獲物でしかない。

言わば、これは呪い。

使用者にも相応の苦痛を与える死に至る呪いだ。
見る見る内に翼竜の抵抗が弱々しいものに変わつていく。
最初に見た時のような恐怖や恐怖の感情はなく、ただ目の前の命を弄んでいるぐらいにしか思えない。

この『闇』を使つている時の自分の思考は好きになれない。
だから、一切の考えを排除して目の前の翼竜を睨む。

ただ睨まれるだけで与えられる苦痛に身をよじり、何とか和らげようとするが、それは意味のない抵抗だつた。

耳障りだつた金属質な悲鳴も小さくなり、動きもすっかり緩慢になつた。

何となく分かる。

もう目の前の命は風前の灯。

あと一睨みと言つたところか。

「じゃあ、これで最後な」

目に力を込め、翼竜を睨み殺した。

翼竜は断末魔を上げ、ぐつたりと地面に横たわつた。

俺は荒い息をし、左目に手を当てた。

生暖かいものが指に絡んだ。

「血……」

どうやら久しづびりの酷使に、左目が限界を超えていたようで、血が流れていった。

「亞里沙達の所に戻らないと……」

立ち上がろうとしたところで、口ヶてしまつた。

よくよく自分の身体を見れば、傷だらけで、右肩からは血も流れていた。

どうやら最初の光が痛覚をも麻痺させていたようだ。

それだけ左目の痛みが激しいことになるが……。

「うつがつああ！？」

思った途端に、左目に痛みが走る。

途絶えることのない痛みの波を堪え、うずくまる。しばらくは動けなさそうだ。

「ご主人様っ！ ご主人様、しつかり！」

と、そこへ呼びに行くまでもなく、亜里沙が走り寄つてくるのが声と足音で分かった。

「大丈夫ですか！？ またアレを使われたのですね？ 直ぐに手当します！」

そう言つと、砂の上に寝かされ、頭は亜里沙太ももの上に乗せられた。

鼻腔をくすぐるいい匂いで痛みをなんとかごまかそうとするが、流石に無駄な努力だつたみたいだ。

無理、痛いです。

「……これ、国の依頼なんかで討伐対象にされてる竜よ？ 一体どうやつて倒したの？」

死体の検分を終えたのか、ルイルが俺に疑問を投げかけた。

「それは、まあ……秘密ってことで」

「協力者がいたの？ それだけはハッキリさせてくれる？」

「いや、俺だけだ」

「……………」

それだけ言つと、また彼女は死体の方へ行つてしまつた。

「……はい、とりあえず応急処置は完了しました。立てますか？」

個人的にはこのまま耳掃除なんかもしたいんですけど

「……魔物の巣窟の中だし、遠慮しとくよ」

残念そうな表情を隠そともしない亜里沙に、内心苦笑しながら

起き上がった。

改めて翼竜を見るが、これを俺一人で倒したという事実がまだ信じられない。

殺し方もなんか非現実的だし。

実はまだ死んでないんじゃないかって思つてしまつ。

「どう、死んでる？」

自分でも変な質問だなと思いつつも口にした。

「ええ。 ただ、外傷がほぼ無いわね。 本当に、どうやって討伐したのか知りたいわ。 まさか心臓を直接握り潰したんじゃないの？」

「そんなこと出来たら苦労しないよ」

年頃の女の子とは思えない発言に驚きつつ、軽く否定。

「そうよね。 こいつの特徴は身体の内部に結界のような膜を張ることと、脱皮よ。 最高で四回まで脱皮したという記録が残されているけど、殺せなかつた」

「結界……もしかすると、爆 を阻んだのはそれのせいなのかもしない」

「結局、その時はどうしたの？」

「撃退したわ。 流石に脱皮も無制限に出来る訳じゃないみたいで、弱つてはいたそうよ」

「そつか……」

話ながらも、ルイルは何やら報告書のよつたものに羽ペンを走らせていく。

「ご主人様、もう外は真っ暗です。 どうしますか？」

「どうするか、とは帰るか野宿するかの一択だろ。」

傷も痛いので個人的には野宿が良いのだが、ルイルは違うようだ。

「マルシアの近郊にこんな翼竜がいたということはハッキリ言って大事件だし、その上それを一人で討伐してしまつたという荒唐無稽な報告をしなきゃいけないから、私は戻るわ」

「荒唐無稽って……。」

自分で事の重大さが分からぬ以上はビリしようもないが。

「多分報酬も凄まじいと思うわよ？」

「え、それって……」

「それじゃ、後は一人で楽しんでね」
ずっとムスッとしていたルイルが笑顔でウインクをして走り去つ
て行つた、その出来事に少しどキドキしてしまつた。

「……浮気はダメですよ」

「分かつてるよ」

ルイル

帰り道、自分のもの同然の乗り慣れた馬に跨がり、月明かりを頼
りに帰途に就いた。

自分は、とんでもない出世頭に出会つてしまつたかも知れない。
勢いのある人間に付いて行けば、必ず自分にも恩恵はあるハズだ。
なら、少々怪しい部分もあるが、あの男に接触を保つてみるのも
悪くないハズ。

奴隸の女が気に入らないが、男が出世して高給取りになれば当然
頼れる部下が必要になる。

自分がそれに取り立てられれば、今の危険の伴う任務からある程
度安全で給料もいい仕事を貰える。

今は、あの男に気に入つて貰う必要がある。

見たところは普通の男のようだし、ちょっと甘い態度を見せれば必ず信用するわよね。

お金の為なら、操の一いつや一いつは女こもの。

あつと出世してみせぬ。

右侍

ルイルは本当に帰ってしまったようで、本当に一人つきりになつた。

満点の星空の下の草原で、だ。

「ご主人様、ご飯です」

持つて来ていた食材を煮込んで作ったシチュー紛いのものを受け取り、一口。

「美味しいな」

「喜んで貰えて何よりです」

亞里沙も自分の分もよそつて食べはじめた。

「つつー？」

一口田を口に運んだ所で、左田の痛みでスプーンを地面上に落としました。

流石に落としたスプーンじゃ食べられないな……。

「あーん」

「え？」

「この間にか俺のシチュー皿を持ち、自分のスプーンで食べさせようとする亞里沙。

「だから、あーんですよ。 あーん」

「いや、『水』魔法で洗浄すれば……」

「今『』主人様が魔法を使うと暴走しかねないのでダメです」

「そ、そうなのか？」

「暴走（？）は『闇』魔法限定なんじゃないのか？」

「じゃ、じゃあ仕方ないな」

「はい。 あーん」

諦めてあーんをしてもらいました。

その後の食器の洗浄は俺がやりました。

やっぱ嵌めやがったな。

「んじや、亞里沙は寝てる。 僕が見

「嫌です」

「張るからさ……答えるの早いな」

「今日は『』主人様が寝て下さい」

申し出はありがたいのだが、ここは宿屋ではなく魔物もいる草原だ。

男の俺が起きていないくてどうする。

「大丈夫だからさ」

「じゃあ一緒に起きます」

結論から言うと、一人でロマンチックに星を見ることになった。

ホントに綺麗だな。

前世じゃ考えられないぐらいに。

「……ご主人様」

「ん？」

「私が……例え奴隸でなくなつたとしても、側に置いてくれますか？」

並んで座っていた亞里沙は頭を、俺の肩に寄せた。

「もちろんだ」

「……絶対の絶対ですよ?」

「約束する」

俺は亞里沙の肩を抱き、密着させた。

服越しに伝わってくる体温が心地良い。

「あと……どんなに傷付いてボロボロになつても、私がいますから、たくさん頼つて下さいね」

「……ああ

今日も亞里沙の応急処置のお陰で目以外は大して痛くなくなっている。

目は本当に痛いが。

「亞里沙、大切にするからな」

多分、その時の俺は目の痛みと満天の星空の醸し出す雰囲気でおかしくなっていたのかもしねりない。

いや、そう思つては亞里沙に失礼か。

俺は、亞里沙の唇を初めて奪つた。

24 出世と秘めたる生い立ち（前書き）

大きな題名ですが、センスがないので許してください。
感想や評価等お待ちしております。

W

行きよりも二人の距離は縮まった。

それは喜ばしいのだろうが、何故か一人の間に会話はない。

「す、スピード上げるぞ」

「う、うん……」

男は照れ隠しの様に少し声を張るのとは対照的に、女の方は消え入りそうな声だった。

俺、竹中 右侍は後ろに乗っている亞里沙とき、き、キスを、した……。

そう、したんだ。

今朝目覚めてからも、どこか気まずい空気が二人の間をさ迷つていた。

「……」

故意にではなく、不可抗力的に押し付けられている双丘の感触がいやに気になる。

それから少し経ち、小休憩を入れるべく馬を止め、草原に降り立つ。

会話は、依然として交わされない。

まるで付き合い始めた次の日みたいだ、と俺は思った。

「……水、飲むか？」

「えっ？ あ、う、うん」

革の水筒を手渡す。

すると、凄まじい勢いで水を飲み干されてしまった。

「……あ、す、すいません！ すぐに汲んで来ますね！」

慌てた亞里沙は逃げるよう沢へ向かつて行ってしまった。

確かに、付き合い始めの時もこんな出来事があつたような気がする。思い出に浸つていると、亜里沙が戻つて来たので再び馬を進めることにした。

マルシアに帰り着いたのは夕方近い時間だった。

報酬を貰いに連合へ向かうと、入口にはルイルが居た。

「どうしたんだ？　まさか待つてたのか？」

「ええ そうよ。　付いて来て頂戴」

「冗談のつもりで言つたのだが、ルイルは肯定し、俺達を先導し始めた。

連れて行かれたのは受付の奥、会議室と書かれた部屋。

「さ、入つて」

促されて中に入ると、中にはいかにも仕事が出来そうな雰囲気の男が一人。

「やあ、君がミラードラゴンを討伐したと言つ新人君かな？」

かなりがつちりした体格で、身長も百八十は余裕でありますな

漢。

その手もやはり大きかった。

「はじめまして、竹中 右侍です。 こちらは亜里沙です

握手を交わすと、向かい合つて座る。

「さて……。 まずは、礼を言わせてくれ。 このマルシアの危機を救つていただき、本当にありがとう」

深々と頭を下げられたので、ついこちらも頭を下げ返した。

「申し遅れたが、私はこここの責任者の一人であり、公国のある要職に就いているイスピスだ。 君には、話さなければならぬことが何点がある

「あ、はい……」

もしかして、人体実験とかさせられるんじゃ……。

「今回の依頼の報酬なんだが……」

一同が固唾を飲んで次の言葉を待つ。

「……ミラー・ド・ロンの素材も譲渡して、五百万ルティアで手を打たせてはもらえないか?」

「ご……五百万!?

いや、現実的な金額ではあるが、これはかなりの臨時収入だ……。
それだけあれば、しばらくは依頼もそこそこに資料を集めたりすることができる。

だが、それに納得出来ない者がいた。

「本当なら、その十倍は出すべきなのは? そこまで公国の財政も厳しくはありませんよね?」

イスビスの提案に異を唱えたのは、横に座っている亞里沙だった。その時、イスビスの目に嫌な光が宿つたのが見て取れた。

「失礼、貴女は公認奴隸ですね?」

「……はい」

「では、黙つっていてもらおうか。これは君の口出しすべき領分の話ではない。そもそも公認奴隸の君が主人と並んで座つているのは私に対しても失礼だ。君は後ろに控えていなさい」

その時、俺は無意識に亞里沙の手を引き、席を立つていた。
しかしルイルが、唯一の出入口への道を塞いだ。

「席に戻つて」

「俺はこんな奴と交渉のまね事をする気はない」

「……せめて、話だけでも聞いてくれないかしら」

懇願する訳ではないが、どこか逆らえない雰囲気に押され、俺達は席に戻つた。

「……何が言いたい?」

「君には、格安の報酬とは引き換えにと言つのも難だが、公国の軍の要職に就いてもらいたいんだが……」

「断る。金は都合出来るだけ用意してくれればいい。それじゃ、もつ俺達には構わないでくれ」

今度こそ席を立ち、俺達は会議室を後にした。

ルイルも、今度は邪魔をしなかった。

「」主人様……」「

「亞里沙、おいで」

すぐに宿屋に戻った後、俺は亞里沙を召えさせていた。

そう、奴隸であることを理由に話し合いに参加させてもらえたからだ。

俺の胸で啜り泣く亞里沙の頭を撫で続けた。

口から紡ぎ出されるのは、謝罪の言葉。

「私なんかの……せいで、折角のお話を台無しにしてしまって……」

「……」「めんなさい……」

「亞里沙は何も悪くない。あの男が、この世が悪いんだ……。

俺は、お前のことを見たからって差別なんかしない」

泣き止まない亞里沙を慰めていると、部屋のドアがノックされた。

亞里沙を落ち着かせ、ドアを少し開ける。

「……どちら様ですか？」

「我だ。先ほどは済まなかつた、ちゃんと謝罪させてくれないか

？」

一瞬俺は亞里沙を見るが、まだ泣きそうな顔をしていた。

「……また後日にして下さい」

「いや、どうか今話を聞いて欲しい。このままでもいい

俺はドアを開け、イスビスを中心に入れた。

ツインだが、部屋自体はワンルームなので片方のベットに俺達が

座り、もう片方にイスビスが座った。

服の下は見た目通りの強靭な肉体であるらしい、ベットが大きく軋む音を発した。

「……我、イスビスはマルシア公国の人事を司る役職の長を務めている。今回、右侍君には簡単なテストをさせてもらつた」

「テスト？」

「一体いつの間に？」

「そうだ。今、我らが欲しているのは……奴隸に本当に分け隔てなく接することの出来る人間だ」

「それが、何なんですか？」

「君はその奴隸の少女を深く愛している」

「ぶつ！」

不意打ちについ噴き出してしまつた。

「い、いきなり何を言い出すんだコイツは。

「それに腕も立つ。だから、右侍君を私の直属の部下としてスカウトしたい」

つまり、さつき俺を怒らせたのはわざとつてことか？

「……ルイルから聞いたんですか？」

「ああ。彼女とはちょっととした縁があつてな、こちらの欲しい人材を紹介してくれるんだ。今回のように」

「そういえばルイルが居るのにも拘わらず、がつつい甘えて来た子が居たような……」。

ちらりと視線を亜里沙に移すが、亜里沙はそっぽを向いていた。

「どうだ。来てはくれないか。駆け出しの傭兵の仕事では収入は安定しない。だが、國に勤めるとなると収入は安定するし、君の場合はいきなりの高位職だ。悪い話ではないと思うんだが、魅力的と言えば魅力的な話だが……」。

「……ちょっとと考えさせて下さい」

「分かった。明日また来るから答えを出しておいてくれ。それから、お嬢さん、酷い事を言つて済まなかつた」

「あ、えと……はい」

それだけ言うと、イスビスは部屋を出て行った。
やれやれ、今日も疲れそうな気がしないな。

とりあえず夕食を摂り、別々に風呂を済ませたところで再び部屋で話し合いですることになったのだが、亞里沙の風呂を待っている時に部屋に訪問者が現れた。

「はい、どちら様……つて、ルイルじゃないか。どうしたんだ、こんな時間に」

ルイルは仕事中のような格好ではなく、女の子らしい服装をしていた。

仕事帰りと言った風情か。

「ちょっと話があるの」

「ああ、いいけど」

ルイルを中心に入れ、ベットに座らせた。
外は肌寒いので、温かい茶を煎れた。

「んで、話つて？」

茶を一口飲むと、ふっとため息をついた。

「今日、あの後にイスビスが来たでしょ？」

「ああ」

「私がこの宿に泊まってるって情報を『えたの』
道理で、すぐに宿屋に来たのか。
てっきり尾行されていたのかと疑っていた。
「何故そんなことを？」

「私は、何が何でも出世しなきゃいけないから。だからどんな些細なことでも彼に協力してきたわ。今回だって、あなたのことを

教えてあげた

「それと、一体何の関係が……」

「彼は公国内でも相当発言力のある存在なの。彼に協力して信頼されれば、何か公国内の重要ポストにねじ込んでくれるかもしけないじゃない？」

だから、イスビスの探している人材の情報を与えているのか。つまり、俺はルイルの出世するための道具つて訳か。

「……自分の出世の為に、俺にこの話を受けろと？」

「簡単に言えばそうなるわね。でも、お互いに良い話じゃないかしら。ハツキリ言って、傭兵の仕事だけで暮らしていく人なんて殆どいのが現実よ。みんな公国の騎馬軍に入りたくて公国の人事関係者にアピールしているか、高名な傭兵になるのを夢見て挫折するかのどちらかなの」

現実は思つたよりシビアなんだな。

確かに体張るだけじゃ厳しいのはよく分かる。

「俺じゃなくともいいだろ？」

「いいえ。駆け出しの傭兵が、万が一の偶然が起きてもミラードラゴンなんか倒せないわ。絶対に」

「その偶然かもよ？」

「惚けるのはやめて。敢えて詐索しなかつたけど、あなたは一体どうやってあの恐ろしい怪物を殺したの？ イスビスにも黙つておくから、教えてもらえるかしら？」

「その前に、何でそこまで出世にこだわるのか教えてくれよ。そんな偉くなつてどうするんだ？」

ルイルは、しばらく悩んだ末に滔々と語り出した。

「私は、数年前に実家が破産して身売りに出されたの。本当なら普通に雑用なんかをする奴隸で良かつたのに、不運にも悪徳な奴隸商に売られてしまったの。そうなつては私の運命は決まつていたわ。脂に塗れた男や変態に買われて慰み者になるつてね」

また一口茶を口に含んで、嚥下した。

「でも、市が立つ寸前に國の軍が違法取り締まりってことで助けられたの。あのイスビスの軍にね。彼は人事を司るだけではなく、軍団長もこなしているの。それはまあいいとして、そうして助けられた私は武の才能があるって言われて訓練を受け、今の仕事に斡旋してもらつたの」

「それじゃ満足出来ないのか？」

「傭兵と同じよ。収入は安定しないの。調査員にも信頼つてものがあって、指名したりするのが一般的。私は元々の愛想も良くないからまともに固定客もつかない。それに経験も圧倒的に不足している。だから、実家に仕送りも出来ないのが現状なの……」

「仕送りって……奴隸に出されて売られたのに？」

「両親も強制労働に就いてるわ。生活保護の代償よ」

国によるのだろうが、社会保障的な制度もあるのか。

これは勉強になつたな。

「私以外にも姉と兄が奴隸としてどこかへ売られて行つたの。一月に一度手紙をくれるけど、あつちは普通だったみたいで、普通に暮らしてるわ。って、そんなことよりも、私の出世したい理由を教えてあげたんだからアンタの秘密も教えなさいよ」

ルイルは、私欲なんかの為でなく家族の為に出世を望んでいたのか……。

「ああ。その前に一つ聞きたいんだが、”天児”って聞いたことがあるか？」

「アンタは人をバカにしてるの？ そんなもん知ってるに決まるでしょ。呼吸しなきや人間が死ぬつてことぐらい常識よ

随分と微妙な例えだが、言いたいことは分かつた。

「そうか……。今から俺が言つことは、信じても信じなくてもいい。だが、全部本当のことだ」

「何よ。もつたいぶらなくて良いから教えなさいよ」

意外と口に出すとなると、緊張もするし恥ずかしいものだな。

「まず俺は、”天児”だ」

「……へ？」

開口一番、ルイルは目が点になつた。

「本当の”天児”の力とか特徴とかは分からないんだが、俺は二年ぐらいい前に一回死んでから生き返つたんだ。それで、殺した相手であるアーテミア王国に復讐しようと思つたんだが、思い通りに行かずにつこに来た。それはともかく、俺は一回死んで生き返つた時に『闇』属性魔法に目覚めてしまった。あのバケモンも『闇』魔法で捩じ伏せたんだが、強力過ぎて目を痛めちまつたけどな」

「…………信じられないけど、ミラードラゴンを倒したんだし、信憑性はあるわね。ね、その魔法ちょっとやって見せてよ」

「俺も使つたのは一回だけだから、手加減とかは出来ないと思つが

……」

「良いから良いから。私こう見えても、人の魔力が見えるのよ

「どういう事だ？」

特殊な技能だつたりするのだろうか。

「簡単に言えば、その人の魔法の力量を計れるってこと。力持つてる人が弱い魔法撃つても威力とか全然違うしね」

「それで俺の力量を計ろうって訳か」

「そ。さ、やってみて？ 痛かつたら無理にとは言えないけど」「幸い、目は回復してきたし、こんな機会もあまりないかもしれないしやつてみるか。

「瞬ぐらいなら、大丈夫……かな？」

「いや、やつてみるよ」

眼帯代わりの包帯を解き、右目を閉じて左目でルイルを見る。そして、左目に魔力を集中させて発動を念じる。

『闇』、痛！

「つ！！！ きやああああ！！！」

両目を大きく見開き、悲鳴を上げるルイルを見て俺は慌てて左目を閉じた。

僅かに鈍痛を感じるが、大したことないようだ。

それよりもルイルだ。

「大丈夫か？」

「ええ……。ちょっと、驚いただけよ」

強がつていてるのがもう分かりだが、指摘はしない。

倒れ込んでしまっていた彼女を起こし、ベットに座らせた。

「アンタ……ハツキリ言って異常な魔力ね。

もう何もかも桁違い

よ。 出鱈田もいいとこだわ」

絶賛には違ひはないのだろうが、どこか毒を感じるのは氣のせいではないだろう。

「そうか。で、出世云々の話だが……」

先程解いた包帯を巻き直して彼女の方を見ると、条件反射でなのだろうが、体が一瞬強張つていた。

「……受けてもらえないかしら？」

「ルイルの事情は分かつたけど、まだ分からない。 亜里沙と話合つて決めるよ」

「そつ……、なら良い返事を期待してるわ。 でもね……？」

ルイルが近寄つて來たぞ？

「……私にはあなたしかいないの……」

「ほっぺに、柔らかい感触……？」

「よろしくね」

俺が頬に手を当てて呆然としているのを尻目に、ルイルは軽やかな足取りで部屋を出て行つた。

25 酒乱には気を付けて（前書き）

感想、要望お待ちしております。

25 酒乱には気を付けよ。

「『主人様』
「……はい」

時刻は深夜、場所は宿屋の一室。

俺は地面に正座していた、とこうよつさせられていた。
「自ら罪を告白して下さい」

「……ルイルを部屋に上げて話をしていました」

「話だけではありませんね？」

目の前には仁王立ちをする風呂上がりの亜里沙。
肌がほんのり桜色に染まっており、すじく色っぽい。
それは良いとして、傍田から見れば、ビッチが奴隸でビッチが主
人かは分からぬ光景だ。

「…………ほっぺに、その…………」

「何ですか？」

一言一言が俺の心に突き刺さる。

ああ 心が痛い。

「…………キスを…………されました…………」

「あの子からですか？『主人様』が持ち前の色氣で誘つたのでは？」

そんなもんは持ち合わせていないのだが。

あるのならもつとモテると思う。

「もう…………。 反省してるんですか？」

「反省もなにも…………ごめんなさいごめんなさい」

蛇に睨まれた蛙よろしく、大人しく頭を下げた。

「『主人様』はもう少し私のことを見るべきです。 もう自分のも
のになつたと思つてゐるから浮氣をするんですよ」

「というより、俺もある意味被害者なんだが。 俺のものだけどね、奴隸的な意味で。

「というより、俺もある意味被害者なんだが。 俺のものだからね、奴隸的な意味で。

「浮氣なんかじゃない。俺は亜里沙しか見てないよ

「そ、そういう甘言でルイルを誘惑したのですね！？『ご主人様は

鬼畜です！』そうやって、年頃の女の子を食い物にして……」

「ま、待てって！話が飛躍しすぎだろ。事実、俺はルイルの話

を聞いていて、帰り際にいきなりされたんだよ」

その言葉に亜里沙は何故か衝撃を受けていた。

「そんな……愛の告白を受けて、すぐにキスだなんて……。私に

はすぐにキスしてくれなかつたのに――！」

いかん、キャラ崩壊を起こし始めた。

と言つても、俺が何か発言しても火に油をぶっかけるだけだし……。

ええい、こうなつたら！

「きやつ！？何をするんですか『ご主人様！』

「うるさい！いいか？よく聞け。俺はお前の方が本当に大切なんだ。ルイルとはなにもなかつたんだ、本当に。ただ彼女にも事情があつて、スカウトの話を受けて欲しいつて頼まれただけなんだ」

「……」

だ、ダメか？

ハグをしながら本当の事を言つたのだが……。

すると、するりと俺から亜里沙が離れた。

「……」

俯いていて、表情は窺えない。

だが、怒つているような感じもしないが……まさか、泣いているのか？

やはり信じてくれなかつたのか？

「……ご主人様？」

「な、何だ？」

「どつちのほっぺにされたんですか？」

「左、だが」

答えた瞬間、亜里沙が飛び掛かつて來た。

「のわあ！？」

「ご主人様、動かないで下わーーー！」

「おま、一体何をし」

言い切る前に、マウントを取つた亜里沙が俺の左頬にキスをした。それも一回ではなく、立て続けに十回程。

「……浄化、完了しました」

最後には、清々しい笑顔でそう言つた。

「…………どいてくれないか？」

「嫌です」

「…………何でだい？」

「ご主人様の唇にキスがしたくなつたからですっ」

「そ、そんなに息を荒げなくともいいんじやないか んんつ！？」

我慢出来ないと言わんばかりに亜里沙はむしゃぶりついてきた。

コイツ、絶対にキス魔だ。

時折漏れる声は、切ない甘えた声になつてゐるし。

「…………はふう。 お粗末さまでした」

一頻り躊躇（？）して満足したのか、亜里沙はマウントを解いてくれた。

なんとも嬉しいような恥ずかしそうなイベントだつたぜ……。
まだ一回しかキスしていないハズなのに、もうはまつてしまつたのだろうか。

「ご主人様の唇、柔らかくて素敵ですっ」

恥じらいながらもこんなことを言つてくれる。

「う、ちょっとムラムラ來たよ？」

「あの」

「それじゃ、お休みなさいませ」

俺の言葉を遮り、ベットに潜り込んでしまつた。

その時、部屋のドアが僅かに音を発した。

俺はすかさずそれを聞き咎め、ドアを開けると、そこにいたのは。

「……主人、ここで何をやつていいんですか？」

「へ？ ああ、そのお…………巡回だよー。そつ巡回ー。いや

あ 最近は犯罪も多いからねー、はははは

「そうですか、覗き犯がいたような気がしたんですけどね

「何だつて？ そりゃ大変だ、すぐに追いかけるよ！」

と走り出そうとする主人の服の衿をわしづかみした。

「マスター キーなんか持つて何をしていたんですか？ あと、亜里

沙から少々酒の匂いがするんですが……」

キスの嵐をされているとき、僅かにだが、酒の匂いがした。

俺達はどうちらも酒は飲まない。

つまり、間違えて飲んだか飲まされたことになる。

亜里沙は間違えて飲むようなドジは踏まない。

なら、飲まされたことになる。

「…………分かったよ。 わしがあの嬢ちゃんに酒を勧めた。 でもわざとじやかない。 風呂上がりに一杯だけ良かつたらと囁いて勧めたんだ。 そしたら一杯で酔いが回ってな、酒乱のケガがありそうだったからこれは何か起ころんじやないかと楽しみで……」

「…………もういい。 結果、望みのものは見れなくて残念でしたね」

「全くだ。 ただ、あんな良い子はいないぜ？ 大事にしてやんな」
わしづかみから解放され、服を正した主人はそれだけ言い残して下へ戻つて行つた。

部屋に戻ると、亜里沙は宿屋の貸出品である浴衣をはだけさせて眠つていた。

う、これは……。

亜里沙の裸体がほぼ全て視界に映つてしまい、思わずトイレに駆け込んでしまった。

すっかり賢者になつた俺は、亞里沙の浴衣を正した上で布団を乗せてやつた。

その後もう一度賢者に転身したのは仕方のない話だ。

「……俺も寝るか」

そう言つた瞬間、ドアが鳴つた。

来客か？

しかしこんな夜更けに一体だれが……。

「どちら様ですか？」

「我だ、イスビスだ」

え、と。

まだ夜更けなのだが、まさかもう答えを聞きに来たのか？

「一応お伺いするんですが、ご用件は？」

「何を寝ぼけているんだ。スカウトの返事に決まつてゐるだらう」

「ですよね」。

まだ話し合いをしていないのだが……。

「場所も場所なんで、どこか行きません？」

「良からぬ。ついて來い」

イスビスに連れられてやつて來たのは、大人な雰囲気の店。

「俺は未成年だが、果たして大丈夫なのか？」

「いらっしゃーい、てイスビスじゃない。上なら空いてるわよ？」

出迎えてくれた店主らしき女性はどうやらイスビスと知人らしい。

「では上を借りるぞ。右侍君、こっちだ」

階段を上ると、宿屋のように個室がいくつか並んでいる廊下に出

た。

イスビスは一番奥の部屋を選んだようで、ドアを開けるとそこはテーブルと向かい合いつのように置かれた二つの椅子と燭台しかない殺風景な部屋だった。

片方の椅子に腰掛けると、イスビスもゆっくりと腰掛けた。

「はい、イスビス。久しぶりの交渉？頑張ってねん」さつきの女性が簡単な料理と酒を持って来た。

帰り際に部屋の隅にあつた暖炉に火を入れて行つた。

「あの……」

「まずは一献と行こうではないか」

酒は飲めないと前にも盃が差し出されたので、大人しく受けとつた。

そして、一口だけ酒を口に含んだ。

芳醇な葡萄に似た香がしたかと思つと、すぐに苦みが出てきたので急いで嚥下した。

やはり酒は苦手だ。

「さて、意志は固まつたかな？」

「いえ、まだちゃんと話しあえていないので……」

まさかこんなタイミングで来るとは思つていなかつた。

「そうか……。ルイルが来ただろう？」

「は、はい」

「やはりな……」

この反応を見る限りでは、かまをかけられていたようだ。

でも、一体何の為だ？

「彼女の生い立ちは聞いたと思つが、どう思つた？」

「そりや、大変だと……」

「ではキスをされてどう思つた？」

「いきなり何を言い出すんだ……。

まさか現場を見ていたのか？

「な、何とも思いませんでしたよ？」

「はい、嘘です。

少しぐらいはドキドキしましたとも。

「なら彼女の純潔を捧げられたことは、どう思つ?」

「キス、じゃなくて……」

「男女の営みだ」

「そんなことしてません!」

「……そうか」

さつきから一体何なんだ、この人は。何が言いたいんだ。

「……ルイルが紹介し、俺が欲しいと思つた人材にはこうして頼み込んでいるみたいなんだよ。時には体も使ってな」

「つー?」

「ショックだつたか? まあ、そうでもしないと男の信用なんて得られないしな。右侍君は感じなかつたか? 初対面の印象と帰り際のルイルの態度の違いを」

確かに、初対面より柔らかいイメージが……。

まさか、全部演技だつたのか?

「おつと、彼女の生い立ちに關しては本当だよ。……俺の聞いた限りではな」

「そこままでしても、誰もスカウトは受けなかつたんですか?」

「いや、何人かは成功した」

「なら何故ルイルは未だに調査員をやつしているんですか?」

一番の疑問はそこだつた。

成功しているなら、もう公国に仕えているハズだ。

「あるものは、慰み者として召し抱えようとし、またあるものは、そんな尻の軽い奴を配下に入れたくないと拒んだ」

「……ちゃんとした仕事に就けないから、ですか」

「その通り。ましてや慰み者としてなんて、彼女のトラウマでしかない」

「イスビスさんが職を与えるのですか?」

「多分彼女もそれを宛てにしていると思うのだが……生憎そこまで

人材不足ってことでもないんだ」

イスビスは酒を一気に飲み干すと、皿に盛られたチーズを頬張つた。

「彼女には人の魔力を見る力があります。きっと人事でも役に立つかもしれませんよ」

「それぐらいならもう一、三人ぐらいいる。もっと優秀な奴らがな」

酒を注ぎ、また一口煽ると、俺にも酒を勧めた。

また俺が一口だけ飲むと、話が再開した。

「どうだい、受けてくれないか?」

「今は、お返事できません」

「ルイルの為にも、だ。 そうでないと、彼女はまた違う男に抱かれることになるだろ?」

その時、イスビスの声に哀れみに似た感情が滲んでいるのに気付いた。

自分ではどうしようもないから、代わりに助けてやつて欲しいとも言われているような気がした。

「……」

「そういえば、刀を折つてしまつたらしいな

「あ、はい」

「これで工面してくれ」

渡されたのは金の入った袋だった。
見るからに大金が入つていそうだ。

「受け取れません」

「我個人の出資だ。 気にしないでくれ

「でも……」

「依頼の報酬も未払いだしな、迷惑をかけてスマンと思つていい

何とも断り辛いな。

「ここは有り難く頂いておくのが正解か?

「では、受け取ります」

「つむ。 それでは、今はここまでにしておう。 また日が上ってから訪問をせんもらおう」

「分かりました」

その後イスビスと別れ、店を出て宿屋の部屋まで戻った。

「ただいま、つて起きてる訳ないか」

暗いまでも自分のベットに入ると、先客がいた。

「……ん、お帰りなさいませ」

起こしてしまったようだ。

もしかして待つてたのだろうか。

「ただいま。 寝ていいぞ」

「……スカウトをお受けになられたんですか？」

いや、まだ保留してる。 亜里沙とはまだ相談していないしな

擦り寄ってきた亜里沙を迎え入れ、頭を撫でる。

「私は……お受けになつても良いと思つのです。 でも……

「でも、なんだ？」

「ご主人様と一人つきりで過ごすことが出来なくなるのは辛いです

……」

「そうなると決まった訳じやないだろ？」

泣きそうな亜里沙の身体を抱き寄せ、唇を奪つた。

あれ、何で俺こんなに積極的なんだ？

「……そうんですけど……、心配で……」

「何がだい？」

「他の女性と関係を持つてしまつたりすると思つて……とても不安です……」

ぎゅっと抱きしめると、亜里沙も抱きしめてくれた。

「なら、初めては亜里沙がいいな……」

「俺何言つてるんだ？」

「これ爆弾発言だよね？」

「説教ものだよね？」

「……私も、右侍がいい」

その時、俺は自分の中で生じた衝動を抑えられなかつた。自分のことを名前で呼んでくれた。

それも、俺を求めて。

「…………」

浴衣を脱がせても、嫌がられなかつた。

俺は、この上ない愛情を抱いて亜里沙と一つになつた。

俺も、きっと不安だつたんだ。

ハグをしてもキスをしても主人に強要された奴隸がするのと変わらない気がしていたのを、ずっと無意識下に抑えていたのだ。

それも全てが解き放たれ、情愛へと変わつていつた。

ただ一つ残念だったのは、お互に酒が入つていたことだつた。

頭痛が、目覚まし代わりになつて目を覚ました。

もう朝……どころか夕方だつた。

「えーと、俺は一体……？」

服を着てベットに寝転んでいる。

あれは夢だつたのか？

そう、だよな。

だが、それならこの身体の倦怠感は何だらう。
特に下半身中心の。

「ご主人様、おはようございます」

風呂上がりで浴衣姿の亜里沙が妙につやつやしている。

風呂上がりと分かるのは、石鹼の香りがするからだ。

「ああ、おはよっ……」

起き上ると、一日酔いと言つ奴なのか頭が痛い。

「ご主人様、今夜も激しくしてくださいね？」

「は？」

「もう……。あんなに愛の言葉を囁きながら抱いてくれましたのに、もう私は用済みですか？」

……夢などではなく、現実でした。

これで分かったのは、俺も相当な酒乱だと言つこと。

それも色慾が強くなると言つ質の悪い……。

「それより、何か飲み物を……」

「こちらどうぞ」

手渡されたコップの水を飲み干す。

「……これ水じゃないな？」

「お酒です」

ニッコリ笑顔の亜里沙さん。

注意力が散漫だった俺の負けだ。

大人しく酔わされて長い長い第一ラウンドに突入して行つた。

そういえばなんか忘れているような……？

26 大金を得ると人の気持ちは大きくなる（前書き）

感想、評価等お待ちしております。
是非ともお願いします。

26 大金を得ると人の気持ちは大きくなる

俺と亞里沙は急いでいた。

身体が倦怠感を訴えて来て本当は動きたくないんだが、そもそも言つていられない所以ある人物との待ち合わせ場所に急行している。何故倦怠感に襲われているのかはノーコメントだ。

「何とか間に合ったな」

着いた場所は連合前。

この場所で待ち合わせをしており、会う相手はもちろんイスビス。「む、来ていたか」

すぐに、俺達が来たのとは反対側からイスビスが現れた。
「では早速、中に入るか」

「はい」

受付を通り過ぎ、前にも使った会議室に入った。
「さて、本題に入ろう……と思ったが、その前に。 昨日はスマンなかつたな」

はて?

昨日は記憶が途切れ途切れで何があつたのか覚えてないのだが……。

隣の亞里沙も小首を傾げるばかり。

「その……君達がそこまでの関係とは知らなかつたんだ……まだ何が言いたいのか分からない。」

「まさか、肉体関係だつたとは……」

「なつ！？」

見たのか?

でもどうやって！？

いや、あの主人ならやりかねんな。

「どうせ覗きでもしてたんだろうし。

「いや、その……君が彼女を好いているのは分かつたんだが……、
そこまでとはな」

「え、あ、えーと……」「

一気に場の空気が滞つた。

酒のせいだ、と言つたといふで信じてもらえるかは微妙。
信じてもらつたといふで見られていたことに変わりもないしな……。

「……とにかく、こちらの伝言が伝わつていて良かったよ」

「あ、あの、そうですね」

まさか、今朝見て急いで来たとは言えない。

そこまで盛つていたなんて、絶対に知られたくないつ。「で、答
えはどうだ?」

「そのことなんんですけど……」

そのことについては、昨日の行為の休憩中にじつかり話合いをして
いた。

「あ……右侍い……ら、らめえ……」「

「まだまだ、イクぜ……?」

俺は腰の動きを早め……。

いかん、回想を間違えた。

「……スカウト、どうするの？」

俺の下で、一息ついた亜里沙が尋ねた。

「この時間だけ、亜里沙は一組の男女として対等な口調で話していくれる。

「そうさな……。このままじゃ服の代金は払えても、また金がかかることに出くわしたら払えんかもしれんからな……」

俺は、ゆっくりと腰を動かし始めた。

亜里沙は、少し端いだ。

「ん……ルイルの、事情ってなんなの……？」

「この「」とは亜里沙に話して良いものなのか、昨日から逡巡していた。

問題はないのかもしれないが、如何せん人の暗い過去の話であり、そうそう他人に漏らされたくない話だと思っている。

「……絶対に誰にも言うなよ？」

しかし亜里沙は俺の大事な人であり、ルイルとも面識があるので一応話すことにした。

一通り話しあると、悲しそうな顔をしていた。

俺もこんな表情をしていたのだろうか？

「……悲しいけど、今は頑張つてるもんね……。やつぱりスカウトは受けるべきじゃないかな。ルイルも一緒に」「

「やつぱりそういう思つか？でも、仕事は傭兵の方がいいんだよな……。」「う、気ままな感じがさ」

「仕事つて……確かに奴隸関連のことよね？」

「ああ。それがどうかしたのか？」

何やら、亜里沙は案を思いついた様子。

「ちょっと耳貸して？」

「…………なるほど、その手で「」」

「イスビスさん」

「ん、どうした？」

急に改まった俺の態度に姿勢を正すイスビス。

「今回スカウトしようとしているのは奴隸関連の仕事の話なんですね？」

「ああ、そうだ」

「具体的にはどう言った仕事内容なんですか？」

テーブルに置かれた茶を一口飲んで、舌を潤わせる。

「簡単に言えば、攻略部隊の戦闘中に奴隸達を救出したり、救出した奴隸の心のケアをしたりすることだ。意外と二つ目が出来ない人材ばかりでな、君のような人材が欲しかったんだ」

これなら、亜里沙の案で行けるか……？

「あの、公国軍の軍事行動以外で救出しなければならない奴隸もいるのでは？」

「……どういうことかな？」

「例えば、連合の依頼中に救出の必要性がある奴隸がいれば、それを救い出して心のケアをする……。つまり軍の行く所だけではなく、依頼等でしか行かない所や軍の行けない所まで、細部までキッチリとしたいんです」

「……つまり、我のように一足の草鞋を履きたいと言つわけか」

「そういうことです」

イスビスは腕組みをして考えを巡らせている様子。

「どうやらその返事は予期していなかつたよつだ。」

「……ルイルは、どうする？」

「部下としてでも同輩としてでも雇つて貰いたいのですが」

「…………いいだろう。ただし、家宅はこちらの用意する所へ移つて貰う。それと、召し出しがあつた場合は必ず参上しろ」

「は、はいっ」

どうやら認めて貰えたみたいだ。

後は、報酬だけ受け取らないとな。

「それで君の地位だが……。 我は人事統括大官兼第十三騎馬隊長だ。 君には、人事特別統括官に任ずる。 私の直属で、人事の部門に於いては一番目に偉いぞ」

「そんな高位でいいんですか？」

まさかそこまで買われていたとは知らなかつた。

「あとは、ルイル。 そこに居るのは分かつている。 出てきなさい」

ドア向こうに声を投げかけると、静かにドアが開いた。 開けた人物は、果たしてルイルだった。

「……失礼します」

初対面の時と同じく無愛想に見えるが、少々照れているのが分かる。

「君も晴れて国の大戦力だ。 だが、上司の彼が役所では働きたくないと言つてゐるから、前と同じく依頼の世話をしてやつてくれ。 そして君の役職名は人事特別統括官補佐だ。 しつかりやつてくれ」「はいっ」

イスビスがいろいろと手続きをするために一度役職に戻つたので、会議室には俺と亞里沙、ルイルの三人が残つていた。

「……何よ」

「いや、國勤めになつて良かつたねつて」

何故か刺々しいルイルだが、嬉しそうではある。

「……そうね。 遅すぎるぐらいだけど」

「この憎まれ口だ。」

しかし顔を背けているので全く以つて本氣で無いのが分かる。

冷めてしまつた茶を飲み、一息ついた。

これで良かつたのだと、言い聞かせる。

あまり国と言つものとは関わりたくないという気持ちもあった。が、現実問題では、傭兵一本で暮らすには限度があると言つことだ。

いくら俺が規格外でも、力の使い方なんてものはまだまだ分かっていないのだから、死ぬ可能性は十分ある。

なら依頼で無茶を続けるよりは、ずっと生き延びられる選択をしたに違いない。

そう自分に結論付けて残りの茶を飲み干した。

それからしばらくの時間が経ち、イスビスが戻つて來た。

「ではこの書類にサインを。あと、報酬はミラードラゴンの懸賞金と国の褒賞金と連合の報酬を併せた、二千五百万ルディアだ。後で連合窓口から受け取ってくれ。それと、書類通り、給与は月一で右侍君は八十万ルディアで、ルイルは六十万ルディアだ。役人は税が免除されているから差し引かれることはない」

税金なんてシステムは考えてなかつたな。

まさか累進課税とかあつたのか？

だとすると、荒稼ぎ出来ていてもそこそこ取られていたのかもしない。

「これだけで、もう役人になつたんですか？」

サイン一つとはやけに簡単な契約だ。

「これも立派な魔法契約だ。裏切つたりすればこの契約書が焼却される。そしてその苦しみは同時に契約者が受ける。つまり、この契約書は第二の自分の身体つてことだ。もし裏切つたりするんだつたら、こいつを持つて逃げることだ」

そ、そんな恐ろしいものにサインしてしまつたのか……。

でも、それで簡単には裏切れなくなるということだ。

「分かりました……。えつと、引っ越し先はどこですか？」

「ああ、それならこの地図を渡しておから好きに使つてくれ。

あと、これが鍵だ」

地図と鍵を手渡された。

随分と中央の住所みたいだ。

ちなみに今住んでいる場所は国の端の方だ。
では、また召集がかかった時は役職に来い。 では、我ほこの辺

で

伝えることだけ伝えてイスビスは出て行つた。

これで、国の役人か。

とりあえず換金してくれるか。

「ルイルは、これからどうするの?」

「どうするつて……仕事だけど?」

「じゃあ依頼行くの?」

「ううん、今日もここでお留守番だと思つわ」

「なら、俺達が固定客になるから依頼行こいつよ」

すると、ルイルは面食らつた表情になつた。

「……なんで?」

「え?」

「なんで私なんかに構うの? もう私と拘わり合つ意味も理由も無いはずよ?」

何故かまた刺々しくなるルイル。

なんかまずいこと言つたかな……。

「いや、知り合つなんだし、仲良くしたいなつて思つて

「…………そう。 なら待つてるから早く来なさいよ」

そう言つと、足早に部屋を出て行つた。

「…………なあ里沙」

「はい、なんでしょう?」

「なんで俺の足踏んでるんだ?」

「何となく、です」

正直、ものすごく痛い。

「刀折れたままだ」「気付いたのは一先ず宿屋に戻った時の」と。換金したので金はある。よつて武器調達にやつて来た。

「亞里沙も自衛用の武器と装備が必要だな」「そうでしょうか？『主人様が守つて下さるので必要ないかと』と言う亞里沙だが、流石に万が一には備えておいて欲しい。信頼されてるのは嬉しいのだが。

「やはり刀だな」

武器屋の武器を一通り手に持つてみたが、一番なじむのは刀だった。

「店主、今の売れ筋は？」

「今は、微弱な魔力を帯びた剣が人気じゃな。魔法が使えなくとも火や水の攻撃が出来るのが特徴じやのう」

そんな仕様もあるのか。

なら、自作も出来るんじやないだろ？

「……ところで兄ちゃん。一つ聞いてもいいか？」

「あ、はい」

「もしかして、相当高名な傭兵なんじやないか？」

まだ駆け出しの傭兵ですが何か。

ミラードラゴン倒したけども。

「まだ先日傭兵になつたばかりですよ」

「そうち……。兄ちゃんから感じる魔力にただ者じやねえものを感じたんじやが……」

「……分かるんですか？」

店主が鎌をかけるつもりで発言した訳ではなさうなので、興味が沸いた。

「ああ。俺あ、若い頃に兄ちゃんと全く正反対のものを持った奴と旅をしていたんじや。そいつはとにかく何もかもが規格外じやつた」

まさか……。

「もしかして、”天児”ですか……？」

「良く知ってるな。その通りだ、って……兄ちゃんまさかここで”天児”を知る人物と会えるとは思っていなかつた。

「はい。僕も”天児”なんです」

「」りあたまげた……。まさか生きてる内に一人も”天児”が見れるなんてな……」

心底驚きながらも作業場で何やら探している店主。

かなり奥まで所にあるらしく、時間がかかるつていい。

「ん、これじやつ。間違いない」

何やら細長い箱を持って来た。

錠を開いて中を見ると、中には一振りの刀。

黒塗りの鞘と柄。

飾りなど一切設えられていない無骨なデザインが妙に俺の心をくすぐる。

「……魔力もありませんね」

魔力の痕跡だけはあるが、肝心の魔力がもう残つていなかつた。

「もう四十年は昔じやからな。ここまで保存がええのも奇跡じやわい」

手にとつて良いと言わされたので、遠慮なく刀を手にとつて、抜い

た。

「……すげえ

何が、とは言い表し得ないが、刀を抜いた瞬間に空気が変わった錯覚に陥つたのだ。

緊張感の張り詰めた、一触即発の戦闘の空気だ。

「良かつたら、持つて行つてくれ。でないとこでいつまでも埃を被るだけじゃ」

「本当にいいんですか？」

「ああ。好きに使ってくれ」

こうして俺はただで名刀を手に入れた。

亜里沙の分の刀はちゃんと代金を払つて購入。

店を後にした。

防具も見に行つたが、正直見た目があまりにも格好悪いので購入せず。

と、ここでもう一つの用事を思い出した。

「服を取りに行かない？」

「そうですね。それにしても、水晶はいつ赤くなつたんでしょうか……」

そう、俺達が宿屋に戻つた時に初めてその存在に気付いて見てみると赤くなつていたのだ。

そういう訳で店に行くと、あの女性店員が出向かえてくれた。

「いらっしゃいませ、水晶の方をお預かり致します」

水晶を渡すと、待つていてるよつに言われたのでそこにあつた椅子に腰掛けた。

店内は俺達の他には誰もない。

大通りの雜踏の音と人の声が聞こえるだけだ。

「お待たせ致しました。どうぞこちらへ」

通されたのは、試着室だつた。

「ではサイズの確認だけして下さい」

衣装籠に入つた服を持って俺と亜里沙はそれぞれ試着室へ。

俺の方は大して問題も無かつたのですぐに終わつた。試着を終えると、同時に亜里沙も出てきた。

だが、その装いが違つた。

言うなれば、それは深窓の令嬢だつた。

「シコツと笑いかれると、それはもう上品な美しさでつい見とれてしまつた。

「……似合つてますか？」

「……ああ、すごく綺麗だ」

「良かつたです」

すると今度は少々大きめの作りになつているのか、上着はふわふわとした雰囲気の服。

言つなればポンチヨに近いイメージの服、そして下はスカート。

さつきとは違つて今時風の格好だ。

「ヒーヒはどうですか？」

「可愛いよ」

「ホントですか！？」

「ああ」

嬉しそうにする亜里沙を見ると、本当に心が安らぐ。他にも服はあるようだが、お楽しみと言われて見せてくれなかつた。

それと、亜里沙はちやっかり下着もオーダーしていたようで、それも試着していたらしい。

そりやあ高くもなるさ。

「ではそろそろお会計を……」

「えーと、これで

通貨は基本的に一、十、百、千、万、十万の単位で発行されている。

補足だが、百ルディアから札になる。

今回は四十九万二千ルディアなので、十万ルディア札を五枚支払

つた。

お釣りは千ルディア札が八枚になるといつことだ。

「ありがとうございました」

店員に見送られ、大通りへと足を踏み入れた。

今亜里沙はあのポンチョのような服を着ている。

余程気に入ったのだろう。

「ご主人様？」

「ん？」

「本当に、ありがとうございます」

お礼を言いながら、いきなり腕に抱き着いて来た。

か、可愛い……。

「いや、いいんだよ。亜里沙がより可愛くなつて俺も嬉しいよ」

「えへへ。実はですね、ご主人様の下着もオーダーしておいたので後で見て下さいね」

それは嬉しい誤算だ。

帰りに見ていくつと思っていたが、手間が省けた。

「さて、引っ越しの準備だ」

「はいっ」

まるで買い物デート帰りの若夫婦みたいだと勝手に思いながら、幸せを感じて宿屋に戻った。

27 寂しさを癒して（前書き）

本日も投稿と相成りましたので、投稿します。
感想や評価、要望などお待ちしております。

宿屋に戻ると、荷物が無くなっていた。
元々の備え付け家具以外は何一つ残つておらず、初めてこの部屋
を見たのと同じ状況だった。

「えーと……空き巣か？」

この世界に防犯装置なんてものはない。
とは言え、ここは宿屋の三階で、外からの侵入は難しいだろ？
なら、このドアからの正面突破が残る。
しかし押し入った形跡もない。

「あの……お金もないです……」

残して置いた金が一ルディアも残つていなかつた。
これは……本当に困つたぞ。

「おう、君達。 サっき運送屋が荷物運んでつたぞ。 これ、泊ま
つてない分の宿泊費の残りだ」
トルディアの入つた袋を手渡された。
その前に、運送屋が来たつて？
そいつらが犯人か？

「あと、下にあの大男来てるぞ」
「大男つて……」

思い当たるのは一人だけだ。
イスビスのこと違ひなかつた。

「そういう訳で、引っ越しはもう済んでいる」

開口一番にそう言われたので、一瞬何を言われたのか理解出来なかつた。

「えっと……」

「早く新居に行つたらどうだ？ もう用事は済んだろ？」

「あの、運送屋を寄越すんだつたらもつと早く言って下さい。泥棒かと思いましたよ」

あの大金が盗まれていたらと思うと背筋が凍りそうだつた。
もし金庫かなんかがあつたら、絶対にそれに放り込んで管理しようと思つた。

「何しろ急だつたんでな。 今回は事後承諾ということで許してくれ。 代わりと言つちゃあ難だが、新居まで案内しよう」
イスビスの先導に従い、新居へ向かつた。

また何か忘れているよつな……。

一方、連合では……。

「なによ、すぐに来てつて言つたのにい！」

ルイルが全力で拗ねていた。

仕事の同僚が、たまたま街中で買ひ物を楽しむ彼らを見たという報告を受けてからこの調子である。

自分は素直（？）に彼の言葉を聞き、大人しく待つていた。

実はその後すぐに一件仕事を任せられそうだったのだが、無理矢理代えてもらつたのだ。

そこまでしたのに、買い物をしていた……それもあの女と……。

その事実がルイルの機嫌の悪さに油をたっぷりと注いでいた。

「信じそくなつた私が馬鹿だつたわ……。 私のファーストキス

を返せ——！」

……遠巻きにその様子を見ていた同僚達は、哀れみと好奇心を含んだ目で彼女を見ていた。

「え」

俺達は新居に着いて一息入れていた
二階建ての、普通の家より少々大きい物件で、一人で暮らすには
部屋数が多い。

多分、十人は暮らせるぐらいの広さがある。

そこで引っ越しも終わった居間で、亞里沙の煎れた茶を飲んでいた時のイスビスの一言が俺を驚愕させた。

「すまんかったな」

最早お決まりの謝罪。

「もしかして……騙されたのか、俺達？」

「こちらも切迫していたのだ。 分かつて欲しい」

それはこちらの知るところの事情ではないと、反論したかったが
それはもう詮なきことなので黙つておく。

変に逆らつたら契約書を燃やされそうだ。

また生き返れるのかもしけんが。

「まあ良かつたではないか。 ルイルは男の手すら触ったことのない純潔の乙女だぞ」

「……それはともかく、騙していたことに違いはありませんよね？」

つまり、あの夜のルイルのキスは……。

いかんいかん、思い出すだけで鼻血が出しつだ。

「ならば、何かしらの形で便宜を便宜を図らせてもうおう」

何とも抽象的で都合の良い答えたが、一応それで納得しておこう

とにした。

「では、我は帰るところよ。」この家は好きに使ってくれ」玄関までイスビスを見送り、ドアが閉まるなり何かが抱き着いてきた。

言つまでもなく亜里沙だった。

「い主人様……。」

俺の胸に顔を埋めて甘える亜里沙を俺も抱きしめた。

恐らく、一人っきりになるまで我慢していたんだろうな。片方の手で頭を撫でると、さらに身体を密着させてくる亜里沙を受け入れ、より強い抱擁になった。

しばらく経つて、亜里沙が顔をこちらに向けて、まるでキスをせがんでいるような気がした。

俺から顔を近付けると、亜里沙も背伸びをしてそれを受け止めようとして、唇と唇が重なり合つ……ハズだったのだが、ドアからものすごい視線を感じてそちらを見てみれば、そこには怒りに燃えるルイルがいた。

何故怒っているのか分からぬ。

根本的に言えば何故彼女がここにいるのかも分からぬ。

「や、やあ。どうしたんだい？」

出来るだけ冷静に対処しようと試みたが、ややぞいちない口調になつたのは致し方ないと諦める。

「どうした……ですって？ 今朝のことをお一一へ考えて思い出しなさい」「…………」

今朝……スカウトを受けて、ルイルがドア越しに盗聴していたのをイスビスが言い当てて、ルイルと話をした……だったハズ。

「そうね、私がもつとハッキリ言えば良かつたのかもね！」一緒に任務に行こうって！

……思い出した。

やんわりとではあるが、すぐに装備を調べて連合に行こうと思つていたのがいろいろと用事が立て込んでしまって、結果的に行けな

かつたんだ。

「挙げ句の果てに、引っ越しした新居で奴隸女とイチャイチャしやがつてちきしょ——！」

頭に血が上り過ぎたのか、キャラブレが発生してしまったご様子。と、とにかく宥めないと……。

「お、落ち着けルイル！ 明日謝りに行こうと……」

「今の今まで忘れてたクセに何をいけしゃあしゃあと！ そ・れ・よ・り・も！ いつまでアンタ達はくつついでるつもりなの!? 人の目の前なんだから、早く離れなさいよ！」

またしても女の子らしい服装をしたルイルが鞄を振り回して暴れ出した。

それも半狂乱になつていいのか、スカートが捲れ上がって中の布地や白い太ももなんかが丸見えになり……それが俺の命を脅かす結果になつた。

「ぶほおうー？」

鞄の直撃と鼻血の噴射が重なり、そのまま床に叩き付けられた格好になつた。

打ち所があまりよろしくなかつたのか、出血が激しいのか、意識が薄れて行つた。

最後に見えたのは、言い争つ亜里沙とルイル……のスカートの中身だった……。

目覚めてみれば見慣れない天井。

そもそも、新居に引っ越して一日目なのだから。

しつかり意識が覚醒したのを確認してから気付いたのだが、これはまたしても膝枕だ。

匂いで分かる、亜里沙だ。

「……いてて」

側頭部に走る鈍痛に顔をしかめたが、目の前のソファーにはルイ
ルがいた。

場所は居間で、時間はとつぱり夜だ。

「その子寝てるから介抱してあげたら?」

そう言われて亜里沙に視線を向ければ、正座で熟睡していた。
足を崩させてとりあえず俺の太ももの上に頭を乗せた。

「ほんとに仲がいいのね」

憎々しげにそう言われても、事実はどうじょうもない。

俺は亜里沙が好きだ。

そして亜里沙も俺を好いていてくれているハズ。

「まあね」

「……どうしましたの?」

「は?」

その質問が何を示しているのかが分からぬ。

「だから…………もういいわよ」

ルイルは顔を赤らめてそっぽを向いた。

一体何だつたんだろう。

「ところで、今日は泊まつてくの?」

こんな時間だ。

部屋も空いているし、泊めるぐらいうてことはない。
が、ルイルはこいつ大丈夫か?と言ったそうな顔をした。
「ここは私の家でもあるんだけど?」

……。

ちょっと状況を整理しよう。

「俺達は、ここを住居に定められたんだが……」

「私もそうよ? 三人で暮らせてイスビスが言つていたわ」

「ここはイスビスか……」

いや、一緒に暮らすのが嫌なんじゃなくて、予想外の事態に戸惑

つていいだけだ。

「んじゃあ、もう荷物も運び込んであるんだ?」

「ええ。一階の南側の角部屋にね」

まだ家中を全ては見ていないので、後で確認だけしておくか。
俺と亜里沙の部屋もどこか分かつてない。

「……分かった。んじゃあ、とりあえず腹減ったし、ご飯にしよう

う

「いいけど、誰が作るの?」

「ルイルは料理出来ないのか?」

「仕事が遅くなつてそんなことをしている時間ないもん。アンタ

は?

「いや、出来ないけど

。 。 。

亜里沙は寝ている。

起こすのは忍びない。

それは、ルイルも何となくだが察しているみたいだ。

「亜里沙寝かせて来るから、食いに行くか

「そうね……」

何とも情けないが、亜里沙を寝かせつけて（荷物が運び込まれて
いた部屋を見つけたので。何故かベットはダブルだった）玄関で待
つていたルイルと合流して街へと繰り出した。

中心街なだけあって、夜中でも賑わいが絶えない。
風俗的な酒場や、公認賭博場は特に騒がしい。
さて、ご飯の話だが、酒場は喧嘩を吹っかけられたくないのでパ
ス。

かと言つて、落ち着いた店に入れば素晴らしい高額料理を食わされるハメになるだろ？

その中間を探していると、イスビスと話し合ひをした店を見つけた。

店の前を通ると、あの女性と田が合つた。

手招きされたので、店に入った。

「……アンタ、こういう店が好きなの？」

店内は、際どいドレスを着たお姉様方が客の相手をしていた。所謂キヤバクラだ。

イスビスも、所詮は男だな。

「あなた、前に来た子よね？」

「ええ、そうです」

女性が近くに来たのだが、香水の類と思われる匂いに鼻が馬鹿になりそうになつた。

「あら、彼女連れ？ ならまた上の部屋貸してあげるから楽しんで行って頂戴？」

否定しようとしたが、女性がテキパキと指示を済ませてしまい、上の部屋に案内されてしまった。

ルイルもありの手際の良さにただ呆然としていた。これは力モられたのだと氣付いたが、もう遅かつた。

「一名様、お食事です」

運ばれて来たのは、肉の盛り合わせと酒。

しかも肉の方はかなりのボリュームで、食べきれるかかなり心配だ。

料理を運んで来た女性が部屋を出て行つた後、すぐに沈黙が部屋を支配した。

「……とりあえず、食べるか」

肉を一切れつまんでみる。

塩がきつく、とても飲み物無しでは食べられそうにない。

その為の酒なのなら、商売上手だ。

「はい、アンタも呑みなよ。」こうなつたら楽しみましょ?」

渡されたグラスには並々と注がれた酒。

亜里沙には後ろめた気持ちがあるが、今から店を変えるのも億劫だった。

仕方なく心で謝り、酒を一口飲み込んだ。

前よりは、美味しく感じられるようになつたが、やはり苦手だ。

「やっぱり、お酒呑むならこいつこいつ店の方が美味しいわ

「普段も呑むの?」

「たまに仕事終わりに付き合わされるぐらいい。量もあんまり呑まないわ」

その割に、もうルイルのグラスは空に近くなつている。

「そうなんだ。俺は苦手だな、苦味とかが特に」

「……味じやなくて、呑まなきや出来ないこともあるのよ

一気にグラスを空けたルイルはさらにグラスに酒を注いだ。

既に顔は真っ赤で、目が据わっている。

出来上がつてしまつた状態だ。

「慣れてないなら、もう呑まない方がいいんじや……」

しかし彼女は俺の言葉を無視して肉を肴にまたグラスを空けた。なんと次は瓶に口をつけて直のみを始めた。

「お、おい! 無茶な飲み方するな!」

急性アルコール中毒になられては大変なので、急いで瓶を取り上げた。

彼女は駄々つ子のように嫌がつたが、酒が回つてゐるため、大した抵抗も出来ない。

「……ぐすつ」

俯いたかと思うと、泣き声が聞こえ出した。
泣き上戸なのか?

「ねえ右侍いー……何れ私はあ、こおんなにい、不幸なのかなあ……」

ゆづくつと、少々呑みの回らない喋りだが、聞き取ることは出来

た。

「それは……なんでだらうな」

「私はあ……幸せに、なりたいのぉ……」

「ああ、やうだな」

「なんでえ、右侍はあ……私を、幸せにしてくれらるいのぉ……？」

今朝のことについての続きだらうか。

よつぽど寝まれてるのだらう。

「今朝のことばごめん。 明田行こうか~ な?」

「ちいがあううう……アンタは、何も分かつてないー!」

違つたみたいだ。

「なんで、アンタはあ……あの子しか幸せにしてあげないの……?」

「え……」

そんなつもりはない。

それに、今回俺がスカウトを受けたことハルイルにとつても幸せ

なことなんじやないか?

「ねえ……キスしてよお……。 らめならハグれも我慢するからあ

……」

「待て待て。 一体どうしたんだよ」

酒に酔つているだけなのだらうから止めないと。

「私はあ……アンタのこと……す……すー……」

……眠つたようだ。

多分、疲れていただらう。

とりあえず、寝かせておこう。

しかし問題は……肉の山だつた。

どう処理しようつか……。

「また来てねー！」

あの女性に見送られて街に出ると、もう人影も疎らになっていた。あの後、一人で格闘した結果は辛勝。

酒の力も借りつつの苦しい戦いだったが、制したのは俺だった。酔い潰れて眠っていたルイルを負ぶさつて店を出たのだが……。

「…………」

行きに煌々と照らされた通りや店は暗闇に溶け込んでおり、酔いも手伝つて方向感覚が全く無くなつてゐる。

頑張つて歩いてみたが、やはり帰れない。

「…………どうしよう。田の前には、怪しげなホテル…………」

そう、ラブホってやつだ。

どうやら、そういう通りに迷い込んでしまつたようだ。

朝一番で帰つて亜里沙に説明すれば許して貢えるだろ？

仕方ない、一泊するか。

うん、仕方ないんだ。

部屋は宿屋並に狭いが、大きな違こと言えば、やはりベッドはダブルサイズ。

とりあえずルイルを寝かせ、俺も横になつた。

このまま寝てしまおうと思つたのだが、そうそう安眠は訪れてはくれなかつた。

「ゆつ…………じ…………」

まだ寝ぼけているようだが、ルイルが目覚めてしまった。

「あ、起きた？」

「うん…………」

…………「…………」で本当のことを言つてバイオレンスな展開になるのは避け

けたいのだが。

しかし嘘をつけばもつとバイオレンスだらう。

なり、本当のことと言おう。

「ここは……ラブホだ」

「……そつかあ。あの、初めてだから……優しくしてよね……？」

「これは、まだ酔つていらっしゃる？」

いや、聞くまでもなく酔つているな。

「いやいや、そんなことしないよ？俺はそこまで黙じやないよ？」

先日は思いつ切り黙だつたんだが。

しかもイスビスに見られてしまつたとこ恥ずかしい思い出付き

で。

「私……やっぱり魅力ないよね。あの子みたいにおっぱいおつき
くないし、性格も良くないから抱きたいとも思わないよね……」

「いや、ルイルは魅力的だぞ？」

お世辞は一つもない。

確かに胸は亜里沙ほどではなくとも、人並みには膨らんでいるし、
腰周りはほつそりしていて見事にぐびれている。
脚も鍛えられているが、筋肉はほどほどで女性らしい肉付きな上
に色白。

これで抱けない男は多分病氣なんだよ、うん。

「なら、抱いて……？」

「いや、そうはならないだらう……」

「魅力的なんでしょう？ だつたら、抱いて欲しいの……」

「一体どうして……」

「家ならあの子が居るから……もう今日しかないの。お願い、抱
いて？」

ここまで美少女に抱いてと言われて断れる勇氣を、俺は持ち合わ
せていなかつた。

「……でも、亜里沙が……」

すると、ルイルは服を全て脱ぎ、生まれたままの姿になつた。

すると、左胸のところに見覚えのある模様が……。

「なら私も奴隸にして。 そうしたら、抱いても誰にも文句は言わ
れないわ。 それに……私は一番に愛してくれなくてもいい、一番
目でいいから、愛して……？」

彼女は、泣いていた。

泣き顔を隠そうともせず、真っすぐ俺を見ていた。

まるで、幼い子供が母親の愛を求めているかのよう。

「…………契約完了、ルイルは俺の愛すべき奴隸だ」

彼女の、ぱっちりとしたオレンジの瞳は黒くなり、髪の毛も黒く
染まつた。

俺の奴隸である証だ。

「ルイル、俺で良かつたら、君の寂しさを受け止めさせてくれない
か？」

「…………はいっ」

しつかり彼女を抱きしめ、泣き止むまでそっと頭を撫でつけた。

彼女は、寂しかったのだ。

そして、俺を求めた。

でも気の引き方が分からず、こいつって身体を、純潔を差し出した。
だから、そつと脣だけを奪つた。

それ以上は、俺が亜里沙に対して申し訳ないのと、また酒の勢い
だけでしたくなかったからだ。

それでもルイルは納得しているみたいで、それから何も言わずに
俺に身体を預けて眠つた。

その寝顔がドキッとしてしまつべうに可愛かつたのは氣のせいでは
ないハズ。

窓の外の景色を見ると、もう夜明けは近かつた。

28 甘い誘惑と眠（寝顔や）

感想や評価、特に感想をお待ちしております。

翌朝、一日酔いでまともに歩く」とせえできないルイルを担いでホテルを出て家へと戻った。

玄関を開ければ、仁王立ちする亞里沙さん。

これはお説教コースだね。

でもルイルは寝かせてからにしてください。

「お帰りなさいませ」主人様、ルイル」

ニッコリ笑顔だけども目が笑つていません。

確実に怒つていらつしゃる様子。

「随分と遅い帰宅ですね。それに……ルイルの髪が黒くなっているのは何故ですか？」

やつぱり見逃してはくれなかつた。

「と、とりあえず……ルイルを寝かせてからお説教を……」

「早く戻つて来て下さいね？」

笑みが消え、真顔になつた亞里沙の変容に背筋に冷たいものを感じながら一階ヘルイルを運んだ。

部屋のベッドに寝かせると、すぐに安らかな寝息を立て始めた。とりあえず掛け布団だけ掛けで部屋を後にした。

結果的に言えれば、こつてり絞られた。

暴力はなく、精神的にふるぼつこにされた。

「……それで、ルイルも奴隸にしたんですね？」

流石に、ルイルに公認奴隸の烙印があることは俺達は見落として

いることだった。

だが、誰とも契約していないのは意外だった。

てつくり連合の上層部とかと契約している気がしたんだが、……。

「そうだ。まあ成り行きと言つか……」

亜里沙は頻りに俺がルイルを抱いたのだろうと鎌をかけて来たが、抱いていないのでボロも出なかつた。

流石に思い止まつたよ？

「で、これからどうされるつもりですか？ 連合に勤める彼女を奴隸としてご主人様が私有化してしまつた以上は、最悪彼女は退職しなくてはなりませんよ？」

「いつちの労働条件を知らないのだが、もしかしてまずかつたか？ 「えーと、どういうことだ？」

「一般的に奴隸は私有化された場合はその人に仕えるんです。つまり、私達と同じく傭兵になる可能性があると言つことです」「折角の職場を失うつてことか。

一応役人ではあるが。

「とりあえず、ルイルの意向も聞いてみよう。まずはそこからだ」と言つても爆睡していると思うが。

どうしようかと思案していると、玄関のドアがノックされた。
「はーい、どちら様でしょうか？」

亜里沙が出迎えると、すぐに訪問者は中に入つて來た。

「ルイルは何処だ？」

「……何をしに来たんですか？」

不審に思つて尋ねてみると、彼は左手に持つっていたモノを見せつけた。

「「染色剤……？」」

俺と亜里沙は同時に首を傾げた。

「今朝一番に報告を聞いて焦つたぞ。まさかもうルイルに手を出
すとはな」

「手を出すなんて……」

「奴隸化しているのは、立派に手を出した証だ」「ぐうの音も出ないとはこのことだ。

眠っているルイルを椅子に座らせ、染色の泡を塗つていぐイスビスの手つきは慣れたものだつた。

「こいつこいつことは、結構な回数やつて来たんですか?」「まあ、な。……よし

どうやら終わった様子。

「では後は任せてくれ」

そう言わされたので部屋を後にした。

下へ戻ると、亜里沙が昼食を作つて待つていた。

「もう終わるみたいだ。ちょっと待つてよ!」「…………ご主人様?」

急に不安そうな顔をした亜里沙。

どうしたのかと尋ねるまでもなく彼女は抱き着いて來た。

「私のこと……捨てないで下さいね……?」

「何馬鹿なことを言つてるんだ。俺は亜里沙が大好きなんだぜ?」「ルイルばかり見ないで下さい……。わがままな奴隸で申し訳ありません……」

頭を撫でて落ち着かせようとしているところ、階段から人が降りてくる足音がした。

それを感知するなり、亜里沙は俺から離れて元居た席に座つた。

「『』はんにしましそうか」

イスビスが姿を現した所で、亜里沙は笑顔でそう言つたが、どうにも無理をしているような笑顔だつたのに気付いた。

「では我は戻るとじよつ。 くれぐれも、連合には知られなこようにな」

「はい。 では」

イスビスから注意されたことは一いつ。
まずはルイルを奴隸化したことを連合には秘密にしておへいと。
そして二一つ目は、俺達には監視兼護衛が付いているので、あまり
軽率な行動をするなど釘を刺されたことだ。

「さて、と。 今からどうする?」

「そうですね……。 いろいろあつて疲れたので、お昼寝でもしませんか?」

これからは依頼も役人の仕事も入つてくるだらうし、安眠出来るのも今日ぐりいかもな。

よし、そうとなればお昼寝だ。

「じゃあ寝るか。 つて何をしてるんだ?」

正座をした亜里沙。

膝の上を軽く三回程叩いた。

恐らくはここに来いというジロスチャーだ。

「いや、部屋に行こうよ」

「どうぞこちかくへ

聞いてらっしゃらない。

仕方なく俺は膝枕をしてもらつた。

かなり嬉しいんだけどね。

「寝心地はどうですか?」

「かなり良い」

「ふふ……おやすみなさい、右侍」

その言葉が引き金となつたのか、疲れの津波が俺を飲み込み、す

ぐに俺の意識を奪つていった。

「ちょっと右侍起きなさいよ。起きなさいってばー。」

誰かが俺を叩いている。

もう少し寝たいんだ……そつとしといてくれ。

「こうなつたら……えい

「痛つ！？」

思いつ切り腕を抓られた。

その痛みに耐えかねて眠気が飛んでしまった。

「あ、起きた」

「何て起こし方しやがるんだ……」

すっかり出会った時と同じ、オレンジの髪色をしたルイルがちょこんと座っていた。

「ねえ右侍。私つてもう右侍の恋人よね？」

「は？」

「契約してくれたじゃない。髪の色はどうせイスビスが戻したんでしょうけど、しつかり記憶にはあるんだからね？」

恋人ではなく奴隸だと思うんだが。

「俺の恋人は亞里沙なんだが……」

「一番は譲つてあげるから、一番目の恋人つてこと」

何とも都合の良い解釈なんだが、彼女は俺との契約を恋人としての契りとも受け取っているのか？

「いや、でも……」

「じゃあ、他の誰かに抱かれていいの？」

「良くはないけど……さ」

とにかく亞里沙にこれも話すべきか？

また説教になりそ^うだが。

「ところで何で起^こされたんだ?」

「べ、別に何でもないわよ?」

「なら、おやすみ」

再び眠^つっている亞里沙の膝枕を楽しも^うとするヒ、腕をルイルに掴^{つか}まれた。

「……か……の」

「ん?」

「寂しかつたのつ!」

「うわあ!?」

勢いのあるタックルにバランスを崩してしまい、縺れ合つて床に転倒した。

「いて……つてうわつ」

仰向^{むけ}けに寝転んだ俺が膝をつき、その下腹部の辺りに俺に抱き着^ついているルイルの下腹部が当たつて……。つまり、体勢的には騎……。

「ふわあ……、つてご主人様何をしてるんですかつ!?」

タイミング悪く目を覚ました亞里沙は俺とルイルの誤解を招きそうな体勢を見て、目の色が変わつた。

「いや、これは誤解で……」

「ご主人様! そんなに溜まつていらつしゃるのなら私に言つて下さい! という訳で今からご主人様に愛し……ご奉仕致します!」「ちょっと、私が先よ!」

俺を巡つてこの場に收拾のつかない痴話喧嘩(?)が勃発した。

今はゆつくり眠りたいのだが……。

「いいえ、新入りには荷が重いので先輩の私がやります!」

「右侍は初物だから私が適任なの!」

俺は初物とか気にしない主義なんだが……。

そうだ、連合に依頼でも見に行くか。

確かあそこは夜でもやつていたハズだ。

「初物じゃあ到底ご主人様のご奉仕なんか出来ません！ 精々鳴かされるだけです！」

「ていうか、そんなに抱かれたいなら陰館でも行きなさいよ！」「ご主人様と一緒に居て、ご主人様にしか抱かれたくないかもしれません。私はご主人様の妻なんですから」

「結婚しないでしようが！ 勝手に右侍を墓場に持つていかないで！」

ヒートアップしてゐる……。

ルイルの言う墓場つて、結婚は人生の墓場つて言つあの墓場なんか？

「私のご主人様だから結婚しているも同然ですっ！ あなたは、まあ食事の世話ぐらいならさせてあげますわよ？」

「頭きたわ……。あのねえ、『デカ乳だけが魅力だと思わないでよ！？ 思つたよりお尻大きいクセに！』

「ひつ！？ 言いましたね？ 私が最近悩んでいる恥ずかしいコンプレックスを言いましたねつ！？」

「ええ言つてやつたとも。あと、勘が正しければお腹も……」

「いやああ！？ もう言わないで！ 不摂生をした私が悪かつたから、もうご主人様に私の恥ずかしい悩みを暴露しないでえええ！」

ルイルの勝利に終わつたみたいだな。
かく言う俺はもう玄関にいて、ドアを開けるところだった。
触らぬ神にはなんとやらつてな。

連合は予想通り、夜でも開いていて、何組かの傭兵達が依頼板の前で何やら話し合つてゐる。

そして一階からは相変わらずの怒号と喧嘩が何かで生じる振動が

伝わってくるのだが、正直穴が開かないか心配だ。

「んーと……」

上級の証である額縁に飾られた依頼書を順に見ていくと、依頼板を見に来た目的の一つを発見した。

「ミラードラゴン討伐、報酬は一千万ルティアか……。やっぱ上級の魔物だったんだな」

しかしその依頼書には大きく赤い字でバツが印されていた。

討伐完了と言うことなのか、受注済みの証なのかは分からぬが、とりあえず受けられないと言つことは分かつた。

「君、一人かな？」

後ろから声をかけられると、炎を摸した様な形の大剣を背負った女性が立っていた。

見た目的に年齢は俺より三つぐらい年上か。

クリーム色の髪をサイドポニーで結っているのが良く似合つている色白美人だ。

一番の特徴は、右目眼帯と装備の上からでも分かる大きな膨らみと引き締まつた腰周りに大きすぎるという印象は与えない形の良さそうなお尻。

典型的なナイスボディ……亞里沙とルイルを足して割つたらこんな体つきになりそうだ。

「はい、他のメンバーは家ですけど」

「君、女難の相が出てるよ。もしかして追い出されちゃったの？」本当に傭兵か?と思わせるぐらい上品な笑い方をする彼女に、俺は新しい魅力を感じていた。

すばり姉キャラ。

ただ、一つ気になる点を挙げれば、瞳に生気が感じられないことか。

「いや、まあ自分から出でてきたと言つか……」

「恋する女の子って恐いものね」

その通りだと思う。

ただ、一緒に住むことになつてているのだから仕方ない。

「あ、申し遅れたけど、私はビエルア・クオールと言います。好きに呼んでもらつて構わないわよ?」

「僕は竹中 右侍つて言います。えーと、クオールさん

「何かしら?」

包容力のある笑顔にノックアウト寸前です。

「あの、何で僕に声をかけたんですか?」

「そりやあ、武器も鎧も着けずに上級の依頼板を見ているんだもの。みんな興味津々よ?」

そう言われて周りを見ると、色欲に塗れた視線を送る男傭兵達の姿。

いやいや、気付いてないあなたですって。

「そういう人つて、無謀ですぐ死ぬか……」

細いが、引き締まつた腕が伸ばされ、手が頬に当たられた。

そのちょっとした行為が、今まで見たことがないぐらいになめかしく感じた。

「すごおーく、アブナイ人か、よね?」

指先が、俺の左目に触れた。

すると俺の左目が激しく熱を持ち、あの鈍痛が走った。

「つがあ!?

思わず手を振り払い、左目を抑えた。

鈍痛だけで、血は出でていない様子。

「あらあ、どうしたのかしら? 私が介抱させて頂くわね?」

何やら本能が危険を感じて逃げようとするが、声も出ず、身体も動かなくなつていた。

俺は、為す術もなく女に手を引かれて行つた。

いつの間にか眠っていたようで、振動が俺を起こした。

「イイは……？」

さつと身を起こすが、何やら薄暗い屋内……荷馬車の荷車に似た空間の中に居る。

左目の痛みもなくなつており、身体も自由に動く。
どうしようか思案を巡らせていると、不意に振動が止んだ。
聞き取りにくいが、人の話し声が聞こえる。
それが終わると、荷車の戸が開けられた。

そこには屈強そうな男を数人従えた、クオールが居た。

「目が覚めたかしら？」

先程までのほんわかとした雰囲気から一変、獲物をいたぶる肉食獸のような目になつていた。

「やっぱ男は単純なのよね。 簡単な催眠でも引っ掛けってくれるんだもの」

つまり、さつきのは魔法だつたのか？
全く分からなかつた。

「あなたこれからどうなるか分かるかしら？ 奴隸になるのよ？
どう、絶望したかしら？ 家で待つている恋人にももう会えないの
よ？ ふふ、ふふふふふふふふ」

楽しくて仕方ないと言わんばかりの笑顔。
完全に狂つてやがる。

「…………のか？ 僕を怒らせて」

実は、ミラードラゴンを倒すときに、痛 では倒せなかつた時
の為に創造しておいた魔法がある。

と言つても、一撃必殺の技ではないが。

「ふん、強がりは好きじゃないの。 そんな足枷と手枷を付けられ
ていながら私達を相手に、なん……か？」

言い切る前に、クオールの身体が溶け始めた。

それを用心棒らしき男が止めようと俺に襲い掛かるが、 痛 を

発動して思いつ切り両目を凝視。

男は為す術もなく崩れ落ちた。

俺は錯乱するクオールと、狼狽する用心棒の様子を見て自分の優位を確信。

取引を持ちかけることにした。

29 傷と親子（前書き）

これからはもう一つ更新できるか分かりません。
感想や評価、要望等お待ちしております。

「おいお前ら。助かりたいなら、取引をしよう」
その言葉に、クオールが慌てて叫ぶ。

「な、何でもいいから早く助けて！」

「喚くな」

左目をクオールの崩れ行く全身の内に呑わせると、絶叫して膝をついた。

それを見て、誰も反論異論は出来なくなつた。

「いいか？まずは俺のこの手枷と足枷を外してもうおつか

すると即座に、鍵が投げられた。

左目を逸らしていても、誰も襲い掛かつては来ない。

「……よし。次は、俺を街まで連れて行ってもらおうか

「そ、それは……出来ない……」

用心棒の一人がそう言ったので、みせしめに 痛で翻つて気絶させた。

気付けば俺は、随分と苛立つていた。

自分の迂闊さと弱さに、だ。

「さあ、早くしないとこの女が溶けて無くなつてしまつぞ？」

しかし、誰も反応しない。

女も、苦しそうに息をするだけでもう叫びもしない。

「……止めた」

俺は魔法を解いた。

すると、先程まで溶け出していた女は何事もなかつたかのように戻っていた。

いや、元々何も起きてはいなかつたのだ。

俺の『闇』魔法の幻術を使つたに過ぎない。

誰もがその光景に呆然としているのを尻目に、俺は荷車を降りて用心棒達の間を通り、それを遮ろうとする者もいなかつた。

「なんじやこりや……」

周りを見渡すとここは、広大な敷地を持つ巨大な邸宅だった。

「おや、客人かね？」

その余りの大きさに絶句していると、馬車の方から声が聞こえた。

「誰だ？」

「このマルシアの上級貴族、ルバスだ。客人ならこの屋敷に招待しよう」

何故ここに連れて来られたのか、この目の前の男とクオールにどういう関係があるのかは分からないが、いざとなれば魔法で切り抜かれるだろうと思い、招待を受けることにした。

うずくまつたまま動かないクオールに一瞥くれて、邸宅へと入った。

そこは正しく、男にとつては楽園だった。

出迎えに来たのは、最早全裸に近い服装をした美女二人。薄い布を胸に巻き、意味を為さない程短いスカートという出で立ち。

「お帰りなさいませ」

「うむ、今日は客人がいる。もてなしてやつてくれ」

「分かりました」

一人がルバスが上着を脱ぐのを手伝い、もう一人は奥へと消えて行つた。

二階の吹き抜けの廊下からも同じ様な格好をした女性が何人も：

「客人よ、良かつたら名を申してくれるかな？」

「竹中だ」

下の名前は、明かしたくなかったので苗字だけを言うと、ルバスはそれ以上は追求しなかった。

「では竹中殿、貴殿には使命を与えよう。あの庭先ではいつくばつていた女を殺してきてくれ。別に犯しても構わぬ」

「何故だ？」

「何故、か。使えんからだよ

「何？」

「あいつは私の娘だ。他にも十人近い兄弟姉妹がいるが、あいつだけ出来損ないなのだ。折角使つてやつているのに、仕事も出来ずに出でなくて殺してやりたくなる」

通された居間らしき所には、既に数々の料理と酒が用意され、廣々とした二つのソファーにはガーター等の下着姿の女性が四人待機していた。

その時確信したのは、彼女達はやはり皆奴隸だったということ。

「……あんたは何を求めて暮らしてるんだ？」

「女と金だ。さて、座り給え。交渉と行こうか

「一体何の？」

「竹中殿が私に売る命の値段だ。私は……竹中殿に一億ルーピアの値段を付けよう

「残念だが、金じゃあ俺は買われない。それに、前提が間違つ……つて……い、る……」

ルバスの目が妖しく光り、吸い込まれる様な錯覚に陥る。これは一度経験した……ような……。

「……ふう。手間かかるぜ、この野郎。クオールの幻視まで解きやがって。まあいい。お前が新しく俺様の手駒になつたんだ。がつぽり稼いで、ぱっちり美人を連れて来るんだぞ」

「はい、ルバス様……」

目の光りが消えた少年にそう命じると、ルバスはソファーに座り、いつものように楽しんだ。

狂ったようにあらゆる欲に溺れて……。

クオール

私は猛烈な吐き気に見舞われていた。
部下の用心棒は、あの少年の謎の魔法に倒れた仲間を介抱してい
る。

私が指示したからだ。

とにかく、自分の行いを途切れ途切れの記憶から振り返ると、人
さらいの真似事をしていた。

あの少年も、だ。

何故こうなつてしまつたのか、その原因は明らか。
一家に伝わる秘法、幻視を父にかけられてしまつたことだ。
しかし、何故幻視をかけられてしまつたのかが分からぬ。
ただ、幻視をかけられる数日前から父がおかしくなつたのは分か
つてゐる。

元々は下級貴族の家だつたのに、いきなり奴隸商を始め、私も手
伝わされそうになつた。

そうして、それ程贅沢でもなかつた家に大きなお金がどんどん入
つて來た。

やがて上級貴族に格上げされ、父さんの方針で兄さんや弟はそれ
ぞれ地方の公爵として独立させられ、姉さんは名家へと嫁がされて
行つた。

唯一残つた私は、反感を抱きつつもここに残つて用心棒の頭とし
て暮らしていたのだが……ある日突然、幻視をかけられた。

それはもうどれだけ前の話なのかは分からない。
でも、何か口論をしている時から記憶がない。

「あ……う……」

身体の変調は全く収まらない。
まるで地獄だ、と思つた。

「ひつ！？」

誰かが近付いてくる気配と、部下の悲鳴。
多分さつきの少年だ。

吐き氣を堪え、僅かに頭を上げてみれば、果たしてその少年だった。

中で幻視をかけ、私を始末させる気なのね、父さん？
最後まで自分の手は汚さないのね……。

さつき目が合った時、幻視が解けているのが分かったから、もう利用価値はないってことね？

でも、私はあまりにも汚れ過ぎたんだわ……もう、許されない……。

右侍

「づくまつたままのクオールは、じりを一瞬だけ見遣ると、諦めたように頭をまた地に戻した。

「くそ、姫をお守りしろ！」

部下の用心棒全員が立ちはだかつた。

随分慕われているな、と感心しながら両手を挙げた。

「俺は、操られてなんかいない。だからちょっと話させてくれ

しかし、尚も動かない彼ら。

その対峙を終わらせたのは、クオールだった。

「君は……幻視を跳ね返せるって言うの……？」

苦しい息の中、ゆっくりと立ち上がった彼女は意外そうに尋ねた。俺は頷いて肯定をあらわすと、じっと目を覗き込まれた。

「……本当みたいね。目が生き生きしてるもの」

「しかし……」

部下はまだ疑いを持つてはいるようだが、上司には逆らえず、すぐごと引き下がつた。

「俺は、公国で人事に関する仕事をしている。そこであなた達を保護した上で、国に報告させてもらひ」

奴隸商は、国によつては重罪であり、マルシアも重罪として扱っている。

不正の証拠を手に入れた以上は報告するのが義務だ。

それに、魔法を使って人を使役することも罪になつてはいる。

「そうなのですか……。私は、父に改心してもらえるなら、罪として罰して欲しくはありません」

「弱つたな……。俺から口添えしてみるから、それでいいかな?」「はい……お願いします」

「じゃ、街まで案内してくれ」

全員の移動となると馬車だけでは足りない様な気がしたが、部下は屋敷に残り、俺がクオールを処断した体で動いてくれるそうだ。よつて、帰りはクオールと二人っきりになった。

馬を一頭借り、俺が手綱を持って出発した。

「……なんだ？」

広々とした荒野に差し掛かったところで、大人しく御されていた馬がいななき、足を止めた。

一応ランタンを持っているが、見る限り異変は分からぬ。
「恐らく、魔物だと思います……。私が行きます」

怖じけづく馬から降り、背の大剣に手を掛けた。
まだクオールも魔物の正確な位置を掴んではいない様子。

「……右手、すぐそこ…」

魔力で魔物を検知すると、既にこちらに猛烈な勢いで迫つて来ているのが分かつた。

それ故の警告。

クオールはそれに反応して、大剣を引き抜いた。

瞬間、剣に描かれた炎の模様から火が噴き出し、一振りで魔物を焼き尽くした。

しつかり剣を振り抜き、また背に大剣を背負い直すと、何事もなかつたかのように戻つてきて馬に乗つた。

「……その大剣……」

「今流行りの属性剣を、ちょっといい鍛冶屋に打つてもらつただけですよ」

性能が良ければあんな派手なことも出来るのか。

俺も刀に魔力を込めて作つてみようかな？

「……ところでの魔物は何だったんだろう？」「結局姿は見ていない。

しかしクオールは首を横に振つた。

「暗かつたので、結局どの魔物かは分かりませんでしたわ
ちょっと気になりつつも、馬を進めた。

駄馬でもないのに、走れども走れども荒野から景色が変わらない。
確か街の周りに荒野なんか無かつたと思つただが。

あと、怒りが無くなつて思つたが、クオールには敬語を使おうと思つ。

長幼の序つてやつだ。

「あの、そろそろ休憩しませんこと? 馬も疲れてますわ」
クオールにそう言われて気になつたことが一つ。

「街まで、あとどのぐらいかかります?」

「この調子なら……半日程度でしようか」

俺は考え得る最悪の予想が的中していた。

眠つていたのは数時間ではなく、一日から数日といつになると家に帰れば可愛い顔をした鬼に説教される……。

「そうですか、とりあえず馬を休めるとしましょう」
試したいこともあるので、一日馬を停めた。

イメージ的には振るうと、あの炎の様に燃やしそくす感じだ。早速、試し切りがしたくなつたが、生憎周りに魔物の姿は見えない。

なら、クオールと切り合つてみるか。

「どこに行つてらしたんです？」

戻つてみれば、岩の上に体操座りをするクオールに出迎えられた。見ようによつては拗ねているようにも見えなくもない。

「ちょっと用事がありますして。 それより、腕に覚えがあるなら切り合つてみます？」

すると、クオールは上品な顔に似合わない好戦的な笑みを浮かべた。

「いいですわよ？ 我が剣技をとくどご覧あれです」

言つなり、クオールは岩を蹴つて剣を背から素早く引き抜いた。不意を突く先制攻撃。

「せあああつ！」

気合いと共に振るわれた大剣は炎を激しく噴き上げて迫つてくる。俺は慌てずに刀を抜刀、鋭く一閃。

「「え？」

しかし、次の瞬間には一人共が、思わず声をもらしてしまつた。俺の刀に宿る《闇》が、炎と大剣、さらにはクオールを飲み込んでしまつた。

「うわわわわー!?」

慌てて刀を鞘に戻し、空中から自由落下するクオールを受け止めた。

「う、うう……」

良かつた、大事には至つてないようだ。

地面に刺さつた大剣も傷だらけだが、折れとはいない。

「クオールさん、大丈夫ですか？」

「……あれ、私……？」

「一瞬氣を失つただけですよ。 怪我もしていないです」

「そつかあ、負けちゃつたのね……」

残念そうに呟くクオール。

美人の悔しそうな顔も様になるものだ。

「すいません。まだ手加減出来てなくて……」

「いいのよ。……あなたの『闇』は、純粹なあなたの魔力よね？」

「…………ええ」

何故こうもすぐにはれるのか。

「あなた、凄い魔法騎士になれるわ。私、”炎姫”がお墨付きをあげますわ」

この人も二つ名持ちの傭兵か。

「ありがとうございます」

「…………一つ、隠してたことがあるの。聞いてくれるかしら？」

「なんでしょうか？」

お姫様だつこされたままのクオールは急に改まつたので、真剣に次の彼女の言葉に耳を傾ける。

「実は、父の私設部隊がもう私達を包囲してるの。残念だけど、ここで一緒に死んでもらいませんこと？」

その言葉が合図となつたのか、武装した兵士が何十人となく姿を現した。

「…………なるほど」

ナメられたものだ。

こんな人数で俺を殺せると思っているのか。

「私は…………やはり父には逆らえません……。せめて、あなたの手で私の首を切り落としてはくれませんか？」

「すみませんが、少し眠つていて下さい」

兵士の殺氣が増したことを感じ、クオールを魔法で眠らせた。

「…………小僧、投降すれば命は助かるかもしけんぞ」

先頭に居た兵士が口を開いた。

俺は『闇』を込めた刀を抜いて、答えとして拒否を表した。

「構わん、やれ！」

兵士の号令により、四方八方から兵士が殺到する。クオールを肩に担ぎ、片手だけで刀を振るつ。

すると噴き出した《闇》が兵士を包む。

《闇》は兵士を内と外の両方から喰らい、飲み込む。

その異様な光景を見てしまつた、まだ俺の攻撃範囲外にいる兵士の動きが止まつた。

近くに居た兵士は腰を抜かしてへたれ込み、俺の《闇》に飲まれるのを待つてゐるかの様だ。

「……さつきまでの威勢はどうしたんだよ」

「あ、悪魔だ……いや、魔王だ……」

軽く挑発するが、誰も応えない。

讐言の様に何やら呴く者がいるぐらゐか。

これが、”天児”の力つてやつなのか。

こんな力を持つていながら、俺は一度殺されているのだ。

嗚呼、とても腹立たしい……。

「 爆 」

刀を振るつのも億劫になり、片つ端から兵士の心臓を潰していく。無性にイライラして、もつと田の前の虫けら共を苦しませて殺しあくなつた。

俺は、また一つタガが外れたようだ。

「うつ！？」

足元に居た一人の兵士の心臓を潰す寸前で固定した。

思つた通り、あまりの激痛に身もだえし、声すら出せない。

「お前が大将か？」

投降を提案した兵士を見つけて話掛けた。

「そ、そうだが……」

明らかな怯え。

戦意は微塵も感じられない。

「もう帰れ。これ以上は無益だろ？」

「う、あ……う」

「帰れ

苦しませていた兵士を解放。刀を納め、クオールを担いだまま馬に乗って俺はその場を去った。それを邪魔する者はいなかつた。

「……」、「は？」

眠りから覚めたクオールは、自分が担がれているとは流石に気付いていない様子。

「馬の上で、俺に担がれてるんですが

「……逃げられたのね、私達」

「ええ。少々殺生をしてしまいましたが」

一度馬を停め、休憩することにした。

クオールの話では、あともう少しでマルシアの街に着くそうだ。

「……何故私を殺さないの？」

神妙な面持ちのまま、クオールが呟いた。

もしかすると独り言だったのかもしれないが、俺は答えることにした。

「殺す理由もないですから」

「……」

彼女の表情は変わらず、沈黙が場を支配した。

確かに、俺がただの傭兵だったら感情に身を任せて彼女を殺していたかも知れない。

だがしかし、俺はただの傭兵どころか”天児”なのだ。

あれぐらいで危機とは呼べない。

だから、少しごらい不満に思つても殺したいなんて思わない。

「……」、「は？」

一瞬目を離した隙に、クオールは胸元から小刀を取り出し、自らの喉を切り裂こうとした。

どうにか俺が間一髪で小刀を弾き飛ばし、自害を阻止した。

「何をしているんですか」

「私にはもう生きる資格などありません……。今、結果的に父に逆らう格好になってしましました。何一つ自分を貫けずに、おめおめとは生きて行けません……」

クオールの頬を涙が伝う。

俺は彼女の事情を知らない。

しかし、力になってあげたいとも思った。

マルシアの街のある丘はもうすぐそこだった。

30 魔王の存在意義（前書き）

感想、評価等おねがい致します。

「……そつか。 対策はこちらが練るとしよう。 とりあえずは待機していくれ」

マルシアの街に戻った俺は、早速イスビスの所にクオールを伴つて出頭し、事の一一部始終を説明した。

相手が上級貴族であるため、処罰は厳正な議論を重ねて決定するらしいとのことだが、クオールの身柄は国が預かるという形を取ることに決まった。

そこまでは良かつたのだが……。

「何故俺がクオールさんを預かるんですか？」

「あの家はそのためのものだ。 訳ありだつたり身寄りのない者を養うためのな」

だからあんなに家が大きいのか。

部屋数からしてどこと無くおかしいとは思つっていたのだが。

「それでは、私は報告に行つてくる」

その言葉を最後に、俺達は役所を出て家に戻つた。

可愛い顔をした鬼の待つ家に……。

気分は十字架を背負つたキリストに通ずるものがあつたような気がする。

結論だけ言つと、俺は正座をさせられている。

膝の上には亞里沙の小さな頭。

説教責めの後、疲れたのか安心したのか俺の膝枕で熟睡。

これが今回の罰だ。

ルイルは仕事でいなかつたので助かつた。

「……隨分と好かれてますのね」

俺の隣に上品に座ると、しげしげと亞里沙の寝顔を見ている。

「恋人兼奴隸ですからね」

「あら、珍しいですわね。 奴隸と対等に接していらっしゃるの？」

「ええ。 俺には奴隸とか言われても、なんかしつくり来ないと言いますか」

前世は人権とか平等と言った制度や権利が普通だった訳で、身分社会なんて全く以つて初めての体験だ。

「デミアでも奴隸と関わり合つたことは無きに等しいのも一因か。

「よっぽど田舎にでも住んでいらしたのなら、納得ですけれども……

… そうでもなさそうですね」

視線をこちらに移し、俺を観察するように全身を見回す。

「……どうして、そう思つんですか？」

「勘ですけど……あなたは普通ではありませんわ。 言うなれば、

魔王」

「魔王？」

ここに来て新ワード。

魔物だけでは飽き足らず、魔王か。

「はい。あの時は言いませんでしたけど、あなたは”天児”並の能力を有していますわ。 そしてあの《闇》……正しく魔王そのものですね」

俺が、魔王…… それは正しいのかもしない。

人を殺すことに恐怖を感じないからだ。

むしろどう惨たらしく殺そが考えてしまうぐらいだ。

「なら、俺がその魔王だったらどうします？」

「それはありませんわ」

「何故ですか？」

「魔王は今、父の中に居ますもの」

イスビス

右侍の報告を受け、議会の指示を仰ぎ、イスビスは即座に監査団を立ち上げて出立していた。

現在は頼れる相棒のキロムを始めとする、十人程度の規模で荒野を渡っているところだ。

キロムも、悪徳奴隸商に捕まっていた経歴を持つており、我に救い出され武術を教え込まれた。

そうして今は、我の隣で仕事をしている。

「ルバスめ……やはり罪を隠していたか」

我が独り言を呴くと、隣で手綱を執っていたキロムが律儀に聞き咎めたようで、ムツとした表情になつた。

「やはり老いぼれ議会の追及が弱いからですよ。 上級貴族つて地位だけでなんにも他の貴族と変わらないのに……」

キロムは元奴隸ということもあってか、身分社会には抵抗感と言うか、嫌悪感のようなものを感じている。

「あいつらは自分の保身の為に波風を立てたくないだけだ。 元々必要以上に仕事などするつもりはないさ」

「だからこそ、アタシ達が動く訳ですよね？」

最近は事務仕事が多かつたこと也有ってか、今回の出撃（監査だ

が）には非常に興味を持っている。

身体を動かしたいと愚痴を漏らして彼女にはいい気晴らしなのか
もしれない。

「確認だが、これはただの監査、調査に過ぎないといつこと忘れ
るなよ？」

「もちろん！」

非常に心配だ。

「イスビス隊長……あれは……」

隊員の一人が、砂埃が吹き荒れる荒野の前方を指差す。
その先に居たのは、ルバスだった。

「一体何故……しかも一人か？」

マントを纏つており、馬に乗つて佇んでいる。

もしかしすると、急いでクオールを追つて来たのか？
いや、いくら何でも一人で来るハズがない。

「ルバス殿！ クオール殿はこちらで保護している故、我々と共に
街まで来てもらえまいか！」

少し遠くにいるのと、風音で声が聞こえにくいかもしないので
大声を出すが、ルバスは動かない。

聞こえなかつたのかと思い、もう一度叫ぼうとしたところで異変
は起きた。

隣で人が落ちた音がしたのでそちらを見ると、隊員の一人が落馬
していたのだ。

視線を先程と同じ所に戻すと、ルバスはいなかつた。

「！？ 一体どこにつ……！？」

瞬間、人の気配を後ろに感じた。

「ぬ……ぐ……」

振り返ろうとするが、その前に意識が飛んだ。

その瞬間を以つて、イスビス監査団は全滅した。

右侍

「なんだって！？ って、魔王がどんな存在なのか分からないんですけど」

「言つなれば、歴史の変換点になる存在ですわ。世界大戦を巻き起こしたり、大災害をもたらしたり……」

やはり面倒かつ迷惑な存在なんだな、魔王は。

「何でそんな奴がお父さんに宿つてているって分かっていて放つておいたんですか？」

「魔王は、人そのものを宿り木として寄生し、やがて全てを食い荒らして乗つ取るんです。例え、殺しても近くにいる人間が喰われるだけで、根本の解決にはなりませんの……」

つまり、復活するまで放つておくことしか出来ないのか？

「国は、知つているのか？」

「ほんの一握りの上層部は、恐らく……。しかし混乱を恐れて何も出来ていなのが現状だと思いますの」

知らない間にエライコトになつてゐるみたいだ。

魔王の存在を知つたと思ったら、すぐに復活するかもしれないらしいとは。

「対抗策がないなら、しょうがないですね……。でも、魔王自体は倒せるんですね？」

「倒すと言つよつ……身体をバラバラにすることで封印するだけですわ

身体をバラされても生き返るとは。
流石は魔王と言つたところか。

俺も似たようなものか、首を切り落とされて生き返つたんだし。

「……！」

「どうしました？」

いきなり明後日の方に視線を遣つたクオールに問い合わせると、彼

女は震える唇で言葉を紡いだ。

「父……いえ、魔王が近くに来ました」

瞬間、地震が起きた。

街はいつも通りの賑わいに包まれ、平和な午後の時間が流れてい
た。

そこに突如、『闇』の槍が降り注いだ。

何十本にも及ぶ槍は、街を破壊した。

逃げ惑う人々を尻目に、一人の男が悠然と街の大通りを歩く。
しかし、その男は見るからに普通の人ではなかつた。

右手は血の朱に染まり、左手にはヒトの心臓が握られていた。
男は、心底嬉しそうにソレを口に放り込み、味わつた。
そして　咆哮した。

「……これは」

地震が止み、外に出ると、街のあらゆる場所が破壊され、瓦礫と

化していた。

そして、大通りから聞こえる悲痛な悲鳴と獣のよつたな咆哮。俺は刀を持ち、大通りへと向かつて走り出した。連合は、大通りに面している。急がねば。

亜里沙には後で謝つて許してもらおう。

「お前は……ルバス」

「ルバス？　ああ……この身体の名前かあ。　俺様は

「魔王、だろ？」

「分かつていいんなら話は早い。　”天児”、一緒に来てもうひづえ？」

構えられた右手は血に染まっている。

人を殺した証だ。

「悪いが、お前には用はない」

しかし、魔王の右手から『闇』の槍が発射されたことによつて強制的に戦闘になる。

「正当防衛成立つてことで！」

刀を引き抜き、『闇』を解放。

距離を縮め、魔王に一撃を繰り出す。

「なつ！？」

あらうことか、魔王は右手一本で俺の一撃を受け止めた。

『闇』の炎もその肌を灼かない。

「ふははは！　良いことを教えてやうつかあ、『闇』は魔王を祖とするのだ。つまり、『闇』では俺様には傷一つつけられん！」

瞬間、左腕がうなり、俺の腹を貫いた。

「がはあつ！？」

身体が痙攣し、俺は成す術もなく意識を無くした。
また……負けた……死ぬ、のか……。

『あーあ、また派手にやつたなあ』

『す、すいやせん……ついテンション上がっちゃって……』

『穴も塞いだし、内蔵も再生させたから、後は意識が戻るまでの辛抱だ』

『蹴つたら起きるんじゃねーんですか？』

『バカ。 それだからお前は半殺しが出来ないんだ』

『す、すいやせん……』

『まつたく……。 ん、目が覚めそうだね。 シン、飲み物と食べ物の用意を』

『へい』

「ん……」
「ん……」

目覚めると、いつしかの黒い空間だった。

腹には鈍痛が走り、これが現実であると認識。

「良かつた、起きてくれて」

声のした方を振り返ると、たつた一つ置かれた玉座に足を組んで座る男が一人。

容貌は日本人に近い。

しかし、田は人のそれではない。

「お前は……」

「僕からすれば三度目だが……君は一回田からしか覚えてないのかな？」

人の顔は覚える方だが、この世界で黒髪を見た覚えはない。

「……君が死を迎えた時、僕は君を死から生還させて来たんだよ?」

「…………一年半ぐらい前の話か?」

「そう、思い出してくれたみたいで何よりだ。君に掛けられていた呪いや封印から解放したのも僕だよ」

生憎、呪いや封印というものが掛けられていたという事実があるのかも知らない。

どうも話が分かりにくい。

「……記憶だけは喰われたままか。まあいいさ、力は戻っているみたいだし」

「記憶が喰われたまま?」

「そうや。幼少期の記憶がごつそり抜け落ちていると思つんだけど」

……言われてみれば、思い出らしいものは全く見当たらない。

「まあそれも良いとして……。ここに君を呼んだ理由を説明しよう

「まず、お前は何者だ?」

「おつと失礼。僕は、”世界を調和する魔王”だよ

「は?」

全く魔王という言葉のイメージとは結び付かないのだが。

「それも後で説明しよう。まず、君は”天児”である以上は”勇者”として魔王を倒す使命が与えられる。でも、君はそんなことを言われたことはないだろ?」

「ああ」

「実は、現在”天児”は一人存在しているんだ。誰だと思つ?」

「俺と……」

「今のデミアの王さ。今、彼が”勇者”として訓練をしているよ

そ�は言われても顔すら知らないしな。

言つてみれば赤の他人。

「それで？俺に何の関係があるんだ？」

「王は、君の顔を知つてゐる。だから、次に王に会つた時は首をぶつた切りされるよ」

「……俺悪いことした？」

「いや、これにはちょっとした理由があつてね。その説明は、この酒とつまみを頂きながらにしよう」

盃と料理の盛られた皿を持って現れたのは、ルバスの身体を持つ魔王、つまり俺の腹に穴を開けた張本人だ。

「彼には、君を氣絶させて連れて來いと言つたんだが……そういう結果になつてしまつた。ほら、謝れ」

「す、すいやせんでした……」

へこへこと頭を下げるど、盃と皿を置いて空間から出て行つた。

「話の続きだが……君達一般人の考える魔王とは、一度死んだ人間が生き返れば、それが魔王なんだ」

「俺も含まれるのか？」

「そうなるね」

”天児”改め魔王にクラスエンジつてか？

「それで、あのデミアのクーデターの原因なんだけど……。王国の上層部が”天児”を一国に一人も抱え込むのは危険だと判断し、片方の”天児”を抹殺しようとしたんだ。でも、前国王はそれを拒否し、妥協案として呪いと封印を君に掛けさせた。しかし、小規模の反乱に乗じて刺客を放ち、前国王と君を抹殺した。こうして上層部は予てよりの伝承通りに一人の”天児”に魔王討伐の任を与えたつて訳さ」

……話の辻妻は合つてゐるな。

こんな潜在能力を持つた存在が一人もいたら、確かに扱いにくいと思う。

それでも、殺されたことに関しては全く納得していないが。

「……で、”世界を調和する魔王”とは何かについてだが、君は魔王をどういう存在だと思っている?」

「迷惑」

「……もつもつとオブラーートに包むなりして欲しかったんだけどな……」

魔王は頭を抱えて呻いた。

「だつて魔王だし」

「まあいいや……。 では何故、魔王が存在していると思つ?」

「ん……。 分からん」

何故と聞かれるとは思わなかつた。

いるから、としか答えられない。

「正解は、君ら人間を異世界の存在から護る為だ」

「はあ?」

いきなり異世界の話を混ぜられても理解に苦しむばかりだ。

「魔王の復活によってこの世界は何度も危機を迎へ、そして魔王が封印されて救われて來た。 でも実際は、魔王が身を呈して異世界からの侵攻を防いだからこの世界は続いている」

当の魔王がそう言つても、あまり説得力はないのだが。

「……まだ信じてなさそつだね。 丁度侵入者が現れたみたいだし、一緒においなよ」

俺の答えを聞く前に、魔王は俺の手を取つた。

すると視界が揺れ、空間がぼやける。

やがて何も認識出来なくなり、次に視界が正常に戻ると、どこかの霧深い樹海のような場所に居た。

「大丈夫かい?」

「……ああ」

一瞬だけ車酔いの様な感覚に陥つたが、すぐに回復した。 その証拠に、自力で立つことが出来た。

「んじや、付いて来なよ。 面白いもんが見えるぞ?」

魔王に促され、樹海を歩く。

時折聞こえる鳥の声と、樹海を歩く足音以外に音がない。

霧囲気的には魔物とか居そうなんだが。

「ここ、魔物が強いから人間は入つて来ないんだ。 それこそ、

「勇者”でもない限りはね」

まさか、ここで”勇者”と会わせようとしているのか？

刀も持つているが、まだ腹が痛む。

「ここに何があるんだ？」

「……見えた。 あれだ」

歩みを止め、視線で俺にも見るよう促す。

視線の先にあつたもの。

それは、扉だった。

「なんだ、コレ……」

大きさは、あまり大きくない。

縦は一メートル、横幅は一メートル程度の黒い扉。

「俺達はコレを、”冥府の門”と呼んでいる。 ハッキリ言って、

この大きさは珍しいな」

「どういうことだ？」

「ここから出てくる奴は、人型に近ければ近い程強い。だから、この扉を創つて来た奴は相当なものだと思う。 ……ご本人が来たみたいだ」

「珍しい。 この世界の住人なら、近寄りすらしないこの霊域に人が二人も

現れたのは、一見普通の人間の男だ。

しかし、その霧囲気は人のソレではない。

本能が俺に警鐘を鳴らした。

死ぬかもしれないから逃げる、と。

「……”魔王”に、”天児”か。相手に不足なしつ！」

男は突然魔王に襲い掛かつた。

「《闇》、 戦 ！」

魔王は落ち着いて魔法を詠唱。

真っ黒な戦が現れ、それ振るつて男に応戦する。

男は丸腰のハズだが、魔王は押されている。

演舞のような攻防が続き、やがて力比べが始まつた。

「魔王、今回の戦も楽しみにしているぞ？」

鍔せり合い（？）になつた瞬間、男はにんまりと笑つた。

それは、生まれながらの戦鬪狂の顔そのものだつた。

「貴様だけでも始末しておけば、幾分か楽になる。《闇》、 縛

激流 ！」

地面から突如現れた影の帯が男を捕らえ、《闇》の魔力の激流が容赦なく襲い掛けた。

巻き込まれた辺りの木々は全て薙ぎ倒され、地面はえぐられ、魔力の流れる轟音が響き渡つた。

「…………」

正直驚きで声も出ない。

あれだけの攻撃を受けても、男はかすり傷程度しかダメージを負つていないのでから。

「ふう……。流石の俺でも危なかつたぜ、これは」

男は肩を回したりして身体を解すと、今度は俺を見て笑つた。

「さあーて、”天児”君はどうかなー？」

反射的に刀を構えた。

それを開戦の合図としたのか、突撃。

どうも俺の腕じや打ち合えそつもない。

ここは、《闇》 痛 ！

「つー？」

男は突撃を中断し、身体を走る苦痛に悶え始めた。

「……ぬう、あああああ！ って言つたか！」

しかし、俺の中で芽生えた希望は打ち碎かれ、男は突撃を再開させた。

「せやあ！」

刀で迎え撃つ。

噴き出した《闇》が男の身体を灼く。

だが、またしても男はより強力な反撃を以つて俺を吹き飛ばした。見た目はただの正拳突き。

その実態は、《炎》を拳だけに集約した濃密な一撃。

物理法則に従つて吹き飛ばされた俺は、大木に全身を叩きつけられた。

「がはっ」

血を吐き、苦しい息で近付いてくる男を見るので精一杯だった。

魔王は、遠くでへとへとになつてている。

おいおい、何バテてるんだよ……。

「ふん、もう一人の”天児”の方がよっぽど強いんじやないか？ こんなに魔力の扱いが雑だとは思わなかつたな」

「……げふっ」

腹を軽く蹴られた。

また、僅かながら吐血。

「…………興味なくなつた。 魔王と帰りな」

男は心底つまらなさそうに咳くと、踵を返して扉の所へ戻つて行つた。

扉の中に入ると、扉は虚空へと消えて行つた。

残されたのは、倒れ伏した哀れな”魔王”と”天児”と呼ばれる男二人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7443v/>

転生とチートと復讐そして奴隸

2011年10月6日21時40分発行